

風

36

高
等
警
察

本
縣

禁
止
通
牒

三
年
七
月
二
日

函

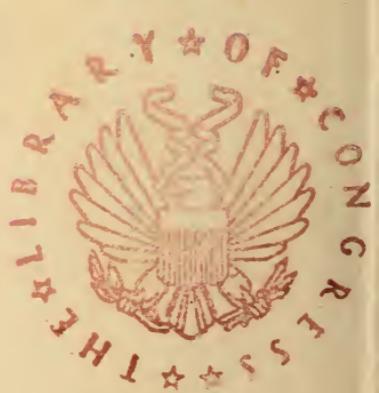
風

號

3.6

永久保存

274546



Flaubert, Gustave

世界大著物語叢書

第一編

マダム・ボヴリイ

フローベル作

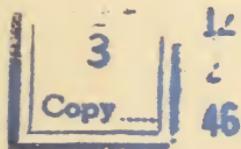
田山花袋編

PQ 2246

M2J3

1914

Open
Japan
Cage



96-840397

西洋大著物語叢書「發行の趣旨」

近時泰西の作品は頻々として我が文壇に移植せられるが、其餘りに大部なる爲め、傑作大著の名高くして、尙ほ翻譯に躊躇せらるゝもの尠くはない。小社こゝに見る所あり、文壇の諸名家を煩はして本叢書を刊行することとなつた。即ち幾百頁幾千頁の大作を此の掌大の冊子に短縮し、其精髓とも云ふべき部分の抄譯を、簡潔なる物語風の筆によつて連綴し、梗概を語ると共に原作の感味を髣髴せしめようとするのである。又、名教に害ありとして官憲に諱まれ、市に上はすとの出來ぬ名篇も、取捨按排其よろしきに従うて、本叢書中に加へることとした。要は、セ・ツ・シ・ヨ・ン式の簡捷を尙ぶ時勢の要求に應じて、世の文學研究者に便せんとするの微意である。(發行者識)

マダム・ボワリイ

第一編

一

授業最中校長が一人の新入生を伴れてはいつて來た。而して、その少年を受持の教師に紹介した。

新入生の少年は、隅の扉の後に立つてゐたので、能く見えなかつた。年齢は十五歳前後、田舎出で、身長は何の生徒よりも高かつた。髪の毛は額に切り下げる、肩幅は狭い方、緑色のデヤケットの腋の下あたりがいかにも窮屈さうだ。ズボンの下から青い靴下に包まれた踝が、出張くろぼしでは

一

つて、頑固な鉢打の靴は磨かれてなかへた。

生徒が皆揃つて復誦し始めた時も、彼は耳を側立そばだて目を瞬まばつて、唯じつとお説教でも聽くやうにして居たので、遂に先生から注意された。君も他の生徒と同じやうにするのだと。

生徒等が敷場へ入る時は、手でいたづらが出来るやうに、帽子を床の上に投げ出すのがきまりであつた。けれども、此新入生の少年は、さうする習慣を知らずに居たのか、それとも爲するのが怖かつたのか、大切さうに帽子を膝の間に持つてゐた。その帽子が、一種異様なものであつた。形は楕圓形で、鯨骨で突張つっぱらして、縁には三つの瘤こぶが出来て、その天邊てつべんには、纓ふきのかはりに金絲の紐がきらきらと光つてゐた。

「お起ちなさい。」

かう先生に聲を掛けられて、驚いて飛び上つた途端に帽子が轉げ落

ちたので、他の生徒が、どつと笑つた。慌てゝ拾ひあげると隣席の生徒
が肘を、つ、突いたので、再び轉げ落ちた。再び屈んでそれを拾はうと
した。

「兜なんか、拋はつて置きなさい！」

先生が少しおどけ氣味で斯う云つたので、他の生徒は又、どつと笑つ
た。彼は眞赤まっかになつて、どぎまぎした。

「お起ちなさい。」と先生は云つて、

「貴君の名は何といひますか。」

彼は、おどくと、震へる幽かな聲で返事した。判らなかつたので、
「今一度！」と催促された。繰返した言葉は、矢張他のがやがやに搔かき
消される。

「判然はつきり」と先生は叫んだ。「もつと大きな聲で。」

彼は渾身の勇氣をふり絞つて、人を呼びかける時のやうな大聲で叫んだ。

「シャルボワリ。」

生徒等は口々に、シャルボワリ、シャルボワリと叫んだり、唸つたりして、どつと笑ふ。そのあとから又彼方あの方此方こちでくすくすと初めて、押し殺さうとする可笑しさかわいがさを再び、どつと笑聲に迸らす。

先生は幾度も聞いたり綴らして見たりして、漸く彼の名をシャルル・ボワリイなる事を知つた。そして教壇のすぐ前の怠惰生徒席へ坐らせたが、彼は落着かぬ風でもじもじした。

「何を搜して居るんです?」と先生に聞かれて、
「私の帽子。」と、さも困つたといふ顔附で、おづくと四邊あたりを見廻はした。

「もう静かにするのです。」と、先生は、もう生徒の笑ふのを許さなかつた。而して、厳格な態度で課業を命じた。彼には特別な題を與へて、「心配せんでもよい、帽子はすぐ分ります。誰も取るものはありますん。」と優しく云つた。

彼は行儀よく坐つてゐた。時々悪戯な新しい學友達がペン尖さきで彈はじきつける紙玉が飛んで来て、彼の顔に當つた。彼は手で顔をこすりながら、身動きもしないで、じつと下を見て課業に従つてゐた。

こんな風にして、シャルル・ボヴリイは新しい學校生活をはじめた。あまり頭脳あたまのよい方では無いが、忠實にこつゝと勉強して行つたので、どうやら斯うやら他の生徒に尾いて行くことが出来た。

彼の父、シャルル・デニイ・バーソロメ・ボヴリイは一時は軍醫少監補

を勤めてゐたが、何か不都合な事でも爲出來しでかしたかして職を罷めた。

彼は仲々美男で、お饒舌上手で、而してお洒落しゃれであつた。歩く時は靴の刺馬輪さしあわをがちやく鳴らし、手には指輪ひきわをびかくさせ、いつも色合の凝こつに光澤こうざつのある衣服ものを着てゐた。職を罷めて後程なく豫よねて自分に惚れてゐた足袋屋の娘を六萬法ふらんの持參金附で貰つて、二三年間はその金で贅澤に暮した。當にしてゐた舅の財産が、その死後じうご些すことも遺されてゐなかつたので、足袋屋商賣を續けてやつて見たが、少なからず損をして、田舎に引込んで終つた。

が、足袋屋をしてもキヤラコの相場が分らぬほどの呑氣者が、何をやつたとて甘く行く筈が無い。たとへば、飼馬に仕事もさせずに自分が遊びに乗り廻はす、賣る可き林檎酒ライダアは呑んで了ふといふやうな、しのないやり方なので、何をしても失敗し、商賣は一切已めて了ふ事

とした。而して、コーとピカアディの境に當る土地に一軒の別荘風の家を借りて、自分の悪い事は棚に上けて、天を呪ひ、人を怨み、未だ四十五だといふに、人間がいやになつたなどと拗ねて、隱遁的の生活を送つてゐた。彼の細君は初めは、彼を愛しもし敬しもしたけれど、次第に愛想が盡きて來て、減つて行く酒が酸く變つて行くやうに、其優しい寛大な心持は、激し易いいらだゝしい心持に變つて行つた。たとへば、幾夜となく茶屋酒に酔ひしれて歸る事がつゞいても、はじめの中は、だまつて忍んで居たが、しまひには口惜しさに口も利かぬといふ風になつたのである。

一人息子のシャルルは、生れると里子に出したが、やがて手許へ引きとつた時、母は貴公子が何ぞのやうに可愛がつた。父は母が優美に優美にと育てゝ行かうとしたのに反し、何でも男らしく頑丈にといふ

スバルタ主義で、わざと靴も穿かせず、夜は態々冷たい室に寝かせ、ラム酒を飲む事、宗教を蔑視する事等を教へた。しかし、元來おとなしい性質の子供は、より多く母の希望に添はうとした。

夫に失望した母は、その破れた夢を我子の未來に繕はうとした。他日優秀な人物となつて政府の要路に立つ——その丈の高い立派な我子の姿などを、まざくと眼に映しつゝ、始終、自分の側に引き寄せて、讀書や、歌を歌ふ事やを教へた。

『そんな事が何になる？ 實際社會に出て成功するのは何時も向見ずの腕白者だよ。』

父はいつも斯う云つた。母は凝じつと唇を噛んで居た。而してシャルルは野原を走り廻るが儘に任された。鳥に石を投げつけたり、棒で鳶鳥をたゝいたり、森の中を踊つて歩いたり、寺の鐘をつく綱にぶら下つ

て空中に飛び上つたり——天晴腕白者となつて、野中の榦の木のやうにのツばに育つた。

シャルルが十二の時、母は愈々學問をさせる事にして、土地の牧師に頼んだ。併し牧師の閑の時に、ちよい／＼とやる無秩序な、毎日僅か宛の日課は、殆ど何の役にも立たなかつた。熱い日などは、子供が寝込んで了ふと、先生もいつの間にか、大きな口を開けて鼾いびきををかき初めてゐるといふ始末。近所の病人に祈禱を捧げて歸つて来る道すがら、野原に遊んでゐるシャルルを見つけた時など、自分の傍へ呼びよせて、木の根の處でほんの十五分位講義してやる事はあつたが、それはほんの申譯丈に過ぎ無かつた。

こんな勉強では何にもならないので、母は務めて、もう一年シャルルの教育をのばすこととした。而して十三歳になつた時、シャルルを

愈々ルーアンの學校に送つた。今は十月の末、聖ローマン祭の時であつた。

シャルルはおとなしい少年で、遊ぶ事が好きであつたが、しかし課業には能く精を出して、教場でも油斷が無かつた。寢室では能く寝、食堂では能く食つた。而して毎週木曜日の晩にはきまつて、母に手紙を書いた。赤いインクで何くれとなく長々と書いて、三つの糊紙で封じて送つた。

彼が常に中程の席を占めて居られたのは、全く其勉強のおかげで、一度は博物で一等證をさへ取つた。三年目の終に、彼の兩親は退學させた。醫學を研究させようとする目的で――。

彼の母は自身で出かけて、豫て知合のリュ・ウベック河の畔の染物屋の四階の一室を借りて彼にあてがつた。寄宿料の事から、諸道具の買

ひ求めまで我子の爲にあらゆる世話を焼いた。そして都の獨住居、返すぐも心得違ひの無いようによくどく云ひきかせて、一週間程経つて後歸つてつた。

解剖學、病理學、生理學、藥劑學、化學、植物學、臨床講義、療法術——かうした新しい課目は、闇の中に隠された寶庫の戸のやうに思はれた。どれも未だ名前すら聞いた事の無い學課であつた。いくら熱心に聽いても薩張判らなかつたが、分らぬなりに彼は遮二無二勉強した。一回も休まず出席して、せつせと筆記した。目を縛られてぐるぐる廻つてゐる磨粉馬のやうに、かれは自分が何を學んでゐるかも知らずに、唯學んだのである。

少しでも餘計に費らぬやうにと、彼の母は毎週爐で炙つた犢の肉を息子の許に届けた。それを朝飯に喰べて、彼は毎日出かけた。晩飯が

濟むと、自分の部屋に引籠つて一心不亂に勉強した。

しかし、斯うした秩序正しい生活は次第に崩れはじめた。夕暮の窓によつて、赤い夕日をながめながら、ぼんやりとして物思ひに耽るやうな事も度々あつた。彼はだんだんと痩せて來た。たけ身長もめきくと伸びて、その顔は愁はしげの表情を帶びて來た。

彼は次第に學問に不熱心になつた。講義に出ない事が多かつた。幾日も學校を休んでのらくらしてゐる事もあつた。學問の方がなげやりになると共に、遊ぶ事が面白くなつて、いつか茶屋は這入いりを覺えた。禁せられた菓物の味を知つた。彼の體の中に眠つてゐたいろ／＼のものが目覺めて來た。何時の間にか流行唄はやりうたを覚えて、得意らしく飲み仲間に歌つて聞かせた。軽口かるくちも巧うまくなり、おどける事も上手になつた。しまひには女を口く説くくことをも覺えた。

かういふ風に遊んでばかり居たので、彼は肝腎の試験に落第して了つた。いよいよ開業醫の免状をもつて歸るといふので、彼の兩親は祝宴の準備をして其かへりを待つてゐた。彼は徒步で村境まで歸つて、そこへ母を呼び寄せて、不面目の次第を話すと、母は、それを試験官の不公平に歸して、決して息子を責めなかつた。却つて息子を慰めて、今後の事を自分で引受けた。

シャルルは再び勉強を始めた。今度こそはといふ意氣組で、すべての問題を鵜呑にしてかゝつたので、今度は首尾よく及第した。母の喜びは絶頂に達した、盛な祝宴が彼の爲に開かれた。

やがて、トストで開業する事となつた。此地には一人の老醫が居たが、其死ぬのを待受けて、その醫者の向ふ側に開業したので、これも皆母の肝煎きもじりであつた。母は次いで、彼に細君をもたせる事に就いて心

配した。而して一人の女を見つけ出した。それはデイエプに住んでゐる執達吏の寡婦さんで、當年四十五歳のデュベックといふ女であつた。魚の骨のやうに瘦せて、顔には疹がある女であるが、一年千二百法の收入があるといふので、婿の候補者は澤山あつた。だからシャルの母は、この目的を達する爲に大に戦はなければならなかつた。彼女は巧妙な手段で、競争者を打破つて、息子の爲に幸福な結婚を成功せしめた。

しかし、その結婚は豫期の如く幸福なものでは無かつた。金も體も一層自由になると思つてゐたのが、全然反対に、却て女の爲に束縛されねばならなかつた。此年とつた女房は常に夫を自分の權力の中に置いていた。夫の手紙は開封した。夫の行爲は一々探偵した。もし診察を受ける患者が婦人であると、彼女は隣の室で耳を掘つて監視した。氣む

づかしい事も一通りでは無く、やれ神經たかぶが昂るの胸が痛いの、やれ著物が悪いの、人の足音が響いて頭が痛いのと、小言の云ひ續けで、夫が家を出て行く時は淋いさしくて堪らぬと云ひ、夫が歸つて來ると、今にも息いきを引取るやうな様子をする。夕方になつて、シャルルが彼女の室へはいて行くと、女は瘦せた腕を夜具の下から出して、夫の首に縋りついて、自分の側に引きよせて、此頃は可愛がつて呉れぬとか他所に女が出來たのだとか、散々口說いた揚句、咳の止まる薬を貰つて、今少し可愛がつて呉れと頼むといふ始末であつた。

二

ある夜、十一時頃、門口に馬の留とまる音がしたので、夫婦は眼を醒ました。女中のナスタジイが迎へ入れた男は、一通の手紙を恭しくシャ

ルルに渡した。

その青糊で封じた手紙の差出人は、ル・ベルトウの或る百姓で、足を挫いたから至急診に来て貰ひ度いといふのであつた。ル・ベルトウまでは八里もある、此闇夜に八里の田舎道、シャルルの細君は夫に怪我でもあつてはならぬと心配して、先づ廐の小僧を道調べに先にやり、シャルルをば三時間程後れて出發させた。

シャルルは、午前四時、丁度月の上り始めた時分、しつかり外套に包まれてル・ベルトウに向つた。調子のいい馬の足音にうとくと眠りを催させ乍ら行つた。馬が道端の溝の縁に掘つてある荆棘で警戒した穴の前に来て、急に立ち留る度毎に、びつくりして目を覺まして、自分を待つてゐる病家の事を思ひ出し、これから診察すべき挫傷の模などを想像して見た。

日が上り始めた。身動きもせず、枯木の枝にとまつた鳥の小羽根が、
寒い朝の風に戦いで居る。遠く開けた村里の處々、家を周つた樹立が
廣い灰色の空に濃い董色を點じてゐる。

グソンギルに來た時、路傍に立つてゐた一人の子供が、

「貴方あなたは御醫者さんですか？」と聲を掛けた。それは今行かうとする
家からの出迎であつた。小供は先に立つて走り出した。

シャルルは、その子供の口から、病家の主人ルウオオルは有福な農
夫であること、前の晩十二日節に近所の家に招かれての歸途で足を挫
いたといふ事、女主人は二年前に死んで、一人の娘が専ら家政のきり
もりをしてゐるといふ事などを聞いた。

ル・ベルトウに近づくに従つて、車の轍わだちはだん／＼深くなつた。突然
路傍の垣根の穴へ飛び込んだ子供は、間もなくその道の外れの門を中

から開いて醫者を迎へ入れた。臺所口には爐火が盛に熾つて、下男共の朝飯が湯氣を立てゝゐた、壁に寄せてならべてある火斗^{ひのう}だの火箸だの、其他數多の臺所道具は、爐の火と、窓からさし込む明方の光とで輝いてゐた。

病人は二階に臥てゐた。色の白い綠色の眼をした、額の少し禿げた五十恰好の丈夫さうな小作^{こうさく}の男であつた。今迄ブランデイを呷つて空元氣をつけたりなどして、絶えず小言を並べてゐたのが、醫者が來ると俄に悄^{しお}げて呻^{うな}り出した。

凡そこれ以上雜作の無い患者は無いと思はれるほど、傷は軽かつた。シャルルは勿體らしい態度で、先づ種々と深切な慰撫を與へ、さて、治療にとりかゝつた。その間に下男は綿帶にする布を裂き、宿の娘のエンマは當衣^{おてぎ}を縫うた。エンマは度々針で指尖を刺し、その度に指を

口の中に入れて嘗めた。

シャルルは娘の爪の白いのに驚いた。綺麗に光つて象牙よりも艶々しく、巴旦杏の形をしたその根元が如何にも優しい。けれども手は餘り綺麗ではなく、關節の處が稍々荒れてゐた。最も美しいのは其眼で鳶色であるが睫毛の所爲で黒く見える。人を見る時は眞直に向いておくれるやうな様子は少しも無かつた。

療治が済むと、シャルルは下の室で出來合できあひの馳走を振舞はれた。二人前の膳が、洋叉なべふや肉叉にくばを載せて、寢臺の傍の大きな食卓の上に置かれてあつた。寢臺にはキヤラコの敷布しきふが敷かれてあつた。窓と向き合つて側に立つた大きな棚の箱からは鳶尾根と混つた着物の香が洩れた。室の隅々には麥の袋が置いてあつた。壁にはミネルヴの肖像がかゝつてゐた。

病人の話から天氣の話、夜中羊を襲ふ狼の話——醫者と娘とは食事し乍ら種々の事を話し合つた。娘は田舎は嫌だと云つた。殊に農事の監督を一切自分でしなければならぬので猶ほ嫌だと云つた。物云はぬ時は兎角噛みしめてゐる癖の娘の唇が、語る時はよく見えた。

娘の頸筋は白い折返しの襟から立つて居た。その髪の毛——作りつけの二房ふたごを寄せたやうに見えるほど滑かな澤つやのある髪の毛は、頭の曲線まきに沿うてスウツと出来る軟い線によつて二つに分けられ、兩鬢あだりの邊で美しく波打ち、後頭部で丸く組上げてあつた。頬の色は薔薇色であつた。胸の鉗ほたんの間には、男のやうに、鼈甲縁の眼鏡をさし込んで居た。

シャルルが主人に挨拶して室に戻つた時、エンマは窓に近く立つて庭を眺めてゐた。

「何か、お忘れで御ざいますか。」

「えゝ、私の鞭が——。」とシャルルはその邊を探した。鞭は壁と麥袋との間に落ちて居た。エンマが見附けて、取上げようとして身を屈めた時、後から同じやうに屈んだシャルルの胸が娘の背に觸れたのを感じた。鞭をシャルルに渡す時、肩越しに彼を見た娘の顔は赤かつた。

シャルルは三日目に來ると約束して置き乍ら、直ぐ其翌日來た。通通りがかりに一寸といふやうな風をして、それからも一週に二度は屹度來た。傷の経過は頗るよく、四十六日目にぶら／＼歩きの出來るやうになつた。皆、ボワリイを名醫だと評判した。老人はルーアンの醫者にも、これほどの人はあるまいと云つた。

シャルルは、何故ル・バルトウへ行くのを特に好んだか。患者の容體が大切だからか、藥禮の多いのを豫想したせゐか、自分では以上二つの理由に歸したかも知れぬが、果してさうであつたらうか。

ル・ベルトウへ行く日は朝も早く起きた。そして馬を急がした。馬から降りると草で靴を磨き、門に入る前には必ず黒い鞣皮なめしかばの手袋を嵌めた。其家のすべてが嬉しかつた。ルウォル老人が彼の肩を叩いて命の親だと云つて呉れるのも嬉しく、磨き立てた臺所を踏むエンマの木靴の音を聞くのも嬉しかつた。

娘はいつも門の處まで送つて來た。二人は馬が引いて來られる迄そこに立つてゐた。「左様なら」と云つた丈で別に話も無かつた。

一度、雪の解け頃、樹の幹からは水蒸氣が立ち屋根の雪は日に溶けた。その時、門まで送つて出た娘は、再び戻つて日傘パラソルを持ち出してそれをさした。その絹張の鳩の胸のやうな日傘に灑された日光は、娘の美しい顔をバツと照らした。娘は軟い暖かさに微笑してゐた。傘の上に落ちる雨垂あまだれの零が、一つ又一つと聞えた。

春の初めのとある日、ボワリイにとつて容易ならぬ一事件が起つた。自分の女房の財産を保管して居るランギュエルの公證人は、その金を拐帶して姿を消して了つた。而して、他にはいくらも財産の無い事が判つた。

此話がシャルルの両親の耳に入ると、父はあの老婆奴！嘘を吐きやがつたと怒鳴つて、臺所の椅子を滅茶々々に叩き毀した。そして息子に斯ういふお荷物を背負ひ込ませるやうにした原因を妻一人に被せて怒り狂つた。

二人はトストへ遣つて來て事情を糺した。シャルルの妻は涙を流して夫の腕に縋つて辯護を請うた。シャルルは調停した。が、両親は非常に怒つて歸つて行つた。

その後一週間程過ぎて、裏庭に乾し物を掛けて居た妻は血の混つた

唾を吐いた。そして、其翌日シャルルが妻に脊中^{せなか}を見せてカアテンを引きに窓の方へ立上つた時、

「あゝ、最う。」と溜息をして聲が弱つて行つた。遂に彼女は死んだ。葬式を済ましてシャルルは家に歸つた。ひとりで寢室に入つて、机によりかゝつて、沈黙の悲みに沈んで了つた。要するに女房は自分を愛して居たと、彼は今更のやうに思つた。

三

「私にも覚えがあります。私も貴方^{あなた}と同じやうな目に遇ひました。獨で野原へ行つて泣きましたよ、狂人のやうに悲みましたよ。けれども月日は次第になだめて呉れる。落膽なさるなよ、ね、氣を取り直しなさい、私の處へでも遊びに御出でなさい。娘がお噂してゐますで。」

薬禮を持つて來たルウオオル老人は斯う云つて慰めた。

シャルルはその親切に従つてル・ベルトウへ出かけた。何も彼も五ヶ月前の儘だ、梨の樹は最早花が咲いた。ルウオオル老人は元氣よく働いてゐた。老人は勉めてシャルルの心を引立てようとして、笑を催させるやうな話をした。

彼は獨棲に馴れるに伴れて、亡妻を憶ひ出す事も薄らいだ。却てすべてが自由になつていゝと思つた。その上、妻の死は仕事の上にも悪くは來なかつた。「氣の毒な人、何て不幸な。^{なん}」と人々は云つて呉れた。而して彼の名は弘がつた、患者も増した。氣が向くとル・ベルトウへ出掛けた。彼は根據の無い希望と曖昧な喜悅とを持つて居た。姿見に向つて髪を梳る度毎に、何となく人品が勝つて來たやうに思はれた。

或日の三時頃、ルベルトウへ行つた。皆畠へ出て留守だ。臺所には

板目を通して射込んで来る薄い日光が漲つてゐた。

エンマは例の室の、窓と爐との間に坐つて縫物してゐた。襟巻をして居ないので、露^{あらは}に出た両方の肩に小さい珠の汗の出て居るのが見えた。

エンマは彼が断^{ことわ}るのも肯き入れず、棚からキュラソウ酒の壜と、二つの小さい盃とを持ち出した。一方には波々と注ぎ、一方にはほんの注ぐ真似をして、盃を合せて自分のを口へ持つて行つた。盃は殆ど空虚^{むな}なので、娘は飲む爲に頭をずつと後に反り返らせねばならなかつた。それでも口に入らないので、娘は笑ひ出した。小さな歯並^{はなみ}の間から其舌の先をのぞかせて、一滴づゝ盃の底から受けた。

娘は再び座に返つて縫ひかけの白の木綿足袋を手に取上げた。仰向^{うむか}いて針を運ばせた。何も云はない、シャルルも黙つて居た。戸の下を

潜つて來る風が、板の間に塵埃ほこりを吹きつけた。シャルルはそれを憫然と眺めて居た。頭の中に脈打つ血の音に交つて遠く鳴く牝鳥めんどりの聲が聞えるばかりだ。エンマは間斷無しに掌の甲を當てゝ頬のほてりを冷してゐた。

此娘は春先から眩暈めまいに弱らされて居た。それには海水浴はどうだらうかとシャルルに聞いた。それを端緒に二人は學校時代の事なども語り出した。直に親しく打解けた。

二人して彼女の寝間へ入つた。娘は學校時代の紀念の品などを取出して見せた。亡き母の話もした。又話頭を轉じて冬を都で過したいの田舎の夏は單調であるのと語り合つた。娘の聲は話す事柄に従つて、或は鋭く或は悲しげに、或は囁くやうに低くも變つた。その大きな晴やかな眼が怡ばしげに見えたかと思ふと、又瞳を垂れて疲れ彷徨さまよふや

うな心持を見せた。

シャルルは夜家に歸つてから、娘の言葉を一々味ひかへしつゝ種々の事を考へた。あの娘は一體どんな人と結婚するだらう。「あゝルウオウル老人は富裕かねもたらだ、而して娘はあんなに美しい！」

夜も眠られない。喉が渴くので、水を呑む可く起き上つた、窓を開くと暖い風が吹いて来て遠くで犬が吠えてゐる。彼の頭はル・ベルトウの方へ向けられて居た。

シャルルは遂に結婚を申込まうと決心した。けれど、いざとなると言葉が出なかつた。

ルウオオル老人は、娘をどこかへ與つていゝと思つてゐた。シャルルの頬が娘の側に居る時に限つて赧くなるのを認めた老人は、心密かに彼の縁談申込を待ち構へてゐた。多少の難はあつても性質も先づよ

し、教育も相當にあるし、それに持參金を彼是云
ひさうな人柄でもあるまい。身上都合から云つても、都合がよい。老
人は獨言つた。「若しあの人が娘を欲しがるなら、遣つて了はう。」

ミケル祭の折シャルルは、ル・ベルトウへ三日間泊りがけで遊びに
來た。三日は速に經つた。ルウオオル老人は彼を送つて戸外へ出た。

「ルウオオルさん。私は貴方にお願ひがあるのでですが」と、シャルル
は思ひ切つて云ひ出した。

「さあ何卒お話し下さい。」と老人は笑ひ乍ら、

「貴方は私が何も知らずに居ると思ひますか。」

「ルウオオルさん、ルウオオルさん——。」とシャルルは呴つた。

「宜しい、何も被仰るなよ。」と老人は云つて、「何有彼女は何うとも
私次第だ、が、一應は意見も聞いて見なければならん。一寸こゝに待

つておいでなさい——。老人は娘が、うんと云つたらば、表の雨戸を押開いて信号するからと約して家に戻つた。三四十分経つたと思ふ時分戸の開かれたのを見た。

翌朝九時頃シャルルはやつて來た。エンマは艶くなつてゐた。ルウオオル老人は未來の婿を抱いて喜んだ。來春シャルルの喪の明けるのを待つて結婚の式を擧げる事とした。

四

結婚の當日となつた。一頭曳の馬車、二輪車、革の幌を掛けた乗合馬車などで方々から振舞客が集ひ寄つた。兩家の親族は残らず來た。皆今日を晴と着飾つてゐた。

一同は徒^{かち}で町役場まで行つて、そこで宗教上の儀式を済ませて歸つ

て來た。廣い野中の小徑こへりを丁度一筋の色絹いろぎぬを引摺ひきゆつたやうに見える行列はやがて三々五々ばらくになつてしやべり乍ら歩いた。眞先にヴィオロンを抱へた音樂師、次に新婚の夫婦、その後から親類や友人ががや／＼と續いた。エンマの衣裳は少し長くて、裾が地の上に曳き摺るので、時々停つてそれをたぐり上げた。そして裾にからまる雜草を手袋を穿めた手で拂ひ除けた。ルウォオル老人は新しい絹帽を被り、爪まで被はれるやうな長い袖の外套はなわを着て、シャルルの母親に手を興へて居た。シャルルの父は、一列鉗ほたんの軍隊式の質素なフロックコオトを着て、無遠慮に娘達をからかつたりなど、傍若無人の様に見えた。他の人々は口々に職業の話をし合つたり前の人々の背中に悪戯わるましたり、何れも今日の喜びにはしやいで居た。

饗宴は夜迄續いた。人々は坐つてゐるのに疲れて來ると、立つて庭

先をぶらついたり、穀倉へ行つてコルク遊びをしたりしては又食卓に戻つて來た。満腹して眠り頽れた人もあつたが、お茶の出る時分にはまた起きて來た。そして、歌つたり手品をひけらかしたり、力自慢をしたり、大騒ぎをやつた。さて人々が歸るといふ時分になると、たらふく麥の御馳走に預つた馬は、びんくとはねて容易に轍ながへに結ばれないので人々は笑つたり叱つたりして一時は持て餘した。

晴れ渡つた月夜の田舎道は、終夜一ぱい人の乗つた馬車が駆けて行つた。居残つた人達は、終夜酒浸りになつてゐた。斯う云ふ場合に有勝な花嫁に悪戯いたづらをしかけようとする者もあつた。御馳走に就いて氣に入らぬことがあつたかして、切りに不平を並べてゐる輩やからもあつた。シヤルルの母は、その日終日口も利かなかつた、花嫁の化粧の相談にも與らず、御馳走の準備に就いても相談を受けなかつた。誰よりも早く

その席を辭し去つた。ひきかへて父の方は、態々サン・ヴィクトルから煙草を取り寄せて夜明し吹かしつゝけ、その合間には誰も呑んだ事の無い酒などを得意さうに呑んで見せた。

まるで、諧謔の才の無いシャルルは酒宴の間も些とも映えなかつた。相手が洒落や地口を云つても一向不通、たゞ大儀さうに笑つてゐた。

けれど翌日のシャルルは全く別人のやうに見えた。一向惡びれず、平氣で花嫁を擁して公然に振舞つた。何度も庭に連れて出して、彼女の腰を抱き、半ば凭れかゝつて歩き乍ら、その胸衣の襞などをいちつてゐた。

二日目に新夫婦は別を告げて出發した。シャルルは患者の都合から長く家が明けて置け無かつた。ルウオオルは二人を車に乗せてヴソン

井ルまで送つて來た。新夫婦は六時頃トストに著いた。近所の人々は窓から首を出してお醫者さんの新夫人を眺めた。

五

シャルルの家の正面は煉瓦造りで、正しく街に臨んで居た。右の方には食堂兼居間の一室があつて、窓には赤いキャラコの窓懸がかゝつて居、ストオヴの上の棚には燭臺が二個載せてあつた、其間にヒボクラテスの頭を飾とした置時計が光つてゐた。廊下を隔てた其向側には餘り廣くない診察室があつて、椅子が四脚並べられてあつた。本棚には装幀の粗末な醫學の大辭書が、ぎつしりとつまつて居た。

庭は細長く籬を境として畠に續いて居た。其眞中、厩の前に當つて石の臺の上に日時計が置いてある。四つの薔薇の花床が四角に並んでゐる

た。庭の隅の檜の下には、祈禱書を読んでゐる僧の石膏像が立つて居た。

エンマは二階の寢室へ上つて行つた。押入の傍に赤い敷布を敷いた桃花心木の寝臺があつた。窓近くの簾筒の上には、白い繻子のリボンで結んだ花束が花瓶に挿してあつた。それはボブリイの先妻の花束であつた。エンマは凝じとそれを見詰めてゐた。シャルルはそれに氣が附いたので、直ぐに屋根裏に片附けて了つた。エンマは傍の安樂椅子にもたれて未だ箱の中にある自分の結婚紀念の花束の事を考へた。若し自分が死んだら彼の花束はどんなになるのだらうなどと、惘然と思ひ沈んだ。

最初五六日の間は、彼女は何くれとなく家の整頓に餘念無かつた。シャルルは新しい妻が馬車を驅る事が好きであるといふので、新しい

燈と革製の泥除とのついてゐる一頭立の馬車を求めた。

シャルルは何事も愉快であつた。食事も散歩も皆樂しかつた。今迄夢にも想像しなかつた種々の幸福が後からくくと限りも無く湧いて來た。

朝方、寝床の中で、半ば寝帽子に隠れたエンマの頬に美しく溶け込む日光を彼は快く眺めて居た。側近く見てみると、彼女の眼は平素より大きくなつたやうに思はれた。ぱつちり眼を開いて瞬きする時特にさう思はれた。物蔭では黒いその眼が、日光のさす處では深い緑に見えた。彼はその深い眼の色に囚はれた。彼が起きて愈々出掛けようとする時は、エンマは上衣をひつかけて、ジエレニアム草の鉢を載せた窓闌の上に肘をかけて、戸口に出たシャルルに話しかけた、而して鉢植から小さな葉や花瓣を唇で掠りとつてシャルルに吹きつけた。シャル

ルは接吻を馬上から投げた、彼女はそれを受けて領いた。

シャルルは前の夜の樂しさを思ひ乍ら、自分の幸福を味ひ返しながら、暖い光に脊を照らさせて馬を進めた。思へば、彼の過去にどんな愉快があつたらう。高い壁の中に一人閉ぢ籠つて居た學校生活——自分より富裕な、自分より學問の出來る生徒に立ち交つて、言葉や著物を笑はれてばかり居た。醫學生時代に、彼の妻になり度いと望んでゐた或る若い女工があつたけれど、それを悦ばしてやる金さへ持つてゐなかつた。それからあの冷たい寡婦と淋しく暮した十四箇月、あゝ、そこに何の愉快な事があつたらう。が、今はあの自分の崇拜する美しい婦人を一生の伴侣とする事が出來たのではない。彼に取つては全世界は今エンマの下袴スカートの周圍にあると云つてもよかつた、彼は彼女を愛する事が未だ足りないと自分を責めても見た。

彼は急に妻が見度くなつて、途中から引返し胸を躍らせながら二階に上つて、そつと忍びよつて、着物を着換へてゐたエンマの背に接吻してきやッと言はせた。

彼は何時でも細君の櫛や指輪や襟巻に觸ずには居られない。急にその頬へ大きな接吻を與へる事もあれば、指の先から肩まで、その露出の腕を數多の小さな接吻で掩ふ事もあつた。かう云ふ時エンマは子供に取り縋られて困つて居る人のやうに、半ば笑ひ乍ら、半ば迷惑らしく、彼を押し遣るのであつた。

結婚の前、彼女は自分が戀に落ちてゐると思つてゐた。併し戀から流れ出づるものとして豫期してゐた程の快樂が遂に來なかつたので、さうでは無かつたのかとも思つた。彼女は今日迄物の本で讀んだ幸福とか情愛とか狂熱とかいふ美しい言葉の眞の意味を、これから實際に

見出し度いと熱望してゐた。

六

エンマは十三歳の時寺院に入れられ、そこで教育された。エンマはその寺院生活が非常に嬉しかつた。休憩時間にも餘り遊ばなかつた、よく祈禱書を勉強してゐたから、先生の六かしい質問に何時でも答へる事が出来た。いつも蒼い顔して數珠を爪繰る尼達に立交つて、祭壇の香や清い神の水や、蠟燭の光などの間に生活して、自ら奥深いおもひを其心に育んだ。苦める小羊、鋭い矢に射ぬかれた胸、十字架上のキリスト——さういふものに衷心から傾倒してゐた。終日斷食して苦痛で自らを鍛へた事もあれば、何か誓を立てゝそれを成就して見ようと考へた事もあつた。懺悔室へ行く時は、必ず何か些細な罪を拵へて行つ

て、なる丈長く、そこに手を組み、跪いて、僧の言葉に耳を傾けた。天國の戀人、永遠の結婚——説教の中に出でて来るそんな言葉に何とはなしに憧憬の情を寄せた。

晩の祈禱の前の訓話に於て、宗教史の一部や基督の精神に就いて話された時、全世界を通じ永遠を通じて反響を起したところのあの感情的な哀告の聲を、彼女はいかに聞いたであらう、平和な田園にあつて何の苦痛も知らずに育つた娘の心は、却て波瀾多き人生の一面に興味を見出すやうな傾向を有つてゐた。例へば海も暴れるが故に好ましいと彼女は思つた。彼女の性質は、藝術的のものよりも實感的なものを探んだからである。自分の心の直接の要求に應ずるものでなければ何の益もないとして直に退けるといふやうな傾向であつた。

此寺院に一月一度、一週間宛、婦人達の着物を縫ひに來る老女は、

革命時代に零落おちぶれた或る貴族の縁續えんじゆきであつたが、エンマは此老女から種々の話を聞いた。前世紀の戀の歌なども聞かされた、又種々の小説の本をも此老女から借りて耽讀した。其小説に書かれてゐる話は大抵戀の話其他の浪漫的な話であつた。

その中にスコットの小説に惚れ込んで歴史的の物語に興味を寄せては、自分も昔の大名の暮してゐたやうな高樓に住みたいと思つた。冑の羽毛を風に翻して黒い馬に跨つて來る武士を、窓に凭つて望むといふやうな境遇になつて見度いと思つた。丁度此時分彼女は、マリイ・スチュアートの崇拜者で、總て有名な婦人又は不運な婦人に對しては非常な尊敬を拂つてゐた、ジアンダアク、エロイズ、アニユー・ソレーュなどは、彼女に取つては恰も歴史界の暗い空に輝く彗星のやうに見えた。

エンマの友達に、正月の贈物として貰つた紀念の書物を密かに寺院へ持つて来て居るものがあつた。エンマも借りて密きつとそれをよんだ。而してさういふ書物の著者たる伯爵某又は子爵某など之名に胸を躍らした。

母に死なれた時、エンマは數日の間泣き通した。形見の髪の毛で亡き母の姿を拵へた。悲しい手紙を父に送つて、自分が死んだら母と同じ墓に葬つて、と迄云つてやつたので、父はエンマが體からだを痛めた事と思つて、心配してすぐ面會に來た。

エンマは、生れて始めて遭遇した事件(母の死)によつて、人生の中心——とても平凡な知力などで到達する事の出來ぬ人生の中心に觸れたやうな氣がして、これを密かに喜ばしいと思つた。これから彼女はラマルチイヌ一派の踏み行く道を辿つて、湖を傳ひ来る琴の音や、死に

行く白鳥の歌や、落葉の響や、天がけり行く天女の聲などに耳傾けた。けれども、いつの間にかそれにも倦んで了つた。

寺院の尼達はエンマが次第に自分等の手の裡から辻り出て行くのを見た驚いた。寺院の教は餘り嚴に過ぎてゐたのである、肉體の純潔や靈魂の救濟を説く事が餘りに深きに過ぎたのである。これが爲に、エンマは譬へば餘り強い手綱に御せられた馬が、急にひきとめられた爲、轡が歯から逃げ出で丁ふやうに踏む可き道を外れたのである。

エンマは、そこに咲く花の爲に、そこに奏せらるゝ音樂の爲に、そこに與へらるゝ情緒の刺激のために寺院を愛したもの、其累はしい宗規は全く其天性と相容れなかつたのである。

エンマが父に連れられて此寺院を退いた時、何人も訣別を惜むものは無かつた。院長でさへ、彼女を宗教社會の不敬者であると断じた位

であつた。

エンマは我家に歸つて下僕を監督する事に、一種の喜びを感じたが、それも、東の間で、すぐに田舎の生活が厭になり、寺院を去つた事を悔いた。

七

ボヴリイ夫人は、時には、これがつまり生涯のうちで一番幸福な一人のいふ蜜月^{ホネームウニ}の樂しさであると思ふ事もあつた。此幸福を十分に味ふのには、何處かへ旅行したらよかつたに違ひ無い。藍色の絹窓掛の蔭に隠れて、險しい山路に馬車を驅り、或は山に響く駄者の歌に耳傾け、或は山羊^{ヤギ}の鈴の音や、瀧川の水の聲を聞き、或は黃昏^{たそがれ}深淵の岸に立つてレモンの香を嗅ぎ、或は手を携へて共に夕の星を眺めたりした

らばあゝいかに心ゆく事であらう。

彼女は非常に物足らなかつた。若しシャルルが、自分の心を察して呉れて、せめて唯一度でも自分の希望に添ひたいと云ふやうな顔附でもして呉れたなら、エンマの心はいかに慰められたか知れないだらう。

しかし、シャルルの談話は市中の敷石のやうに平凡普通な事ばかりであつた。芝居を見る好奇心もなければ、水泳も擊劍も拳銃ピストルの撃ち方も知らなかつた。エンマの讀んで居た小説の中に出で來た馬術に關する或る言葉をさへ説明する事が出來無かつた。シャルルは何も知らなかつた、又、何も知らうと願はなかつた。情熱の力で他をひきつける事も人生の興趣や神祕を他に會得せしめる事も出來無かつた。彼は唯細君が愉快に暮して居る事と信じてゐた。けれども細君は夫の全く沈靜してゐる状態の下に足搔あがいて居た。自分が夫に與へたその幸福の蔭で

焦せきれてゐた。

エンマは時々繪を描いた。シャルルは樂しさうにその畫布に屈かがんでゐる姿に見惚れた。エンマは時々ピアノを彈ひいた。シャルルは其鍵板を走る指の速さにびっくりして目を瞬ろはつてゐた。

一方に於てエンマは能く家事をおこなした。勘定書催促の手紙は婉曲に書いた。人を招く時の料理も器用にした。シャルルは氣の利いた妻の爲に、村人から尊敬された。而して、さう云ふ妻君の夫である事をうぬぼれた。エンマの描いた繪を自慢さうに人に見せた。

シャルルが夜遅く歸ると、エンマは女中は寢せて自身起きて居て、夜食をすゝめた。シャルルはむしやく夫を喰べ乍ら外出中の出來事を何くれとなく語つた。而して床にはいると何思ふ事もなくすやく

と寝た。

エンマにとつては殆ど堪へ難い平凡な月日！

シャルルの母は今でも時々訪ねて來た、家で夫婦喧嘩をした揚句など屹度やつて來た。而して嫁の仕方がどうも面白くなく思はれるので、家政のあらを探しては小言を云つた。特に、その身分不相應の贅澤を責めた。始終喧嘩み合つて親子らしい親みは些も無かつた。母は先妻時代の方がよかつたと思つた、シャルルの愛はエンマにのみ傾いてゐるので、エンマに息子をとられたやうな氣がした。丁度零落した人が、以前の自分の住家で、他人が食卓に團欒してゐるのを、窓の外から覗いてゐるやうな心持で、樂しげな息子を見てゐた。而して、折々シャルルに向つて、是迄自分が息子の爲に拂つた犠牲や盡した苦勞やを語り出し、エンマの冷淡な様子を見ては、餘り深く妻を愛するのはよく

ないなどゝ云つた。シャルルは何と返事してよいか分らなかつた。母も大事だが妻は母より以上に可愛い、母の言葉も尤もだとは思ふが、妻を責める氣にはなれない。それでも折々は妻に向つて母の小言を恐るゝ持出して見る事もあつたが、エンマは一言で刎ねつけて逆撫さかねぢを喰はして、追ひやるやうに患者の方へ送り出した。

實際エンマは自分が正しいと思つて居た。而して、彼女は自分の愛を眞實に證明し度いと始終望んでゐた。月のいゝ庭などで熱情的な歌を歌つて夫に聞かせても見たが、シャルルは薩張感じない。彼女自身も又前のやうにその歌の爲に感動する事は無くなつてゐるのが判つた。彼女は自分の胸に態と燧石ひそいしを打つて見たが、一向に火花が散らない。シャルルの情も次第に冷めて、抱擁も接吻も機械的になつて來た。彼女は時々病家から禮として送られた犬を連れて散歩に出た。時に

は獨で居度くて耐らなくなるので、遠くバネビルの海岸迄も行つてそこで物思ひに耽つた。黃色い蝶を追つて吠えついたり玉蜀黍畑の縁の舉栗の花にじやれついたりしてぐるぐると廻つてゐるその飼犬のやうに、あてどなくさまようた彼女の物思ひが、一つの言葉に纏まつた。芝生の上に座つて日傘の尖端さきで土をほじくりながら彼女は云つた。

「あゝ、何故私結婚なんかしたんだらう！」

彼女は、何か偶とした事から外の男と相知るといふやうな場合を想像して見た。此單調無味な毎日、此つまらない夫——あゝ、今の自分の夫位つまらぬ人も無からう。自分の對手は、寺院時代の友人が結婚した男のやうな、立派で軽快で秀才で、魅力のある男でなければならぬと思つた。あゝ、あの友達はどうしてゐるだらう、繁華な都會で、劇場や舞踏室に、暢々のびくとした活々いきくとした其日／＼を過してゐるだら

う！あゝ、北向の屋根裏の部屋にあるやうな今の自分の生活よ！その心の暗い隅々には何處にも蜘蛛が巣を懸けてゐる——。

彼女は寺院時代の、賞與授與式の時の事などを思ひ出した。彼の光榮の日よ！いかにそれが遠い昔となつたらう！

彼女は犬を呼んで、頭を膝の間に入れて、

「私を接吻するのだよ、汝は何も心配が無いのだねえ。」とその頭を撫でゝやつた。

九月の末、一つの異常な事件がエンマの身に起つた。彼女は、ヴォビイサアルのアンデエギリエール侯爵家の別荘へ招かれた。侯爵が面瘍をわづらつた時シャルルに治療を乞うた所縁から、侯爵がシャルルの家にやつて來た事もあつた。侯爵はエンマの田舎には珍らしい美貌に

目をとめた。

八

ボワリイ夫婦の車が侯爵家に着いたのは、もう全く日が暮れてからであつた。侯爵は自身で出迎へて、エンマを自分の腕に扶けて玄關の方へ導いた。その玄關には大理石が敷きつめられて、踏む足音も人の聲も、丁度教會のやうにはつきりと響き返した。球戯室では絶えず象牙の球の鳴る音がしてゐた。

侯爵は客間の戸を明けた。すると婦人連の中から侯爵夫人が立上つてエンマの方へ挨拶に來た。而して直ぐ傍なる丸臺椅子オットマンを興へてさも親しげな口振でこの醫者の妻に話しかけた。その様子が最う何年も前からの知己ちかづきと云ふ風に見えた。夫人は四十恰好の、肩附の軟かい、曲つ

た鼻の、懶^{だら}さうな調子の人であつた。胸の釦に花を飾つた紳士連は、火を取圍んで婦人連と話してゐた。

七時頃に食堂が開かれた、エンマはそこへ入る時、花の匂や、新しいリンネンの匂や、料理から立つ蒸氣や、菌の香や、然う云ふものの雜^{まじ}つた暖い空氣に包まれるのを感じた。そこで、ナップキンを小兒のやうに頸に巻きつけ口端から肉汁を垂らしつゝ食事してゐる一人の老人を見た。これは侯爵の舅のラエエデイエール男爵で、女皇マリイ・アントアネットの寵臣であつた人だ。エンマは此人が女皇と御寢間^{おねま}を共にした人かと思ひながら、熱心にその様子を打成つた。

水で冷した三鞭酒が出された。エンマは急に口の中が冷たくなつたので戦々と顫へた。柘榴を見たり、鳳梨^{パイナップル}を食べたりしたのは今日が始めでだ。粉砂糖でさへ斯う云ふ白い細かいのは今日迄見た事が無かつた。

婦人連は舞踏の用意に、各々の部屋へ引下つた。エンマは女優が初舞臺へ出る時のやうに氣むづかしく粉粧を凝した。

「僕の袴は舞踏へ出るに、些と不恰好ぢや無いかな。」とシャルルが云つた。

「舞踏」エンマは聞き返した。

「然うさ。」

「まあ、貴郎は何うかして居ますよ。皆に笑はれますよ。じつとして被在い、その方がどんなにお醫者様らしく見えるでせう。」

シャルルは黙つて居た。而して、エンマの支度が済む間、あちこちと歩き廻り乍ら、際立つて美しい今宵の妻を見てゐたが、突と寄つてその肩に接吻した。

「お止しなさいよ。轉ぶぢやありませんか」と妻は云つた。ヴィオロ

ンの音が起つた。彼女は駆下りるやうに階子段を下に降りた。

舞踏相手がその指頭に軽くエンマを握つた時、胸の動悸が烈しくなつた。が、すぐそれは鎮まつた。音樂の調子に合せて軽く首を搖り乍ら前の方へ進んだ時、樂器の音がぱたりと止んでグイオロンの顫へる聲だけが聞えた。その時エンマの顔には微笑が流れた。

大抵二十四五から四十位までの——中には十五六のも——人々は、そここゝに群をなして舞踏の中に交るもあれば、又戸口に離れて立話して居るのもあつた。その人達の着物は目立つて見えた。何れも皆豊かな顏構で、それが陶器の蒼味や繻子の光澤やに照り映えて、一層見榮えして見られた。

無頓着さうなその顔には、不足無く世を送つて來た人の落附が見えた。併しエンマはその閑雅な様子の中にも何處か動物性の閃きのある

のを見遁す事は出來なかつた。

エンマは自分から數歩の所に、藍色の上着を着た一人の紳士が、眞珠の頸飾をきらめかした蒼白い若い婦人と、伊太利亞語で話して居るのを聞いた。ゼノアの薔薇の噂、月に照らされたコリセイム劇場の話——さういふ話をしてゐた。他的一群は競技や競馬の話に熱中してゐた。舞踏室の空氣は重く、ランプの光は曇りをもつた。來客の多くは球戯室の方へ押して行つた。一人の僕は椅子の上に上つて、窓の硝子戸を明けた。そこの庭先には百姓等が押合ひ乍ら、中の模様をのぞいて見てゐた。エンマはふとル・ベルトウの記憶を喚び起した。畠——泥深い小家——林檎の樹の下に立つてゐる仕事着の父親——牛乳小屋で牛酪を製して居る自分自身——。

氷を喰べてゐたエンマは、何時の間にか目を半ば閉ぢて、匙を歯の

間に置いてゐた。

傍に坐つてゐた婦人が扇を落して、そこへ通りかゝつた紳士に、拾つて下さいませんかと頼んだ。紳士が、手を差伸べてその扇を拾ひとらうとした時、エンマは、その女の手から、何か白い三角の包物が紳士の帽子の中へ投込まれるのを見た。

二度目の舞踏が初まつたのは三時頃であつた。「子爵、々々」と皆に呼ばれてゐた一人の紳士が、エンマに踊り方を教へ乍ら一緒に踊つた。戸の近くを通る時、エンマの着物の裾が子爵の袴ズボンに引掛つた。二人の脚は合さつた。子爵は見下した、エンマは見上げた。

子爵は踊り疲れたエンマを介抱して廊下の方へ連れて行つた。エンマは子爵の胸に頬を置いて、息を養つて居た。

踊り疲れた人々は、軽ヤガて何れも「お休み」——といふよりも寧ろ——

「お早う」と言ひ交して散つて行つた。シャルルは、べつ五時間遊戯臺の側に立ち續けて人々の骨牌を見て居たが些とも分らなかつた。自分の部屋に腰を下して靴を脱いだ時、唯ほつと深い吐息ときをついた、エンマは耳の底に仍舞踏室の音樂の響が残つてゐるのを感じた。もう程無く此家を立ち去るのであるから、今夜の歡樂の感興を出来るだけ長く恣にしたいと思つて成る可く眠るまいとつとめた。此別莊の部屋々々の窓を眺めて、先刻さつきの人々の寢室を想像して見た。彼等の生活の状態を知り度い、出来る事なら、その一部分でも味つて見度いと思つた。

翌朝ボワリイ夫婦は歸途についた。スイーブルザイルの坂に達した時、馬に乗つた數人の紳士と逢つた、エンマは其中に昨夜の伯爵が居たやうに思つた。それから一哩程行くと車が損じたので修繕の爲に立

停らねばならなかつた、其時シャルルは馬具の間から美しい紋章のついた煙草入を見出した。

「あゝ、未だ二本はいつてゐる。今夜飯のあとでのまう。」とシャルルは云つた。

「貴郎、煙草をあがるの？」

「時々、やる——機會があれば——。」

家に歸つた時、晩飯の支度が出来て居なかつたので、エンマはひどく女中を叱りつけた。

シャルルは細君とむかひ合つて晩飯の膳に向つた時、手をこすり乍ら樂しさうに云つた。「矢張、家が一番いゝね。」

寝る前ストオヴの前で、シャルルは先刻の煙草を吸ひ出した。唇を尖らかして煙を吸つては睡を吐いた、而して一服吸ふ毎にパイプを口

から離して見た。

「氣持が悪くなりますよ。」

非難するやうにかう云つたエンマは、シャルルが水を飲みに立つたあとで、手早くその煙草入を拾ひあげて傍の棚の奥に投げ入れて了つた。

九

シャルルが留守になるとエンマは棚の上に疊んで置いた布片の間から、彼の煙草入を取出して、じつと眺め入つた。さうして、此煙草入は、屹度あの伯爵が情婦から貰つたのだ、ごこの女か知らないが、多分人目を隠れてそつと刺繡（ひ）をしたものであらう、それを擱へてやる何時間といふもの、幾度も此煙草入は、物思ひに沈むその女の前髪に觸

れたのであらう。縫目々々には戀の息が滲み込んでゐるであらう。夫から、最後に伯爵は或る朝その女を訪ねて此煙草入を持ち去つたのだ、その時二人はどんな會話を取交したらう？ エンマは猶考へ續けた、自分は今このトストに在つて伯爵は遠く巴里に居るのだ。巴里とはどんなところであらう？ エンマは小聲で巴里の名を繰返した、而してその都の様を心に描いて見た。

夜、窓の下を通る轍の音に耳を濟まして、あの車は明日巴里につくのだと思つた。彼女の心はその車に尾いて、星の光に導かれつゝどこまでも～と行く。しかし、其行方がやがて闇に消えて、そこで空想がおしまひになる。遂に巴里の地圖を買つた。そして指の尖で種々の街を辿つて、心だけ歩いてゐる。並樹を植ゑた廣小路、闇の中に閃く瓦斯燈、劇場の前に音立てゝ停る馬車――。

彼女は「コルベイユ」と云ふ婦人雑誌や、「シルク・デ・ザロン」雑誌の讀者で、競技や夜會の記事は一字洩らさず貪り讀んだ。服裝の流行や芝居の季節シーズンもよく知り抜いてゐた。而して、空想的満足を求めるが爲にバルザックやジョージ・サンドも讀んで見た。而して伯爵を考へ出して、彼を作中の人物に比較して見た。

燐爛たる巴里は廣々とエンマの眼前に開けた。豪奢な交際社會の種々の場面や、帝王にも劣らぬ女優の贅澤や、さういふものに燃えるやうな熱望を寄せた。あゝ、放逸にして華美なる都人の生活！ 而して戀のローマンス！ 戀といふものも、植物と同じく、それに應はしい土地なり溫度なりを要する。嘆息、抱擁、恍惚たる情緒、許された腕に落ちる涙——さういふものは必ず長閑なる高樓の欄のどかのまわや、翠帳すいじょうをめぐらした室や、咲き亂れたる花瓶や、高くしつらへた寢臺や、燐爛たる

寶石の光やと離るゝ事は出來ぬものだとエンマは考へた。

エンマは、女中に——女中と云へば、シャルルが獨身時代によく仕へた女中のナスタジイは、あの夜エンマに叱られて散々泣いた末遂に此家を去つて了つたので、その代りとして今年十四のフェリシテといふ小女をエンマは雇ひ入れた——決して綿帽子を被らせない、そしてすべての振舞を貴婦人の腰元のやうに鄭重にもの／＼しくさせた。此新参の女中は解雇されるのが怖さに、その面倒な吩咐ほひつけもはい／＼と服従してゐたが、蔭へ廻つては、戸棚から砂糖を盗み出して、寝る前に床の中へこつそりと嘗めた。亦、主人の眼を盜んでは、馴者などと野卑な調子でおしやべりをした。

エンマは、吸墨板すみとりいたや文机ぶつくやペン軸や状袋を買つて持つて居た。けれども勿論手紙を送る可き相手も無かつた。所在無さに諸道具の塵を拂

つたり鏡に姿を映して見たり、本を引張り出して読み散らしたりする、いつの間にか假寢^{うたん}に落ちる、目が覺めると、旅行して見度いと思つたり、直にも寺院へ行つて了ひたいと思つたり、死んで了ひたいと思つたり、巴里へ行きたいと思つたり——逐へども去らぬ雜念に苦んだ。

シャルルはと云へば、十年一日といふ形で雪が降つても雨が降つても、往診の爲めに田舎道を馳け廻つてゐた。職業柄、隨分心持の悪い事にもでくはすが、夕方家に歸れば、火が熾つて居る、晩飯の仕度も出來てゐる、快い椅子の傍には奇麗な衣服を着て好い匂のする可愛らしい細君が待つてゐる。尤も其匂が何處から來るか、細君の衣服からか、又はその肌からか、そんな事は些とも氣が附かなかつた。

兎に角エンマは、心を盡して夫を慰めた。或時は蠟燭臺を紙で面白く拵へて置いた。或時は自分の上衣^{ガウン}の裾飾を態と換へて置いた。ある

時は臺所でやり損そきなつた料理に、飛んでもない奇名をつけて晚餐の興を添へた。エンマは、嘗て侯爵邸に招かれた時、貴婦人達が時計の鎖に面白い飾をつけてゐるのを見たので、自分も同じやうな飾を買つてつけた。爐上の棚に大きな青い花瓶が欲しいと云つた。さうしたハイカラな趣味は、シャルルには了解めぬ事が多かつたが、夫丈おれだけに何となく心が牽かれた。而して、唯何となく爐邊が樂しかつた。彼は恰もわが生の前途に金砂が蒔かれてあるやうな氣持がした。

彼の醫者としての評判はなかなかよかつた。診察も巧みに、手術も上手であつた。彼は時勢後れになるのを怖れ、新に發刊さる可き醫事新報の購讀者となつて、その趣意書をとり寄せた。そして夕飯の後に少しそれを讀んで見たが、疲れが出てすぐそのまま寝込んで了つた。エンマは、肩を聳かして、いら／＼した心持で、それを見つめた。何

故自分は終夜書見に耽つて、六十位の歳になれば、外套の胸間に飾紐をくつ附けるといふやうな男を自分の夫に持たなかつたらう。今自分の冒してゐる此ボワリイといふ苗字が、書店の軒に書かれたり、新聞に出されたりして、佛蘭西中に有名になる——あゝ、さういふ希望も遂に空しい。シャルルには氣概といふものが無いのだ。つい此間も彼は或る病家で患者の枕元で大勢の面前で、立會つた他の醫者の爲に散々やりこめられた。その話を聞いた時エンマは思ふ存分夫を罵つた。すると彼は唯眼に涙を浮べて、細君の顔に接吻した。エンマは歎つてやり度い程歯痒く腹立たしかつた。「何といふ役に立たぬ男だらう！何といふ……。」

エンマは一日々々と夫が厭になつて來た。一日一日とシャルルは鈍くなつて來た。酒を飲む時に、間違へて空からな饅の栓を抜いたり、楊子

を使はずに舌の先で歯をせつたり、スウブに咽せたり——。體は段々太つて来るが其代り兩頬の肉が前方へ突出して、小さい眼が塞がるばかりになつた。それでも、エンマは時々面倒を見て、少しでも夫を見よくするにつとめた、けれどもこれは夫の思ふやうに、夫の爲にするのでは無く、寧ろエンマが自分自身の爲にするのに過ぎなかつた。

エンマはまた小説、戯曲、若しくは新聞で見た上流社會の出來事について夫に語り出す事があつた。さういふ時シャルルはいつも耳の穴を掘つて感心して聞いてゐた。けれども、必ずしも夫ばかりぢや無い、彼は胸に餘つてゐることは飼犬に語つた。或は爐の中の五徳に、或時は時計の振子に語つた。

彼女は何が事件の起るのを期待してゐるのであつた。遠く霧を罩めた地平線——そこからどんな船が現はれるか、二檣船シャルウか軍艦か、悲哀

の船か、幸福の船か。夫は一向に分らぬが兎に角彼女は待設けた。毎朝眼が覺めると愈々今日は？と思ひ、日が暮れると、またもとの悲しい心になつて明日を待つた。

彼女は一日一日と顔の光澤^{つや}が無くなつた。竊に心臓の鼓動を苦にした。シャルルの與へる薬は何の驗もなく、唯徒に其神經を昂^{たかぶ}らすに過ぎなかつた。が、どうかすると非常にはしやいで不斷^{のべづ}しやべりつゝけたが、その揚句はいつも重い幽鬱に沈み、物を云ふのも身動きするのもいやになつた。エンマは絶えず此トストがいやだと云つてゐたので、シャルルは其病氣の原因を土地に歸した。而して移轉を思ひ立つた。が、何が拵四年越も住んで、漸く基礎^{とねい}も据らうとする際、此地を見捨てるのは、非常な損失である。しかし、さうは云つて居られなかつた。シャルルは、ヌウシャフテル郡のヨンボイル・ラツベエといふ村で、^サ

醫者が先週逃亡したといふ話を聞いて、早速そこに住んでゐる薬剤師に萬事を問合せ、春を待つて愈々そこへ移轉する事にとりきめた。

或る日、エンマは體を動かすといふ程の目的で、頻りに机の抽斗の中をひっくりかへして居ると、偶と指先を痛く刺したものがあつた。

それは結婚の花束をとめた針だ。オレンヂの薔薇は塵埃に黄ばみ、繡子のリボンは端が摺り減らされてゐた。エンマはそれを火の中に投げ入れた。

小氣味よく燃えた、すべてが燃え盡した。燃えがらはストウブの中で蝶のやうに飛んで軽て煙出の中へ舞ひ上つて行つた。

春三月になつて、二人はトストを去つた、エンマは此時懷姫になつて居た。

第二編

一

ヨン井ルイ・ラアベエはルヴァンから殆んど二十哩ほど離れた大きな村で、アツベボルとボオエエへ行く大道の間に狭まつて、リウル河の谿谷に臨んでゐた。

今日はボヅリイ夫婦が到着するといふ晩、「金獅館」の主婦は、土地の薬剤師のオメイと種々の世間話をし乍ら、晚餐の仕度をしいく、其客人を垂せて來るべき「燕」（馬車）（の名）を待つた。

夫婦の到着が遅れたのは、途中でエンマの愛犬が見えなくなつたので、一哩以上も馬車を返したりなどした爲であつた。とう／＼見附からなかつたのでエンマはシャルルに其罪を着せて泣いて怒つた。同乗の

ロオロオと云ふ吳服商人は、一旦行衛知れずになつた犬が數年の後主人の許へ歸つて來た例は幾らでもあると云つて夫人を宥め賺した。

「燕」は金獅館の前に停つた。一番最初に車を出たのはエンマで、夫から女中のフエリシテ、乳母、同乗のロオロオが續いて降りた。眠りとけてゐたシャルルは吃驚して最後に降りた。薬剤師のオメイは真先に出て來て恭しく夫人に會釋し、そしてその夫を迎へて愛嬌を振り蒔いた。

エンマは爐の端に進み寄つて、踝くろぶしのあたりまで裾を引上げ、黒い長靴を穿いた片足かたあしを火の上に翳した。火の光はエンマの白い頬、瞬く瞼などその全身を明かに照らし出した。軽い髪の毛の房々とした一人の若い男が、爐の向側からじろぐとエンマを見てゐた。彼はギロオマ

ソといふ此土地の辯護士の書記で、名をレオン・デエピュイといふ、この金獅館に食事しに来る常客の一人であつた。自分の仕事を了ふと他に用もないので、屹度こゝへやつて来て、旅人の間から話相手をつけ出して時を消すのが常であつた。今夜新來の御醫者さん夫婦と晚餐を共にしようといふ主婦の通知を得て、彼は喜んでやつて來たのである。軽て一同は大きな室へ案内された。

「お疲れでしたらう、夫人。おさんあの「燕」は恐ろしく搖れる車ですから。」
とオメイが話しかけた。

「疲れましたよ。」と夫人は答へて、「然しあの位の苦しさなら却て面白いのですよ。私は變つた土地を見るのが大好きなものですから。」「同じ場所にばかりゐるのは實際あき／＼しますよ。」とレオンが口を入れた。

「所で。」と薬剤師は「此邊では醫者の業務はさしたる困難を感じません。百姓は比較的富裕なので禮金も可なり善い方です。病氣と云ひましたところで、脇加答兒、氣管支炎、癆位な所。尤も秋、收穫の時節には——。」などと鹿爪らしく語り出した。話が土地の氣候とか地勢とかに及んだ時、エンマは、

「此邊には散歩や遊山によい處があるでせうね。」と聞いた。

「殘念乍ら殆どありませんよ。」とオメイは答へた。「併し森との境になつた山手の處に、唯一つ「牧場」と人の呼ぶ處があります。日曜など折々私は書物を携へて、そこに日没の光景を見に参りますが。」

「日没の景ほど美しいものは他にありますまいと私思ひますわ。殊に海岸などの。」

「さうです、私も海と來たら堪らない程好きです。」とレオンが云つ

た。

「あの涯^(はて)もない大海に向ふと、心の中^が暢々^(のびく)とするぢやありませんか。海を思ふと何となく心が高まつて、理想とか無限とか、そんな感想^(かんがへ)が湧いて来るぢやありませんか。」

レオンは興に乗つて、去年瑞西に旅行した時の話を始めた。而して名高い音樂家が、壯^(さかん)な自然の景に對してピアノを彈じたといふ話も所^以あることだと語つた。

「貴方、音樂をおやりなさいますの?」とエンマは聞いた。

「いゝえ、唯好^(す)きな丈です。」

「あゝ奥さん、夫どこぢやありませんよ。」とオメイが中に這入つて、「レオン君は非常な名人です。藥局でよく君の歌ふのを聞きましたが、まるで玄人^(くらうじ)ぢやありませんか。」

レオンは家主（レオンはオメイの二階を借りてゐた）にかう云ふ挨拶をされて思はず顔を赧あかめた。オメイはシャルルと土地の人々の噂を續けた。エンマは言葉を續けて、

「で、どんな音楽がお好きですか？」

「まあ、獨逸のものですね、夢幻的でい」と思ひます。」

「伊太利のオペラは？」

「未だ一向に存じませんが、來年は巴里へ出るつもりですから、法律の方を濟ませたら是非研究して見たいと思つております。」

「今丁度御主人に申上げて居た所なんですがね。」とオメイは此時エンマの方へ身を向けて、「幸ひあのヤノダといふ男が馬鹿を仕盡した揚句どこかへ逃亡したんで、此ヨンボイル一番といふ家が空あきますよ。お醫者さんには持つて來いの家で——」と夫婦の爲の新居について説明

して、「庭の奥には河に臨んだ四阿がありますが、何でも夏になるとそこで麥酒ビールを飲む爲に設けたものなんださうです。若し園藝のお嗜みでもあれば——。」

「いや、家内は園藝などの事は些あづまや」とも心得がないのですよ、些ちつと運動するといふんですけれど、それが嫌ひでしてね、始終家の中にこびりついて本ばかり覗いて居るのです。」とシャルルが云つた。

「私見たいですね。」とレオンはそれを引取つて、「窓に當る風の音を聞きながら、あかるい燈ランプの下で良い本を読むほど愉快な事はありませんね。」

「ほんとにさうですよ。」と、夫人は大きな黒い眼で、じつとレオンを見つめた。

「さういふ時は。」とレオンは続けて。何も彼も一切忘れて了ひます。

本にある光景が眼の前に現はれて、自分がその中を歩いてゐる様な氣持になります。本の中の人間と全く同化して了つて、まるで自分が其人間になつたやうな氣持になります。」

「えゝ、えゝ、全く。」

「貴女も屹度、本の中から、何處か遠くで幽かに自分の胸の奥に隠れた感情を語つてゐるやうな言葉を聞き出す事が御有りでせう。」

「えゝ、能くさういふ事がありますよ。」とエンマは答へた。「ですから、私は散文より詩歌の方を好みますの、どうも詩歌の方が散文よりは優しくつて、涙をこぼさせるやうな場合が多いと思ひますよ。」

「私は、變化の多い、読み乍ら氣が揉めるやうな物語が大好です、現實の人生に出て來るやうな平凡な主人公や、尋常茶飯の感情などは些とも面白くはありません。」とレオンは圖に乗つて、さういふものは些

とも胸に響いて來ません。さういふ作物は、藝術の邪道に踏込んだものと思ひます。此單調無味な生活を彩るものは、唯浪漫的な物語ばかりです。あゝ單調無味な生活！ヨンボイルには殆ど何のたのしみもありません。」

「矢張トストのやうな處でせうか。」とエンマは云つて、「トストでは私、リー・ディング・ルームへ投書して居りましたよ。」

「若し御役に立つなら奥さん。」とレオメンはエンマの言葉のしまひの方を捉へて、「私の持つてゐる圖書を御覽に供しませう。有名な作家のものも少しさりますから。」

こんな話をしであるうち、レオンは何時の間にかエンマの椅子の脚の處へ片足を載せてゐた。で、二人はくつ付くやうに坐つて、尙ほ種々と雑談をつづけてゐた。話してゐる中にお互の心持がびづたりと合ふ

事が度々あつた。巴里の劇場の話、小説の話、音樂の話、それから雙方の全く知らぬ方面の話などで、二人は晚餐の終る頃迄話しつゝけた。

其夜、ボブリイ夫婦は、直に新しくきまつた家に移る事とした。

家の内にはいると、エンマは新しい漆喰の冷たい色が濡れた布のやうに、両方の肩に迫るのを感じた。二階の室の窓から薄ぼんやりした光が射した。月光に煙る狹霧は遠く草原を罩め、樹立の頂を隠し川下の方へ棚引いて居た。搬んで來た諸道具は、ごちやぐと床の上に亂れ合つてゐた。エンマが、異つた所に寝るのはこれで四度目であつた。はじめは寺院にはいつた時、二度目はトストへ著いた時、三度目はヴオビサアルに泊つた時、而して四度目は今。住所の變る度毎に、エンマには新しい人生が開けた。場所が變れば人生の面目も從つて變る。

のは當然だ。これ迄に過した人生は、すべて不愉快なものであつた。今後の月日に於て、屹度それが償はれるであらう——エンマは斯う思つたのであつた。

二

翌朝、エンマは昨夜の辯護士の書記——レオンが街道を通るのを見た。レオンは一寸此方を見上げて會釋した。エンマも會釋を返して、而して慌たゞしく窓をしめた。

前の晩のエンマとの會食は、レオンに取つては著しい出來事であつた。彼は二時間も續けて婦人と話した事は未だ曾て無かつた。よく婦人を相手に、あんなに巧い言葉で種々の事がしやべれたものだ。彼は性來が極く臆病な性質で、萬事に遠慮勝であつた。そこがヨンギル

の人々から彼が好評を博した所以で、彼は他の人々が辯論に耽つてゐる時でも、黙つて耳を傾けてゐるのを常とした。彼は遊藝の嗜みのある男で水彩畫も描いた。晚餐の後なご骨牌かるたをしなければ、屹度文學書類を繕いた。オメイは教育のある點に於て彼を尊敬し、オメイの細君ひとがらは人柄の優しい點に於て彼を好んだ。

薬剤師のオメイは此近所で一番善い人間であつた。オメイはよくエンマの爲に面倒を見た。林檎酒サイダの買ひ方貯藏方かこひかたから、牛酪はなたを安く買ふ方法などについて夫人に注意した。一體この薬剤師が、追従に近い迄に親切なのは、他人に興味を持つといふ原因によるばかりではなかつた。彼は曾て正當の免狀を所持せぬ者は薬局の開業を許さぬといふ法律を犯した爲め竊かにその筋へ告發され、ルウアンの地方裁判所へ喚び出された事があつた。これは彼にとつては實に恐る可き經驗であつ

二人の間には別に話も無かつたが、相見る眼に意味深い會話があつた。兩人とも胸の裡には同じやうな物思ひがあつた、丁度魂が奥の方で呑いてゐるやうだ。新しいスキートな心持——其心持の原を糺さうとは兩人とも思はなかつた。未來の歡樂は、沙漠の中の湖のやうに、未だそこへ達せぬ前に、先づ薰風を送つて人を恍惚に酔はせるのである。

レオンは事務所へ歸つたが、所長が不在なので又出かけた、とある丘へ上つて松の根に腰を下し、空を眺め乍ら、「如何して斯う自分は活氣が無いのだらう。」と獨言つた。「こゝも隨分面白くないところだ！」友達と云へば彼のオメイ。主人と云へば彼のギロオマン。ギロオマンは全く其職に心を奪はれてゐる人で、金縁の眼鏡をかけ、赤い頬髯

を白のネクタイの下まで延ばして、そのぎくしやくとした英國式の態度は、はじめいかに彼を驚かしたらう。それから善良で親切だけれど、ろくとしてぢれつたいオメイの細君、ピネイといふ商人、その他二三人——これが、彼が此土地で知己ちかづきになつてゐるすべてであつた。しかし、エンマ丈は、此等の人々と一段懸け離れた所にあつて、強く彼の心を惹いた。レオンはオメイと連立つて、屢々ボザリイの宅を訪れた。シャルルが餘り歓迎しないので、少し氣がひけつゝも、どうか親密になり度いと彼は願つてゐた。

四

エンマは窓際の肱掛椅子に腰かけて、街道を行き通ふ村の人々を眺めるのを常とした。レオンは日に二回宛事務所から金獅館へ通つた。

エンマはその足音に耳を欹てた。レオンは以^い時も同じ著物を著てゐた、振向いた事が無かつた。黃昏時など、縫ひさしの刺繡を膝に乗せた儘、頬杖してぼんやり考へ込んでゐる時、不意に窓先にレオンの影が現はれる事があつた。そんな時エンマはすぐ立上つて、仕事を止めるのであつた。

オメイは晩食時分よくやつて來て、八時頃店を了ふ爲に小僧が呼びに來る迄話し込んでゐた。日曜の夜には、客間に居て客を迎へた、あまり此薬剤師の家に遊びに來る人は無かつた。が、レオンだけは屹度やつて來た。するとオメイは屹度エンマに迎へを出した。

夫から數番の骨牌^{かるた}が始まる。オメイとエンマとはエカーテの勝負をやる。レオンはエンマの背後に立つて出す可き札を教へてやる。彼はエンマの椅子の脊に両手をかけて立ち、女の髪にさした櫛を眺めてゐ

事もある。時々自分の靴を床に曳いてる女の裾へ觸れて、からだ體でも踏みつけたやうに驚いて、足を引込ひきこましたりした。

骨牌が済むと、オメイは、後からやつて來たシャルルを相手に、ドミノといふ勝負事を始める。エンマは席を換へて、レオンと一緒に雑誌を讀む。レオンは詩を歌つて呉れとエンマに頼まれて、低い聲で吟じ始める、戀の文句の所へ來ると、注意深く靜かに聲を落す、それが屢々ドミノの爲に邪魔された。

やがて、オメイとシャルルは爐の前に足を投げ出して寢轉けて了ふ。爐の火は、何時の間にか消えかゝつて、急須が空になつてゐる。レオンはなほ歌ひつゝける。エンマはそれに聽きとれながら無意識的に燈ランプの傘をくるくると廻す。レオンはふと歌をやめて低い聲で話し出す、側に聞く人もないので、二人の會話は愈々楽しい。——こんな風で二

人の間には何時^{いつ}しか親密な交情が成り立つて、小説等^{など}を始終一緒に読むやうになつた。シャルルは餘り嫉妬心の強い方では無いので、別にそれに氣をとめもしなかつた。

シャルルの誕生日に、レオンはシャルルに立派な畫像を贈つた、レオンの親切はこれに止まらなかつた。ルヴァンに行く時はいつも序にシャルルの用足^{よだし}をして来てやつた。或る作家の筆によつて、仙人掌^{サボテン}が流行するやうになれば、レオンは屹度エンマへの土産に仙人掌を買つて、それを膝に載せて例の「燕」に乗つて還つて來た。

或晚、レオンが歸宅して見ると、自分の部屋の床の上に美しい毛氈が敷いてあつた。それは勿論エンマからの贈物であつた。如何して醫者の夫人がレオンにこんな贈物をしたか人々の問題になつた。が夫

人はレオンと親友だからといふ事で解決がついた。レオンは人々から斯う思はれる丈の機會をこれ迄に幾度も作つた。彼は始終エンマの容貌や才能について繰返して人々に語つた、聞くものから反感を買ふ位に——。

レオンは思ひ悩んだ。打明けようか、そんな事を云つたら怒られるだらうか。散々苦しんだ末彼は遂に思ひ切つて手紙を書いた。何本も書ては破り書いては破りした。遂に口づからおもひを傳へる可く、決心して家を出るが、さて當の人の前に出ると打出し兼ねるのであつた。エンマは未だ曾て、自分がレオンを愛して居るかどうかと考へて見た事が無かつた。戀は大なる響と光とを伴うて突然に現れて來るものだ、天から落ち来る颶風の如く倏忽として人生を襲ひ、木の葉を吹き飛ばす如く常規を破り理性を拂ひ、千仞の淵に人の感情を陥れるものだ——

さうエンマは考へてゐるのであつた。

四

二月のある日曜の、雪の降る午後、ボヴリイ夫婦とオメイとレオンとは、ヨンギルから一哩半程離れた谷間にあるリンネル工場を見に出掛けた。オメイは其二人の子供をも伴れて行つた。工場といふのは極詰らぬもので、廣々とした荒地の上に、砂や石で築き上げた羊毛製造車が仕懸けてあるその周圍に、小さい窓の澤山ついた建物を廻らしたものであつた。

エンマはオメイの腕に扶けられて、疲れを休めつゝ、霧の中からさし上る朝日を眺めた。ふと顧ると、そこに夫のシャルルが立つてゐた。帽子を前にのめらして、厚い唇をいかにも遲鈍らしく、殊に脊中の様子が

歯痒いほど太平無事な恰好をして、其無爲無能を外套の表面にまで遺憾なく示してゐた。エンマは夫の様子を見つめて、密かに腹立たしく思つてゐると、レオンが前の方へ歩き出した。寒さの所爲で顔が少し青白く、それが爲にその容貌が穢かなうつとりとした色を帶びてゐた。空を仰いだその大きな青い眼が、日に映じた山の湖よりも美しく澄んで見えた。

其時オメイの息子が、灰泥モルタルの中へ踏み込んで靴を白く汚した。藁で拭いたが落ちない。側に居たシャルルは、隠囊カクシから大きな小刀ナイフをとり出して貸し與へた。それを見たエンマは「まあ！」と獨言つた。「あんな大きな小刀を隠囊カクシに入れて？まるで百姓見たいだ！」

其夜、エンマは室に引籠つて、夫のシャルルとレオンと、二人の男を較べて見た。寝床に横になつて、輝く爐の火を見てゐると、片手に

た。こんな恐しい経験があつたにも拘らず、日を経るに従つて漸々當時の事も忘れて了つて、依然として營業を續けて居た。けれども村長や、同業者は常に彼を、らんでもいた。彼は四方に恐るゝものを持つてゐた。それ故今若しボグリイの歓心を買つて置けば、將来自衛の爲めに都合がよいといふ打算から、ボヴリイに對して殊に親切なのであつた。

シャルルは一向に患者が無いので少し消げた。ほんやりと坐つてゐたり、書齋へはいつて寝たり、じつと裁縫してゐる細君を眺めたりしてゐた。又徒然のあまりに、まるで日傭人のやうに立ち働いて、ペンキ屋の殘して行つたペンキで壁を塗り直して見たりなどしてゐた。けれど、金には甚く困つた。移轉やその他で大分費つたので、一萬五千法の細君の持參金はもう悉皆無くなして了つた。

併し、彼の目の前には一つの楽しい物が横はつてゐた——最も多少は心配の種でもあつたが。夫は他ほかでもない、細君妊娠の一條で、産月に近づくに従つて、細君に對する彼の愛は一層増して來た。細君が腰を曲げて危げに歩いて居るのを見る時、又は安樂椅子に腰掛けてゐるその前に坐つてじつと其顔をみつめて居る時など、シャルルは何と無くその身の幸福を感じざるを得なかつた。彼は細君の顔に手を當つゝ、「小さいお母おやあさん！」と呼んで、聲立てゝ笑ひ乍ら、愚にもつかぬ事を喋り立てる細君を浮立たせようとした。彼は非常に幸福だと思つた、彼は人生の上に兩肱もとを靠せて全く安心して息んでゐるやうに見えた。エンマは追々神經過敏になつて來た。一日も早く産の紐を解いて、母になり度いと思つた。が、今はもう思ふやうに金も使へなかつた。刺繡はりぬした縁飾のある薔薇色の帳よしわの帳よしわかか、懸つた搖籃——さういふものはどう

したつて買ふ事の出来ぬといふ絶望から、しまひには自棄氣味になつて、「立派な赤兒」といふ觀念も頭から放逐してしまつた。而して何の文句も言はず又選擇もせずに、必要品だけを村の裁縫師に注文した。こんな風で小兒に對する親の愛情を増させるやうな準備は何一つ出来無かつた。母の愛は、恐らくまだ生れぬ前から減じてゐたのである。しかし、シャルルが食事の度毎に、子供の話を持出するので、エンマも自然我が子の上を考へる事が多かつた。

エンマは男の子が欲しかつた。身丈たけが高く色が黒ければいいと思つて居た。名はジョオジと命けようと思つた。男の子を持つと云ふ觀念は、自分の今日までの無勢力に對して復讐むくしでもするやうに思はれた。男子は少なくとも自由だ。種々の情に耐へて行く事が出来る、總ゆる國を旅行し、總ゆる障碍物に打克ち、總ゆる快樂を味ふ事が出来る。女

は駄目だ。絶えず足枷あしかせをはめられて、思ふ儘の活動も出来ず、容易く他に支配される。女の意志は面紗ベールのやうに風の吹く儘に動く。常に希望の爲に動かされ乍ら、しかも終に束縛から脱する事が出来ないから駄目だ——かうエンマは考へて居た。

三

エンマは日曜日の朝、日の上る頃に分娩した。「娘だ！」とシャルルは叫んだ。産婦は氣絶する程失望した。

エンマは漸く肥立ひだち初める頃から、子供の命名について考へ出した。クララ、ルイザ、アマンダ、アダラなどと命けて見た。ガルシンダといふのも中々善い。イソオル、レオカデアなども悪くはないなどと思つた。シャルルは自分の母と同じ名をつけ度いといふ希望のぞみだつたが、

エンマは承知しなかつた。「此間レオンさんが來た時、マグダレンといふのが今流行する名だのに、何故あなたはさう命名ないんだらうつて不思議がつて居ましたよ。」とエンマは云つた。然れどボワリイの母は「罪人であつた婦人」の名などは不可ないと極力反対した。エンマは遂に、曾てヴォビイサアルの侯爵家に招かれた時に耳にしたベルタと云ふ名を命ける事に極めた。エンマの父ルウォオオルは、都合あつて出て來られなかつたので、名親にはさしづめオメイを頼む事にした。

誕生祝の晩には、オメイはベランデエのアナクレオンを歌つた、レオンはエニス邊の船唄を歌つた、ボワリイの母は古帝國時代の物語歌を歌つた。シャルルの父は興に乗つた餘り、三鞭酒シャンパンで洗禮してやるから赤坊を連れて來いなどと愚圖ぐずりはじめた、すると牧師は神を瀆すといふ所から怒り出して退席しようとする、婦人達が詫言する、オメイ

が仲裁するといふやうな騒ぎもあつた。

六
17

シャルルの父は一月計りヨンギイルに滞在して居た。彼が煙草を吹かし乍ら散歩する時冠つてゐる銀纓^{ギンケイ}の下つた帽子は土地の者の眼をひいた。彼は、金獅館からブランデエを取寄せては毎日飲んだ。また懷中手巾^{ハンドケル}を匂はす爲に、エンマの香水をどんくーと使つた。エンマは此舅と一緒に暮らす事を少しも厭と思はなかつた。舅の昔話——旅行の話や華美な生活の追憶談などは彼女の心を喜ばせた。

エンマは、ベルタを村端^{はづ}の大工の家に里子に出した。或日そこを訪ねる可く家を出た。途中でレオンに逢つた。「若し……」とレオンは云ひかけて其儘黙した。「お忙しいのぢや無くつて！」とエンマが尋ねると、レオンは「否^{いゝえ}」と云ふ。それでは一緒に來て呉れるやうにとエン

マは頼んだ。そこで二人は同道した。——此話はその晩のうちにヨン
ピール中に傳つた。村長の細君などは、女中の前で、ボワリイ夫人と
レオンとは豫め打合せて置いたのだと公言したほどであつた。

子供の乳母の家は赤煉瓦で葺いた矮い建物で、庭には櫛樓櫛樓が竿に懸
け並べてあつた。

「御這入りなさいまし。」と乳母は云つた。「御嬢さんは、彼所に能く
お寢お寝みになつて居ますよ。」

一室しかない家のなかで、エンマの子は搖藍の上に睡つてゐた。エン
マは夫を抱き上げて、彼處此處と搖り乍ら、靜かに子守歌を謡ひ出し
た。レオンは此貧しげな光景の中に美しい婦人を見るのを不思議だ
と思つた。エンマは、レオンを見て顔を赧あかめた。レオンは彼方を向い
て見ぬ振した。

エンマはやがてそこを辭し、レオンの腕を抱いて少時足早に歩いたが、やがて歩調をゆるめつゝ、横からレオンの顔を眺めた、男が其外套の縁迄黒い天鵞絨（カラア）の襟（カラア）を著けてゐるのを認めた。滑かな綺麗な栗色の髪の色は、その襟の上に蔽ひかぶさつてゐた。

二人はヨンギイルへの道を川に添うて辿つた。川の水は音も無く、冷たさうに流れて居た。細長い水中の草は、髪の束のやうに流れに揺れてゐた。蟲は葦の葉末に止つたり、水百合の葉を傳うたりして、其處此處を這うてゐた。家々は丁度今晝飯時で四邊は静かだ、二人は歩く足音、交す言葉、女の衣摺の音の外何物も聞かなかつた。近い内にルヴァンの芝居へ來る西班牙の舞踏者の話が出た。

「貴郎、行らッしやる？」とエンマが問うた。

「えゝ、行かれるやうでしたら。」とレオンは答へた。

鞭を振りつゝ、片手にオメイの息子の手をひいて立つて居るレオンが
目に浮んだ。エンマは自分に對するレオンの態度、言葉、動作などを
考へて、可愛らしい男よと思つた。誰かから接吻でも受ける時のやう
に唇を突出し乍ら、幾度も獨言ひとりごとを繰返した。「可愛い男！ 誰かに惚れて
るのぢや無いかしらん。妻にで無いとすりや、誰に惚れてるんだら
う！」

レオンが、自分に惚れてる證據はいくらでもあるやうに思はれる。
と、嬉しさに心臓が跳つた。爐の火は快い光を天井に映して居た。エ
ンマは仰向あおむけきになつて兩腕を伸ばした。同時に、彼女は限無い悲哀の
胸に湧くを感じた。「あゝ、若しこれが神の攝理であつたなら？ 多分さ
うだ！ 神の攝理に違ひ無い、さうすればそれを妨げるものは無い筈だ
けど——。」

翌日の夕方、吳服商のロオロオがエンマを訪ねて來た。彼は旅から旅へと、リンネルや絹布や寶石などを商つて廻る男で、お世辭のいゝ動作の馬鹿に丁寧な、而して仲々銳敏な狡猾な商人であつた。出来るだけ丁寧な言葉でエンマが華客とくいになつて呉れぬといふ不平を鳴らし、實際こんな小さな商人では、貴女のあなたやうな立派な奥さんに顧みられぬのも仕方がないが——などと皮肉めいたお世辭を並べて、さて、都仕入の品物をとり出して薦めた。

「これは何程いくどするの?」とエンマは、卓の上にのせた絹襟卷を指した。
「何程もしやしません。」と彼は答へて、「お金の方は何時でも御都合の宜い時で、へい、決して差支ありません、私は猶太人ゆだやじんではありますから——。」

エンマはとうとう夫それを求めて、ロオロオはいくつも頭を下げて、「お

金はいつでも宜しいので——。へい、若し御入用で御座いましたら、別に御用立てゝも宜しうござりますで。」

「それから、如才ない調子で、少しの間世間話をして、「どうか、何分宜しく。」と云つて彼は歸つて行つた。

エンマは爐の側でなだらかな心持で、静かに晚餐を食べた。

「けふは大變嗜みがよかつたこと。自分で斯う思ひ乍ら、その襟巻の事などを考へてみると、階段を上つて來る足音がした。レオンだ。が立つて卓の上の縫ひ残しの布きぬを取上げ、忙しさうに針を運び出した處へ、レオンは這入して來た。エンマの調子ははづまなかつた、話が杜絶え勝であつた。レオンは、音樂會へ加入しないかとエンマに尋ねた。エンマは「いゝえ」と答へたので、何故?と聞くと、「その譯はね——。」

といひかけて俄に唇を閉ぢて了つた。而して、徐かに長い鼠色の木綿絲をこいた。

「それぢや全然お止めになるんですか。」とレオンは堪^{たま}らなくなつて訊いた。

「何が?」とエンマは静に云つた。「音樂會? えゝ勿論止めようと思ひますの、家の事もしなけりやなりませんし、夫の面倒も見なけりやなりませんし、其他^{ほか}、爲なけりやならない事が澤山あるのですもの。」かう云つて、エンマは時計を見上げて、シャルルの歸宅の遅いのを案じるやうな風を見せながら、

「良人は親切な、いゝ人ですよ。」と三四度も繰返した。

レオンとてシャルルは好きだが、この優しい言葉は彼に不愉快な驚きを興へた。けれども彼も亦シャルルをほめた。而して、薬剤師の細

君もシャルルを讀^はめてゐると云つた。

「えゝ、あの方は本統に立派な方ですよ。」とエンマが云ふと、レオンも同じだ。そして、オメイの細君が、どうかすると、服裝^{ふなり}に頓着しないので、能く人のものわらひとなるといふ話などした。

「構ふ事があるもんですか。」とエンマは答へた。「ほんとに夫の爲を思ふ細君は、着物などに頓着するものぢやありませんわ。」と云つて、また押黙^{おしだま}つて考へ込んで了つた。

レオンは全然失望して歸つた。しかし、彼が出てゆく後姿^{うしろすがた}を見送る爲、エンマが急いで椅子を放れた事を彼は知らなかつた。エンマはレオンと同じ家に起臥^{おきべし}してゐる薬剤師の細君を幸福な人だと思つた。エンマの心は丁度金獅館の鳩のやうに、レオンの宿の方へばかり飛んで行つた。しかしエンマは、自分のレオンを愛してゐると感すれば感ず

るほど、愈々其情を抑へようとした。男に其胸を察して貰ひたい、打開ける機會を得度いとも思ふが、何となく氣味悪くもあり又耻づかしくもある、斯うしてゐる中に、男は自分から去つて了ふだらう。しかし、「私は貞女だ。」と鏡に對つて獨言ひとりごとが出來るのは悦ばしいと思つて、又竊かに誇らしい氣がした。自分が苦痛を忍んで激しい情を制するといふ事が、非常に立派な行爲のやうに思はれ、自分が其立派な行爲をしてゐるといふ誇によつて彼女は自ら慰めた。

しかし、彼女は常に苛々いらぐとしてゐた。天鵝絨服ピロウを持つて居ないとて悲しんだり途方も無い夢を見て泣いたり、家が小さいと云つて歎いたりした。

シャルルは妻の懊惱に就いては些すことも知らなかつた。彼は自分の妻

は幸福だと確信してゐた。それがエンマには情無くもあり、迷惑でもあり、又侮辱されたやうにも腹立たしかつた。こんな夫に、何の苦み甲斐があらう。自分の不幸自分の苦痛は皆夫の所爲だ。^{せゐ}四方八方を塞がれたやうな窮屈な感情の種は皆夫が蒔いたのだ。斯う考へてエンマは一筋に夫を呪うて、反抗的な心持にばかりなつた。平凡な家庭のすべてに飽き果てゝは、奔放な想像を逞しうした。結婚當時の快樂をおもひ返しては竊かに或る新らしい刺戟を欲するのに燃えた。而して夫を憎み夫に復讐するの理由を得んが爲に、寧ろ夫から虐待されん事を望んだ。時としては我と我が荒み行く心に驚かぬでは無い、出來る事なら、自分を幸福な身だと思つてゐたい、人にもさう思はせ度い。しかしそんな僞善には堪へられない。寧ろレオンと何處か遠くへ逃げて、新しい生活を試みようかとも考へた。すると忽ち胸の裡に、暗い

淵が現はれる。「あの人は最う自分を愛しては居ない。」と思ふ。「そしたら自分はどうなるのだ? どうして自分は救はれるのだ? 何の慰藉なぐさも喜びも無く——。」かう思ふと、エンマは息がつまるやうな氣がして、小さな聲が獨り咽び入つた。

五

或る夕暮、エンマが窓際に坐つてゐると、突然アンデエラスの祈禱の鐘が鳴り出した。平和な沈んだ其音は、静かに大空おほぞらに鳴り響いた。其音がエンマを學校生活の昔に連れて行つた。輝いてゐる燭臺や祭壇の上の聖櫃せいひきなどが思ひ出された。白の面紗ベールが信女達の黒い頭巾と交つた長い行列の中に加つて居た自分、立ち上かうる香の烟に浮んだ慈悲深いマドンナの顔——エンマの感情は漸々和らいで、風に吹かるゝ鳥の胸

毛のやうに、弱々しい世に棄てられたやうな心持になつた。心のすべてを捧げるやうな信仰を得度いといふやうな氣になつて、彼は知らず識らず教會堂の方へと出掛けた。

エンマが丁度、一人の子供に僧ブルニジアンの居所を尋ねようとしてゐる處へ、僧が戸を開けて現はれた。子供等は遅早く戸の隙間から食堂へ侵入しようとするのを、坊さんは「腕白者！また！敬神といふ事を知らないか。」と怒鳴りつけたが、エンマの姿を見ると慌てゝ、「おや、失禮しました。」

僧は丁度晩飯を詰込んだばかりのところで、息使ひも切なささうに問うた。「御壯健ですか。」

「はい、少し具合が悪う御座いましてね。」

「左様ですか。私もどうも——。」と僧は頷いて、「どうも病といふも

のはな。しかしどうも上人も仰有つてじやが、人間は患ふ爲に生れた
やうなものぢやて。で、ボワリイさんは、どういふお診察ですかな。」
「ボワリイ！」とエンマは侮蔑さげすんだやうに叫んだが、未だ薬は調合し
て貰はぬかと問はれて、

「えゝ、私は人間の薬なんか要りませんの？」

と彼女は答へて、「私は貴郎あなたに教へて頂き度い事が——」

「こりや、一寸待て、リップデエ！」此時僧は、堂の方で暴れてゐる小
兒を見て、「また拳固じんぐが欲しいのか？悪戯者いたづらもの奴あはが！」と怒鳴りつけて置
いて、さてエンマの方へ向き直つて、「あれはリップデエといふ大工の子
でしてな。どうも吾儘で困りますぢや——ボワリイさんは近頃いか
ですか。」

エンマは態と聞えぬふりをしてゐた。

「毎日お忙しいぢやらうな。此教區では私とあの方とが一番忙しい人間ぢやらうて。あの方は體の方のお醫者さんで。」と肥つた笑ひ方をしながら、「私は心の方のお醫者ですな。」

「さうですよ。」とエンマは答へて、願ふやうな眼附で僧を見乍ら、「貴方はどんな病氣でも癒^{なほ}して下さるでせうか。」

「えゝ、その事なら奥さん、仰有る迄もありませんぢや、實はな、今朝程もバディオギルに一頭の病牛があるといふので——あゝ一寸失禮します、これ、ロングマアル！ ブウデエー最早歸るなんて、怪しからん！」と、彼は堂の中でわい／＼と騒いでゐる子供の中に躍り入つて片端から拳固を配つた。さて、「これでよし」と僧は再びエンマの側へやつて來て、大きなバンダナ染の手巾^{ハンチ}を擴げながら、「百姓なんて實に憐む可きものぢやて。」

「百姓ばかりぢやありませんでせう。」

「左様、都會の職工などでも——。」

「職工ばかりぢやありますまい。」

「左様、徳の高い人、真正の聖人などにも隨分食べるパンの無かつた人もありましたよ。」

「パンなんか——。」とエンマは口の隅を歪めた。

「冬になつて爐の無い人なども——。」

「まあ！ そんな事がなんでせう！」

「え？ そんな事ですつて！ そりや貴方なぞは衣食の十分足りてる方ぢやから——。」

「あら！」とエンマは叫んだ。

「奥さん、ひどく氣分がお悪いのかな。」と僧は近寄つて、「慥かに胃が

お悪いのぢや。御歸りになつたがいゝ、而して少しお茶か曹達水でも召上つたらどうですかな。」

「何故ですの？」とエンマは夢から覺めたばかりのやうな顔をした。

「先刻から顔に手を御當になつてぢやから多分御心持がお悪いぢやらうと思ひましたぢや。」と僧は云つて。「何か御尋ねのやうぢやつたが何でしたかな。」

「いえ、何でもないのですよ。」

エンマは、さつさと歸つて來た。

六

エンマは家に歸つて自分の部屋へ這入るや否や安樂椅子に身を投げかけた。室内の器具などが靜まり返つて、暗い海のやうな影へ消え込

むやうに見えた。火は消えてゐた。時計はチクタクと鳴つてゐた。エンマは餘り四邊あたりが静かなので薄氣味悪く思つた。そこへ、ベルタがよ、ちーと歩いて来て膝に戯れた。「うるさいねえ。」とエンマは押しやつた。それでもベルタは、膝のあたりに凭れかかる事を止めなかつた。エンマは焦じれて、強く押しやつた拍子に、ベルタは倒れて抽斗ひきだしの角に打突ぶつかつた、頬が切れで血が流れた。エンマは駆けよつて子供を抱き上げた。そこへシャルルがはいつて來た。

「御覽なさい、貴郎あなた。」とエンマは静かに云つた。「此子は今遊んでる間に倒れて、獨りで怪我あつてしたんですよ。」

シャルルは、直ぐに手當あてをして、エンマを安心させた。エンマは晩飯も喰べないで、ベルタの面倒を見た。子供が寝静まるのを見てゐるうちに、エンマは段々と心が静まつて、こんな些細な事に心を傷めると

は何といふ馬鹿げた事だらうと思つた。

彼女は、眼に涙を溜めてゐる我子の寝顔を見て、獨言ひとりごつた。

「ほんとにまア！ 何て醜い子だらう。」

シャルルが薬剤師の店から歸つたのは、十一時頃であつたが、エンマは未だ搖籃の側に立つてゐた。シャルルは親切に妻を慰めた。シャルルが薬剤師の家を辭する時、一緒に階段を下りながら、レオンに、「少し貴方にお聞きしたい事があるので。」と囁いた。レオンは「何か察したのぢや無いか知らん？」と胸を轟かしたが、シャルルの間は、ルヴァンに於ける寫眞の代價に就いて、あつた。彼は夜會服を著た自分の寫眞を取つてエンマを驚かさうといふ希望をもつてゐた。レオンは毎週ルヴァンに行くので、それを聞いたのであつた。

レオンがルヴァンへ度々行くに就いて、オメイは、そこに情婦があ

るからだと想像した。この想像は違つてゐた。彼は今婦人と關係しては居なかつた。併し、どういふものか彼は近頃元氣が無かつた。椅子に體を投げかけて、あゝ人生は厭だなどと太息した。實際彼は人生の單調に堪へられなくなつた。しかし、流石に巴里は尙彼の心を引きつけた、彼は再び巴里へ出發する準備を始めた。而して、障礙を排して愈々巴里に向つて出發する事に決めた。

レオンはエンマに暇乞に來た。階段を上りつめた時、レオンは息切がしたので一寸休んで、夫から部屋の中へ這入つて行つた。エンマは急いで立上つた。

「またやつて來ました。」と云ふと、

「屹度貴君あなただと思ひましたよ。」と唇を咬んで顔を赤くした。

「ボザリイさんはおいでいすか。」

「いゝえ、不在です。」

二人は暫く無言の儘に顔を見合せた。同じ悲みの爲に相交つた二人の心は、同時にうつ動悸のやうに相合した。

「お別れの前に、ベルタさんに一度接吻したいんです。」とレオンは云つた。

エンマは女中にベルタを伴れて來さした。レオンは幾度となく子供の首に接吻して、「左様なら、ベルちゃん、左様ならよ。」と、子供を母に渡した。子供は室外おもてに連れ出されて、後は二人きりになつた。エンマは男に脊を向けて窓硝子に顔を當てゝ居た。レオンは帽子で軽く足を叩いてゐた。レオンはその女の胸の奥に考へつゝある事を曉り得ぬと同じく、その目が何物を眺めようとしてゐるのかを推する事が出来なかつた。

「それでは、御暇致します。」と男は太息を吐いた。エンマは遽かに頭を振り上げて、

「さう、では左様なら。」

双方から進み寄つた。男は手を伸した。女は暫時躊躇して、

「さうですね。ぢや英國流にね。」と片手を出して、強ひて笑顔を作つた。レオンは自分の指の間に女の手を感じた。其の濕つた掌の中に、からだ全體が消えてゆくかと思はれた。それから女の手を放した。二人の眼は再び出合つた。レオンはその部屋から消え失せた。

市場へ來た時、レオンは立ちとまつて、振返つた。窓に其人らしい影を認めた、が、窓懸は直に抑へ棒から落ちて其儘壁のやうに動かなかつた。レオンは急ぎ去つた。

エンマは窓を開けて雲をながめて居た。雲はルヴァンの方角に浮ん

で、黒い一團となつて轉がつて行く、その中を太陽の光線が黃金の矢のやうに射通してゐる。一陣の風が白楊の枝を吹き搖がすと、雨が遽に降つて來た。程なく雨があがると、太陽は再び照り出して鶏が鳴く、雀が濡れた籠で翼を整へる、小さい水の流はアカシアの花を浮べて小石の間を流れて行つた。「今頃、どこいらまで行つたらう?」とエンマは考へた。

其夜例の通りやつて來たオメイは、「先づこれで。」と坐り乍ら、「若い男も愈々送り出した。」

「巴里へ行つてどうするのだらう。」とシャルルは云つた。

「すぐまた巴里に馴れて了ふのでせうね。」とエンマは溜息をついた。
「え」とオメイは唇を嘗めずり乍ら、「巴里には面白い事が澤山ありますからね。殊に彼地では學生といふと馬鹿にもてるんで——よい許の

お嬢さんで隨分學生に惚れる者もあるのです。従つて結婚の機會も多いわけです。」

「しかし、それだから心配になる——。」とシャルルが云つた。

「全く。生馬の眼を抜くつていふやうな、悪い奴も澤山居ますからな。餘程用心しないと危いですよ。」とオメイが云ふ。

「それもさうだが、私は寧ろ病氣、例へば窒扶斯ちふすなどが心配です。田舎から出て行くと、とかく此奴に罹り易いので。」

「といふものは。」と、オメイは引き取つて、「生活の状態が一變する爲に、體質組織上に狂ひが生ずる爲です。加之巴里のブラン・デイや料理屋の食物は宜しくない——。」などと盛に一般的の説や自己の経験を吹聴した。

翌日はエンマに取つて最も傷ましい一日であつた。すべてが薄暗い霧に包まれてゐるやうに思はれ、胸は冬風の吹き荒ぶ廢城のやうであつた。エンマは難行の後の疲勞に襲はれた。一言に云へばそれは習慣となつて居た情緒又は動作の中止から生じて来る苦痛であつた。嘗つてヴォビイサアルの侯爵邸に招かれて、家に戻つてから後も、舞踏の響がなほその頭に残つて居た——丁度その當時のやうに憂く果敢ない心持であつた。

今思ふと、レオンは一層美しく、一層優しい男であつた。男の姿はなほこゝに留つて其影が今も壁の上に映つて居るやうに思はれた。エンマは男の歩いた絨毯じゅうたんや腰掛けて居た椅子から目を放す事が出来なか

つた。あゝ、二人は幾度一緒にあの川添を散步して、せうらぐ水の音に耳を傾けたらう。その時の太陽は如何に輝いて居たか。花園の奥の樹蔭で唯二人語り暮した午後のいかに樂しかつたか。然も其男、此世に唯一人の戀しい男、自分の幸福の基となり得可かりし其男は、今は遠く去つて了つた。自分の掘み得可き範圍内にあつた時、何故自分は其幸福を捉へなかつたらう。深くレオンを愛さなかつた事が今はなか／＼に腹立たしい。跡を追つて行つて、男の腕に縛り、「私よ貴方、私は貴方のものよ。」と叫び度い——しかし、そんな事は出來やしないとエンマは體からだを震ふるはす。しかも悔恨は更に其熱望を刺戟する。

その後といふものは、レオンの追憶は常にエンマの不満を啞かまつ種となつた。その追憶は旅人の捨てゝ行つた曠原の火のやうに燃えさかつた。エンマは自ら其火の中に飛び入つた。而してそれが消えかかる時

は更に煽り立てゝ、其火勢を増す可き燃料としてあらゆる物を用ゐた
近い出来事は云ふに及ばず、遠く古い憶出をも加へ、實際感じたもの
と共に空想をも交へた。

しかし、火の勢は燃料の不足の爲か、または餘りにそれを積み上げ
過ぎた爲か、兎に角次第に衰へて來た。相手がゐないので其戀も薄ら
ぎ、習慣となつて其悲みも薄らいだ。彼女の青白い世界に紅の光を上
げてゐた焰は漸次黒煙になつて消え失せた。果は良心も鈍つて、戀人
に思ひ焦がれる情がそのままに良人に對する憎惡の念になる位になつ
た。その胸の火は消えても、心は荒み行くばかり、しかも救助も來な
い、曙も來ない。身は暗黒の夜に包まれて、肌を刺す寒さの中に慄へ
てゐるかのやう。斯くてトスト時代の厭な／＼月日が再び始まり、エ
ンマは以前にも増して不幸な身となり果てた。自分の不幸は遂に終る

可き時節が無いのではないかと思はれた。

これ丈の犠牲を拂つた婦人が、多少の狂想に陥つたのは止むを得無い事であつた。エンマはゴシック風の祈禱臺を買つた。手を磨く爲に一箇月四十法^{フラン}からの金を費つた。ルヴァンへ手紙を出して、カシミアの衣服を誂へた。ロオロオから最上の襟卷^{スカープ}を買ひ込んで、それを上衣の腰の周圍^{ミハ}などに結んで、而して長椅子^{ソファ}に横はつて小説を讀んだ。度々髪の結ひ方を變へた。支那風に小環^{リング}や髪帶^{リボン}をつけたり見たりなどしたが、しまひには男のやうに、頭の一方で分けて梳^{とか}した。伊太利語研究の目的で字引と文法書を買つたり、歴史や哲學のやうな眞面目なもの^を噛^{かじ}つて見たりした。併し一つの本を読み初めてもすぐまた他の物へ移つて終ふ。心持が非常にむらになつて、時々馬鹿氣た突飛な事をした。プランデエの半纏^{ビブリオ}を一時に飲んで、夫を吃驚させた事もあつた。

こんな浮ついた事をしながらも、エンマは一向に愉快らしくは無かつた。老婆おばあさんか又は大望を仕損じた男などのやうに、唇をへの字に引き歪め、襯衣しゃっぷのやうな白い顔をし、鼻の孔を緊めて、人を見る時の目はぼんやりしてゐた。一度、頭に三本の白毛を見つけてから、始終年が寄つた／＼と云ひ續けてゐた。

エンマはまた屢々發作病に襲はれて倒れる事があつた。そんな時シヤルルがうろたへ騒ぐと、エンマは「莫迦ほかな！こんなこと、何でもありますせんよ。」と云つた。シヤルルは心配で堪らなかつた。彼は母へ手紙を書いて出て來させた。二人はエンマに就いて種々と相談したがエンマが醫學的治療を厭がるので、どうも仕やうがなかつた。

「何か手仕事でも遣らせたがいゝ。若し彼女が、自分で活計くらしきの幾分でも稼がねばならんやうにしたら、種々いろいろな空想など起す隙は無い筈だ

よ。のらくらしてゐるから、あんなになる。」とシャルルの母は云つた。

「でも、^{あれ}彼女は始終何かして居るんですがね。」

「何かしてゐるつて？ 何をしてゐるんです？ 下らない小説だの神様の悪口なごが書いてある。ろくでも無い本だのを読みちらかしたりして——。」

二人は容易ならぬ仕事とは思ひ乍ら、エンマには小説を禁じて終ふ事と決めた。母が専ら其任に當つた。

母と嫁とは全く冷かに相別れた。老母が滞在した三週間といふもの「お早う」とか「お休み」とかいふほんの形式的の言葉か、又は食事の時止むを得ぬ場合の外は、半打（はんダ）の言葉さへろくろく交さなかつた。

「ボザリイさんは御在宅ですか」

或日、緑色の天鵝絨^{びるうど}の外套を著て、黃色の牛皮製の手袋をはめ、厚い脚胖を穿いた紳士が、一人の百姓を連れて訪ねて來た。「何卒、ラ・ユウシエットのロドルフ・ブヴァランデエが來たとお傳へ下さい。」

ラ・ユウシエットはヨンギイルに近いところであつた。ロドルフは獨身者で少なくとも年に一萬五千法^{フラン}の收入があると噂されてゐた。ロドルフは連れて來た男——彼の馭者の爲に療治を乞ひに來たのであつた。其男は全身蟻に匍はれて居るやうな氣持がすると云つて惱んでゐるので、放血^{はうけつ}を行つてやる爲に、シャルルは其片腕に刃針を打つた。血が迸つた。患者は氣が遠くなつて椅子の上に倒れかゝつた。手傳つてゐた薬剤師の家の小僧までが、血を見て氣絶しかけた。

「エンマ！ エンマ！」とシャルルは叫んだ。エンマは二階から飛び下りるやうにして降りて來た。而して介抱に手傳つた。

療治が済んでから、そこへ來てゐた薬剤師のオメイも一緒になり、人々は氣絶の話を始めた。エンマが未だ一度も氣絶した事が無いと云つたので、

「それは、御婦人にしては珍らしい。」とロドルフは應じて「然れど隨分神經質な人もあるもので、私は決闘の介添人が、拳銃の玉込たまこめした時の音に驚いて、氣絶したのを見た事がありますよ。」などと云つた。

ロドルフは、先づ患者を先に歸したが、

「併し、彼奴きやつのお蔭で、貴女にお昵懇ちかづきが出來たといふもので。」と、エンマに云つて、卓テーブルの上に三法フランのせて、無難作に會釋して行つた。エンマは、何か考へ込んだやうな風で、時々歩調を緩め乍ら、草原の白楊の樹蔭を辿つてゆく男の姿を遠く眺めてゐた。

ロドルフは歩き乍ら呟いた。「佳い女だ、素的な美人だ、歯の質たまの好

い、目の黒い、足の小さい、全く巴里式だ。どこから來た女だらう。何處であの肥つた男は貰つて來たのだらう?」

ロドルフは今年三十四歳。幾人もの女に手懸けて、よく女といふものを知つてゐた。彼は考へた。あの亭主は鈍い男だ、屹度女の方が飽きてるに違ひない。第一彼男の爪の穢い事、顔などは三日も剃らぬらしい、彼奴がせつせつと患者廻りをしてくる間に、細君は屹度靴足袋の穴塞ぎでもしてゐるんだ。あの女はもう飽々してゐる、屹度都會に住んで、毎晩舞踏でもやつて見たがつてゐるんだらう、可愛さうに、姐の上の鯉が水に渴してゐるやうに、あの女は戀に餓えてゐるんだ。障れば落ちる——といふ奴だ。情が深い事だらう、可愛らしい事だらう、さてそれから先になつて捨てる時は——。

ロドルフに、目下ルヴァンの女優で、考へるのさへ厭になつたとい

ふ情婦が居た。彼は今この女をエンマと比較して、複雑な戀の快樂を思ひ起した。

「あゝ」と吐息といきして、「ボヴリイ夫人はあの女から見ると餘程美しい、而して鮮さわらしい。あの女なんか實に陋いじやうしい、而してあまりにしつこ過ぎる。」

彼は心の中でエンマの食堂に坐すわつて居る時の姿を想像して見た。

「あゝ、どうしてもあの女を手に入れなければならぬ。」と叫んだが、「それにしても、何處でどう逢つたらよからう？ 仲々邪魔が多いが——。」と考へ込んだ。が、彼は再び叫んだ。「あの眼は錐の様に人の心を刺し通す、それからあの青白い容貌かほ！ あゝ、自分は青白い婦人を讚美する！」

彼は深く心に期した。「これから漸々親しくならう。而して夫婦連で

泊りに來て貰はう。さうだ、農產物共進會もぢきだ、其時に——。」

八

有名な農產物共進會の日はつひに來た。本館の前には常春藤きづなの花束が懸つて居た。天幕は烟の中に張られて、そこに宴席が設けられてあつた教會堂の前の處に白砲が据えてあつて知事が到著した時に祝砲を打つ手筈になつて居た。

金獅館の女將は此賑ひも、案外自分の商賣の濕ひにならぬので、ぶつくさと不平を漏らしてゐた。そこへ通り合せたオメイをつかまへて商賣敵の悪口などしゃべつてゐたが、オメイは、エンマの姿を見つけると、早速挨拶す可くその方へ急いだ。エンマはロドルフの腕に扶けられてゐた。

「あの肥つた男に見つかり度くないですかね。ね、そらあの薬剤師！」

ロドルフはオメイを認むるや斯うエンマに叫いた。

エンマは肘で軽くロドルフをついた。

「はてな、どういふ氣なんだらう？」とロドルフは不思議に思つて、女を横目に見た。女は至極落着き拂つてゐる。睫毛の長い眼は、稍々上向に眞直に前面を眺めて、美しい顔には血が柔かに漲つて居る。首を傾げて、唇の間から白い歯を見せてゐる。

「俺を弄つてゐるのか知ら？」とロドルフは思つた。が、女の舉動は男を警戒する爲であつた。吳服屋のロオロオが、話相手になり度いといふ風をして、二人の後から尾いて來るのである。

遂にロオロオは近寄つて來て、「これは能うこそ。」と帽子を取つた。が、少し併れ立つて來た時、ロドルフはエンマを誘つて、不意に横道

道に外れた。そして、「左様ならロオロオさん、何れ後程」と云つた。

「まあ巧く外したこと!」と後でエンマは笑つた。

「外所の人に掛り合つてゐる隙はありませんからね、殊に今日幸ひ貴女にお目にかゝつたのですから……。」

エンマは赤くなつた。男は話を轉じて、天氣の好い時草原を歩くのは愉快なものだなどと云つた。路傍（みちばた）の延命菊を摘みとつて、

「此村の娘達の戀の占ひにする花が澤山咲いてゐますね。私も摘みませうか。」

「貴方にも戀がおありなのですか。」とエンマは軽く咳をした。

「さあ、如何ですか?」

原には共進會に來た人々が群がつて居た。出品物の審判が始まつて百姓は一人々々、繩圍ひの中へ入つて行つた。

審判官達が何か低い聲で話し乍ら靜かに歩いて來た。其中から審判長の男が、ふとロドルフを認めて親しげに笑ひかけて、「やあ、もうお歸りなんですか。」と問うた。

ロドルフは今來たばかりと答へて、その男が彼方へ行つて了ふと、「今から歸るなんて——。彼様な奴あんやつと話しするより、貴女と一緒に居る方が餘程好いのです。」

ロドルフは動物の繫いである前にエンマを誘うたが、エンマが、それに興味が無ささうだつたので、今度はヨンギイルの婦人やその衣裳に對しておどけ交りの品評しなさだめをはじめた。

「ね、貴女も左様さうお思ひでせうが、こんな田舎に住んで居つたところで……。」

「何をしたつて骨折甲斐がありません。」とエンマは云つた。

「お歴々の方の中にも、外套の裁ち方の良否さへ分らない人があるのですからねえ。」

二人は夫から田舎の生活の平凡な事、平凡な生活の爲に人生が如何に害はれるかといふ事、人生の眞の興味といふ事などを語り合つた。

「あゝ、詰らない！」とロドルフが嘆じると、「貴方が？」とエンマは目を圓くして、「あなたなどはいつも御愉快であるらつしやる筈なのに。」

「えゝ、他目にはさうも見えませう。私は社會へ出てゐる時は假面を被つて居ますからね。けれども、月の晩に墓地などをさまよふ時はいつも沁々と死んだ方がましだと思ひますよ。」

「お友達は？」

「友達？ 何んな友達？ 私の事を心配して呉れるやうな友達なんぞあるもんですか。」と、ロドルフは嘆息した。エンマは其の腕を執つた。

ロドルフは獨言のやうに、「さうだ。本當に世の中の事は儘にならない、いつでも自分は孤獨ひとりはつちだ、若し自分を愛して呉れる人があつたなら——。」

「でも」とエンマは云つた。「私は貴方がそんな可哀さうな方とはおもへませんわ。」

「なぜでせう?」

「だつて貴方は御自由な體で……」と躊躇して「そしてお金持で——」「御冗談ばかり——。」とロドルフは云つた。エンマが更に口を開かうとした時、砲の音が鳴つた。やがて知事の馬車がやつて來た。

ロドルフとエンマとは本館の第一階へ上のほつて、窓際に陣取つて式場を眺めた。演壇に一人が立上つて、何やらしゃべり出した。

ロドルフはエンマにすりよつて其耳に聞いた。「あゝいふ輩を見て胸が悪くなりはしませんか、高尚な本能とか純粹な同情とかは彼等の斥ける處なんです。例へばこゝに二人の不幸な人が出會つたとすると、彼等は總ゆる手段を盡してその二人を引離さうとするのです。しかし早晚二人は愛を以て結合する。それが自然の運命なんだから仕方が無い。男女は双方の爲に生れたものなんですからね。」

彼は凝じてエンマの顔をみつめた。エンマは男の眸に輝く小さい金色の光を見、且つその髪の毛の香油を嗅いで、何となく引き込まれるやうな感じがした。曾て、ヴォビサアルと一緒に舞踏した子爵の鬚も亦、レモンや、ヴィルの香がした事を思ひ出して、女は尙ほ深く男の香を嗅ぐ可く半ば目を閉ぢようとした時、遙かに向の小山を降りて来る例の馬車「燕」を見た。するとレオンの事が思ひ出された。レオンの姿がそこ

に見えるやうな氣がしたり、子爵の腕に抱かれて煌々する燈の影で舞踏をしてゐるやうな氣がしたり——しかも、ロドルフの頭は自分のすぐ側にある。彼女はこれ迄の希望が全く充たされつゝあるやうな樂しい心持になつた。而して周囲の柱にまつはつてゐる常春藤の鮮かな色を吸ふ可く鼻の穴を擴げた。そして、手袋を脱いで手巾で自分の身を拭いた。顛黽こみからの動悸うつ音の中に、微かに群集のどよめきや辯士の演説が聞えた。

會長其他の人々が演壇に立つて種々の事を喋べつてゐる間に、ロドルフは、男と女とが互に牽きつけられるといふのは、前世の宿縁であるなどとエンマに語つた。

「どうして二人はこんなにお親しくするやうになつたのでせう?」とロドルフは問うた。「勿論抵抗する事の出来ない本能が二人を近づかせ

たに違ひ無い。丁度二つの河が一つに合ふ迄は流れてゆくやうなものだ」と云つて、エンマの手を握つた。女は手を引かうともしなかつた。

「成績優等に對する賞。」と會長が叫んだ。

「例へば今日貴方にお逢ひした時。」

「カンカンブアのビゼエ氏へ授くるもの。」

「かうして御伴しようとは思ひがけませんでしたね。」

「七十法^{フラン}。」

「何遍すぐお別れしようと思つたか知れませんが、到頭かうしてお伴する事になつて了ひました。」

「肥料一荷。」

「今日のやうに明日も明後日も、毎日、一生。」

「アルゲエルのカロン氏へ金牌。」

「これ迄逢つた婦人の中でも、貴女ほど。」

「ジヴリ・サン・マーテンのブーアン氏のメリノ羊授賞。」

「けれども貴女は屹度私を忘れてお了ひでせう。私といふものは、影のやうに貴女の生涯から消えて行くでせう。」

「ノートル・ダムのベロオ氏へ。」

「併し、これでもすこしは貴女の生活又は貴女の思想に、私といふものゝ、影のさす事が無いとは限りますまい。」

ロドルフは女の手の、捕はれた鳩が飛び出さうともがくやうに暖く懾るおどるへて居るのを感じた。

「おゝ、貴女は私をお嫌ひぢやないんですね。私の心を御存じなんですね。」

會長はなほ演説を續けてゐた。「フレミッジ肥料——亞麻栽培——下

水法——長期の貸地契約——奉公の期限。」

ロドルフは最早聽いてゐなかつた。二人は顔を見合せてゐた。唇は燃え戦いてゐた。

其中に式は終つた。

ロドルフはエンマを其家迄送つて行つて入口の前で別を告げた。其夜の宴會の席でも、ロドルフはエンマの事ばかりを思ひ續けてゐた。
先刻自分の云つた事やエンマの唇の形などを思ひ浮べて居た。

その晩花火の揚る頃、彼は再びエンマの姿を見たが、此時はエンマは、夫とオメイと一緒にあつた。エンマが黙つてシャルルの腕に縋つて居るのを、ロドルフは支那提灯の蔭から眺めて居た。

六週間ほど過ぎて、ロドルフはまたやつて來た。餘り早く來るもの

宜くないと思つて彼時から獵に出掛けたのだ。今は却て少し遅くなり過ぎたと思つた。彼は心の中で考へた。「夫人が若しあの日自分に惚れたとすれば、今も矢張惚れてるに違ひない。而して自分を待遠しく思つて居るに違ひ無い。一つ事件を進めてやらう！」

彼は客間に通つてエンマの青白い顔を見た時、愈々それに違ひ無いと思つた。女は薄暗い夕暮の室に一人でゐた。男の叮嚀な會釋に小さく答へた。

「非常に忙しかつたものですから　それに體からだが好くなかつたので。」とロドルフは云つた。

「餘程お悪いんでしたの？」

「どういふのですか。」と、男は女の傍に腰掛け乍ら、「實はね、伺ひ度く無かつたのです。」

「おや、何故でせう？」

「お分りになりませんか。」と、女の顔を見つめたので、女は赤くなつて俯向いた。

「エンマさんは——。」

「貴方！」と女は少し身を退き乍ら云ふ。

「あゝ、お分りですね。」と悲しさうに、「名を呼んで呉れるなと仰有るけれど、貴女の事が胸一ぱいになつてゐるので、ついお名前が口に出ていけないので。ですから、御訪ねしまいかと思つたのです、ボワリイ夫人。それは貴女の名ぢやない、他人の名ぢやありませんか。他人の——。」と繰返して男は両手で顔を掩うた。「私は貴女の事を思ひ續けてゐます、けれどもかう考へると落膽がうちかりして了ひます。許して下さい、私はもうお別れしようと思ひます。左様なら、私は遠くへ——私の

事などお耳に入らないやうに遠くへ行つて了ひます。けれど今日といふ今日も斯うして私は貴女に引きつけられて來ました。どんなに跪いても駄目です、美しい者愛らしい者尊ぶ可きものには支配されて居るんですね。」

こんな事を云はれたのはエンマは初めてであつた。其熱心な言葉にエンマの自負心は影を消して了つた。

「私は夜毎御宅の近所へ来て、月光に照らされてゐる屋根や、微風に吹かれてゐるお庭の樹や、貴女の室の灯影などを眺めてゐたのです。あゝ、貴女はこれほどに思つてゐる私を——可哀さうな男を夢にも御存じ無い——。」

エンマはすゝり泣きしながら、男の方に向いて、
「そんなにまア、貴方は——？」

「こんなにお慕ひ申してゐるのです。何とか一言言つて下さい、唯一
言！」

ロドルフが跪かうとした時、臺所の方に女中の足音がした。見ると
客間の戸はしめてなかつた。

「妙なことばかり云つて、どうぞ悪しからず思つて下さい。」と云つ
て、ロドルフが話頭を轉じた處へ、ふいとシャルルが這入つて來た。
「いや、唯今承りましたが、奥さんがどうも御氣分が勝れぬさうで
——」とロドルフが云ふのを受けて、シャルルは、それが誠に心配だ
と云つた。馬に乗つて運動して見たらとロドルフは勧めた。これはい
ゝ考へた、どうだね、さうしては？」とシャルルはエンマに云つた。
エンマが、馬が無いと云ふと、ロドルフは一匹さし上げようと云ひ
出した。けれどもエンマは辭した。

ロドルフが去つて二人になつた時、

「何故お前はブウランヂエさんがあんなに勧めて下さるのを御受けしなかつたんだい？」とシャルルは詰つた。^{なじ}エンマは、でも人に變に思はれるからと云つた。

「そんな事、構ふものか。何よりも身體からだが大事だ。^{うのひと}他人の好意を受けたらいゝぢやないか。」

そこでエンマは馬の稽古をはじめる事とした。而して、大抵乗り廻せるやうになつた時、シャルルは、ロドルフに、妻は馬で何處どこへでも御伴が出来るやうになりましたと書き送つた。翌朝、ロドルフは立派な馬を二頭連れてやつて來た。黒の天鵝絨の上衣、白い縞の袴、深い乗馬靴を穿いた男の姿を、エンマは惚々ほれくと見た。二人は轡を並べて出かけた。

「行つてらつしやい！まア元氣のいゝお馬ですこと！」

振返つて見たエンマの頭の上には、フエリシテが窓際でベルタを遊ばせてゐた。ベルタは接吻するかのやうに口を尖らした。エンマは鞭の柄を振つてそれに應へた。

丘の頂へ來て二人は立止まつた。十月初、地平線の彼方にかけて、四邊は霧がこめて居た。その裂目から、ヨンギイルの家々の家根や、川に添うた花園や、庭や堀や會堂の頂などが見えた。エンマは目を細くして自分の家を眺め搜した。

馬を進めて森の中へ入つた時、太陽が現れた。

「有難い！神様が私共を護つて下さるんですね。」とロドルフは云つた。

「貴方はさう思召して？」

「さあ、行きませう！」と、ロドルフは唯斯う答へて馬を進めた。

荆棘いばらがエンマの着物にからみつくと、男は馬上にからんでそれを引離してやつた。男はエンマと並んで、荆棘を押分けて進んだ。

空は青く晴れて黄や樺の木の葉の間に、紫色の灌木の花が交つて居た。白嘴鳥しらはしがらすがさくと繁みの中に羽搏はねたかいて鳴き乍ら彼方の樺の樹に飛んで行つた。

軀て二人は馬を捨て、榆いのちの樹蔭に分け入つた。女は草臥くたびれて足を留めようとしたが、男はもう少し行かうと云つて先に立つた。

「どこへいらつしやるの？」

男は答へなかつた。女は息を喘はづませた。男は四邊を見廻しながら鬚を噛んでゐた。軀て榆の樹を切り倒したひろぐとした場所へ出た時、

二人は倒れた樹の幹へ腰を下した。ロドルフは物静かな眞面目な調子で、心の中を語り出した。

女は靴の尖で地面を穿り乍ら、首を曲げてそれを聽いた。男は二人の運命が一つに結ばれてゐるとは思はぬかときいた。

「いゝえ、私さうは思ひません、そんな事は出來ないぢやありませんか？」かう答へてエンマは立上らうとしたが、押止められて再び腰を下した。そして少しの間、其の焦れあへぐやうに潤んだ男の眼を見て居たが、

「もうそんな話止ませう。馬は何處？歸りませう。」と口早に云つた。「馬は何處に居るんです、何處に？」と怒つたやうな苦しさうな様子をして再び繰返した。

男は目を据え口を結んで妙な微笑を浮べ、兩手を擴げて女に近寄つ

た。女は身をかはして慄へ乍ら、

「あら恐い！ 恐い人だこと！ 歸りませう、歸りませう。

「そんなにお歸りになり度けりや。」と男は云つたが、再びもとのやうに優しい物怖ぢしたやうな顔附にかへつたので、女は男の腕を取つて歸途に就いた。男は尋ねた。

「どうなすつたんです？ 思ひ違ひなすつちやいけませんよ。貴女は高臺の上のマドンナです、とても近寄る事は出來ないと私は思つてゐるんです。けれども貴女無しに私は生きて居られないのです。どうぞ私の友達になつて下さい、私の妹に、私の優しい女神になつて下さい、ね。」

かう云つて男は女の手を取つた。二人は纏て池の畔ほとりに出て、水際に添うて進んだ。

「私が悪かつたんですよ。私が悪かつたんですよ。」とエンマは叫んだ。「私は貴方のさう仰有るのを待つてゐたのですよ。」

「なぜ？ エンマさん！ エンマさん！」

「おゝ、ロドルフさん！」

夕影は次第に濃かになつた。四邊は静まりかへつて、樹の香が快く匂うて來る。エンマの胸は激しく鳴つた。森の彼方の遠い響に耳を傾けてゐると、其響が自分の昂たかぶつた神經の震動と一つになつて聞えた。ロドルフは巻蓑を咬へて、小刀で手綱の繕ひをして居た。

二人は同じ道を通つてヨンザイルへ戻つた。來た時の蹄の痕が泥に残つて居た。同じ數、同じ芝生の石、四邊の様子は先刻來た時と些とも變つてないが、エンマの身には山の位置が轉じたよりも、もつと大きな變りが起つたのであつた。

晩飯の時、シャルルは妻の顔色が非常によいと思つた。而して今日の馬上散策の様子を種々と尋ねたが、エンマは聞かれるのがいやであつた。シャルルは今日の晝頃、さる人から五百法^{フラン}で馬を買ひたることにしたと語つて「多分お前の氣に入るだらうと思ふ。どうだい、嬉しからう?」と云つた。エンマは唯うなづいて見せた。十五分ばかりして、「貴方、今夜どこへか御出でなさるの?」

「うむ、どうしてそんな事を聞くんだね?」

「いえ、別に。」と云つたが、軽てひとり自分の室に閉ぢ籠つて、今日の事を想ひ返した。そして鏡に映つた自分の眼の、今迄になく大きく黒く深いのを見た。何か微妙なものゝ影響を受けて、心も身も共に變化したのを感じた。

「戀人が出来たのだ。私には戀人があるのだ。」と彼女は繰返した。再

び少女時代が來たやうな氣がして嬉しかつた。エンマは今すべてのものを情熱と狂歡と恍惚とに化して了ふやうな或る怪しいものにぶつかつたのだ。丁度薔薇色はいいろの空氣の中に呼吸して居るやうな氣がする。日光に輝く峰のやうな情感の上にあつて、平凡な日常生活を遠く山蔭に隠れた谷間のやうに望む心地である。

エンマは今迄讀んだ小説の中の女主人公ヒロインを想ひ出した。而して自ら長い間の夢を實現して其女主人公となつたやうな心持がした。殊に彼女は自分の從前の生活に對して今こそ復讐し得たといふやうな満足を感じた。今迄の苦みは償はるゝ時となつた。長い間堰かれてゐた戀は、今流れ出した。エンマは今こそ自由に肆ほじいままにその戀に耽らうと思つた。其翌日、エンマは新しい戀の樂みに一日を過した。女は半ば眼を閉ぢ乍らエンマといふ自分の名を呼んで呉れるやうにとロドルフに乞ひ

且つもう一度自分を愛して居るといふ事を繰返して言つて呉れるやうに頼んだ。その日から二人は毎日手紙のやりとりをした。エンマが自分の手紙を川に近い花園の奥の土塀の孔に隠して置くと、ロドルフが自分のと入れ換へて置くといふ風にした。ロドルフの手紙はいつも短いとエンマは思つた。

或る朝シャルルは夜明の前に、病家へ出かけた。エンマは朝の内、人々の未だ眼覺めぬ中に、ラ・ユウシェットのロドルフの許へ密と行つて來ようと思ひ立つて、思ひ立つと我慢出来無くなつて出掛けた。青白い明け方の空に風見車の見えるのが戀人の家である。

門を潜り石段を上つて廊下に出た。とある戸を開けると、そこには思ひ掛けなく一人の男が寝てゐた。それはロドルフであつた。エンマは餘りの嬉しさに聲を擧げて走り寄つた。

一度此冒險に成功してから、シャルルが早出する度毎に、エンマは急いで着物を着換へて出掛けた。辻らぬやうにと柳の枝につかまつて川岸傳ひに烟へ出る。時々躊躇して靴を泥だらけにする事もあり、牛や馬に出つくはして驚いて驅け出す事もある。兩頬を紅くそめて、薰りのいゝ汗を流して、鮮かな空氣を身の周圍に漂はせ乍ら驅けつける。ロドルフは大抵未だ眠つて居た、そこへエンマは春の朝の女神のやうに訪れるのである。

抽出から櫛を取出して髪の毛を撫でつけて鏡に姿を映して見たり、寝臺の傍の机の上にある男の煙管きせるをくはへたり——その媾曳あひびきの十五分間！ エンマはいつも男の傍を去り度くないと云つて泣いた。自分の體は何か自分よりも強いものゝ爲に男の方に引きつけられるのであつた。或日、男が全く豫期しない時にやつて來た事があつた。男は不機

嫌らしく、「どうしたんです?」などと聞いた。而して、近頃エンマの訪問の大膽に過ぎるといふ事を注意した。

一〇

二人はヨンギルの中で何處か安全な場所を探す事として、此冬の中丈はロドルフが、エンマの方へやつて来る事とした。窓に砂を投げつける音が聞えると、エンマはすぐ立つて行くのだが、どうかするとシャルルはのべつに喋り立てゝ脱けられぬ事があつた。そんな時彼女は焦れに焦れて若し能ふならば窓から抛り出して了ひ度いやうな眼付をした。纏て寝間着に着換へて、本をとり出して、さも面白さうに読み初める。寝床にはいつてゐる夫は、

「お寝よ、エンマ! もう遅いよ。」

「えゝ、直ぐ」

シャルルが寝入るのを待つて、エンマは部屋を出て行く。

曾てレオンが、燃えるやうな眼附でエンマの顔をさしのぞいたのも矢張この四阿の長椅子あづまや　ベンチの上であつた。今、エンマはレオンの事は忘れてゐる。

雨の夜は、相談室の中に匿れて逢つた。ロドルフはまるで自分の室のやうに振舞つた。彼はシャルルに就て種々冗談を云つたが、エンマにはそれが一番耻づかしかつた。エンマはロドルフが最少し嚴肅でも少し芝居氣があつて欲しいと思ふ事が折々あつた。或る時エンマは不圖庭の細道に人の蛩音あしおとがしたと思つたので、

「あら、誰か來ましたよ。」と云つた。男はすぐに蠟燭を吹き消した。
「貴方拳銃ピストルをお持ちになつて？」

「何故なぜ？」

「何故つて、用心に。」女は答へた。

「貴女の良人に對して？ばかな！」ロドルフは一撲ひとうちに殴り倒して丁ふといふやうな身振をした。女は侮辱されたやうな氣がした。

ロドルフは、拳銃に就いて種々と考へて見た。眞面目にかう云つたんだとすれば、ばかくしい事であると同時に憎む可き事だ、と考へた。彼に於ては毫もあの親切な柔軟なシャルルを憎む可き理由は無かつたから。しかし女は非常に感傷的になつて居た。寫真を交換しようと云出したり髪の毛を切つて誓を立てたり、永久に變らぬ證據にと、結婚の指環を男に求めたりした。

兎に角、エンマは好い女であつた。彼女が荒すさまない清らかな女であるといふ事が、ロドルフの自負心と情慾とを煽つた。エンマの思ひ揚

つた思想は甚だ困りものであるとは云へ、その思ひあがつた女が自分に身も心も打任せてゐると思ふと嬉しかつた。女は慥かに自分を戀してゐる——と判ると、もう自分から進んで女を嬉しがらす必要はないと思つたので、男の態度はいつの間にか變つて來た。もう女を泣かせる程優しい事も言はなければ、女を狂はせる程激しい愛し方もしなかつた。エンマが命懸で飛び込んだ戀の淵は斯くて次第に淺くなりゆくやうに思はれた。ロドルフは種々にして内心の無愛想を飾る事に勉めてゐるとは、眞逆にエンマは知らないから、自分の愛を二倍にしてかゝつた。男がそれ程に思つて居ないと氣がつくと、屈辱の感がむらくと起つて、憤ろしい心持にもなるが、男の顔を見ればその憤も消えて了ふ。自分は男の爲に催眠術を掛けられてゐるのだと思ふと、ロドルフが何となく恐ろしくもなつたが、とにかく二人の戀仲は平穏に

續いて行つた。春が來た時、二人の仲はまるで自分達の家で爐を圍んでゐる夫婦のやうであつた。それは丁度曾てルウオオル老人が、足の療治をして貰つた禮として、シャルルに七面鳥を贈つて來た時節であった。

或晚、女は何時になく嚴肅な顔附をしてゐた。男は何か蟲の居所が悪いためなんだらうと思つた。男が三回までも女との約束を違へて、その次に逢つた時、エンマは何となく冷かな、つんとした様子を見せたけれど、ロドルフはその悲しげな溜息や、わざとかくしから出した手巾などに、一向注意する風も無かつたので、エンマは眞實悲しくなつて來た。何故これまで夫を憎んだのだらう、夫を愛してゐれば、その方が幸福ではないかなと獨りで考へた。しかし、エンマをして夫の方に心を翻させる丈の動機きうかけをシャルルが與へて呉れないので、エンマ

は徒に思ひ惱んでゐると、折柄、仕合にも例の薬剤師のオメイが、その機會を與へて呉れた。

十一

オメイは日外彎脚いつぞやかまあしの新療法に關する一書を讀んで、苟くもヨン并イルをして世界の文明に伴はしめる爲には、かうした新療法は、是非村でやらねばならぬと考へた。そして、此話をエンマに持ち出して、此新療法は屹度成功するであらうといふ事や、それが同病人にとつて的一大福音にして醫師に取つての一大名譽である事を語り、シャルルをして早速それを金獅館のイツポリットに試みさせるやうに勧めた。エンマは少からず、心動いた。それが成功して夫が非常な名譽と莫大の金とを併せ得れば、何も他に戀などを求めないでも夫によつて

此月日を満足させられるであらう——かう思つてエンマは熱心にシャルルに勧めた。シャルルは餘り氣が乗らなかつたが、とう／＼最愛の妻の嘆願に動かされてオメイの意見に従ふことゝし、早速ルヴァンから書物をとりよせて毎晩熱心に研究しはじめた。一方、オメイは言葉を盡していやがるイツボリツトを納得させ、金獅館の一室を治療室にあって、愈々シャルルの執刀で、イツボリツトの彎脚^{かまち}切開といふ段取になつた。

首尾よく療治が終ると、オメイはそこに集まつた村の人々に其好結果な事を喋り立てた。イツボリツトは非常に喜んで、幾度かシャルルの手に接吻した。シャルルがすつかり用を済まして、家に歸つて來ると、戸口に立出でゝ待つて居たエンマは走り寄つてその首筋へ抱き付いた。艶て相對つて晚餐の卓についた時、シャルルはいつになく澤山

食べた。

その晩は實に樂しい晩であつた。二人は種々と未來の幸運を語り合つた。シャルルはもう非常な名譽を得て金持になつたやうな氣がした。エンマも夫に對する新しい感情の起るのを自覺して樂しさ限りなかつた。而して此哀れな善良な夫に對する愛が未だ心の中に消え残つてゐるのを知つて非常に嬉しかつた。それから五日目の事、金獅館の女將が眼色を變へて飛んで來て、イツポリットが非常に苦んでゐると傳へた。シャルルは吃驚して金獅館へ飛んで行つて見ると、患者は目を白黒して跪き苦しんでゐる。覆をとりのけて見ると、切開した部分が、今にも皮膚が破れさうに腫れ上つて居た。シャルルは相當の手當をして稍稍痛のとれたのを見て歸つたが、それから三日患者は一層甚く苦みだした。^{あらた}檢めて見ると、今度は足全體が腫れあがつて處々に黒い膿さ

へ出て居た。シャルルは驚いたが、別にどうしようも無いので、矢張前と同じやうな事をして置いた。

ところが、痛みは益々激しくなつた。シャルルは非常に心配して絶えず見舞に來たが、どうしようも無い。イツポリットは「能くなるでせうか? 何卒動けて下せえ、助けて下せえ。」と繰返した、しまひにはおいしく泣き出した。金獅館の女將は最早あんな醫者の云ふ事なんかきくなと云ひ出した。僧のブルニジアンもやつて来て、神信心をすゝめた。が、醫者も神も一向効驗^{きゆめ}が無く足ばかりでなく腹の方にまで腫れひろがつた。宿の女將は、シャルルに説いて、ヌウシャフテルで有名なカニエエといふ醫師を迎へる事にした。

カニエエは診斷して、片足は切斷せねばならぬと云つた。而して、此療治がオメイの發意から出たときくと、すぐに薬剤師の店に押かけ

て行つて、散々その無法を罵り、彎脚かまあしを療なほさうとするのは、せむしを
眞直まっすぐにしようとするにも同じい暴舉だと云つた。オメイはぐうの音も
出なかつた。

愈々イツポリットの脚が切斷されるといふ朝になると、村中其話で
もちきつて、まるで死刑でもあるかのやうな大評判であつた。シャルル
は階下の一室に閉ぢ籠つて、悄然と首を垂れて爐の前に坐つてゐた。
あゝ、實にとんだ事になつて了つた。もしイツポリットが死んだらどう
しよう。よくなつた處で、自分を訴へて出るかも知れぬ。さうなれば
愈々此身の破滅だ。

エンマは向き合つて、じつと夫さうとを見てゐた。夫の苦痛を思ひやらう
とはせず、こんな下らない亭主を持つて詰らないと、唯自分の事のみ
考へて居た。シャルルは室の中をぶら〳〵歩いて靴の音をぎい〳〵さ

せて居た。

「お坐りなさいよ。目まぐるしい！」

シャルルは畏つて直に坐つた。男は自分の不幸を嘆き女は男の甲斐性無さをなげいてゐる折柄、静まり返つた村の空氣は、幽かに人の呻き聲を傳へた。シャルルの顔色は死んだものゝやうになつた。

「あれは、一種の變脚だつたんだ！」

シャルルは突如にかう叫んだ。エンマは吃驚して夫の顔を見た。二人は黙つて目を見合せた。シャルルは醉漢のやうな定まらぬ瞳を細君に投げながら、咽喉でも切られた動物のやうな續いて聞える男の叫び聲に耳を引き立てた。エンマは輝く眼でじつとその様子を見て強く唇を噛んだ。其顔、其着物、何から何まで腹がたつて、こんな夫に立てる以前の自分の操が口惜しくなつて來た。急にロドルフの事が思ひ出

されて、夫の事は見る／＼心から遠ざかつて行つた。はては今眼の前に、シャルルが死んでゆくのを、自分が見成つてゐるやうな氣がした。

其時、^{とほり}街道に足音がした、シャルルが窓から覗くとカニエエが市場のところに立つて絹手巾で顔の汗を拭いて居るのが見えた。シャルルは俄に穏かな氣分になつて、

「接吻してお呉れよ、お前。」と云つた。

「うるさいねえ。」

「何？どうかしたのかえ？私がどんなにお前を愛してゐるか——」

「もう澤山ですよ。」とエンマは室外へ走り出てびしやりと戸を閉めた。其響で寒暖計が壁から落ちて床の上で碎けた、シャルルは椅子の上に身を投げ出した。エンマが又例の神經を起したなと思つて、泣き

出して丁つた。しかし、其晩ロドルフを庭に待ち受けたエンマは、その戀人の顔を見ると、雪のやうにその怒りが解け去つて丁つた。

十二

それから二人の戀はまた復活した。エンマは思ひ立つと晝間でも手紙を書いて、^{スクリヤ}薬屋の小僧を祕密の使に頼んだ。ロドルフに逢ふとエンマは口癖のやうに、自分は不愉快だ、夫が憎い、こんな生活には堪へられぬと愚痴を言ふのであつた。

「私、どうしたらいいんでせう？」

「どうしたらいいとは？」と男が訊いた。エンマは溜息をつきながら、

「貴方と二人で何處かへ行つて丁ひ度い！何處かへ！」

「貴女はどうかしてゐる。」と男は笑つて、「そんな事は決も出來やしない。」と云つた。

ロドルフに對するエンマの愛は、夫を厭ふ心の深くなるに連れて深くなつた。エンマはロドルフに愛せられん爲に襟飾もかけた。指輪もはめた。腕環も買つた。甕には花を活けて室をも飾つた。身には出來る丈の裝を凝らし、丁度姫君が王子を待つやうにして彼を待つた。けれどもシャルルは別にその妻の贅澤を咎めようとなかつた。

エンマの金使ひは實に荒かつた。イツポリットに三百法^{フラン}からする義足を買つてやつたのは別として、ロオロオから買つた品物丈でもちよ、つとやそつとでは無かつた。ロオロオは巴里新流行のものを持つて来てはエンマに買はせたが、代價は一向請求しないから買ふ方では非常に都合がよかつた。ロドルフに贈つた高價な鞭も、ロオロオの手で取

りよせたのであつた。其後一時にロオロオから支拂を請はれて非常に困つた時は、夫に來た金を勝手に都合した。隨分無理なやりくりがしてあつた。

ロドルフとの嬉戻あひびきは愈々烈しくなつて、しまひには他目ひとめも憚らず一緒に馬車で近所を遊び廻るといふ始末であつた。折柄、亭主と喧嘩して逃げて來てゐたシャルルの母は、此放縱な嫁の振舞を黙つて見てゐる事が出來ないので、度々エンマと衝突した。エンマが女中のフェリシテと薬剤師の家の小僧との情交を取り締らぬと云つて、老母はエンマと激しい喧嘩をやつた。この騒ぎの後、エンマはロドルフと逢つた時、男の腕に縋つて、

「私、とてもこんな處には居られません、どうかして下さい！」と云つて泣いた。

ロドルフは熟々女を眺めた。深く思ひ入つた風情で、涙に充ちた眼は、浪の中の焰のやうに輝いてゐた。呼吸も荒かつた。女が今日ほど可愛く見えた事は無つた。

「どうかして呉れつて？」

「何處かへ連れて行つて下さい！後生ですかから。」

「だつて貴女——。貴女の娘さんは？」

エンマは一寸考へてかう云つた。「さう、矢張連れて行かなければや

——。

別れる時ロドルフはその後姿を見送つて、「何といふ女だらう！」と呟いた。

エンマはロオロオに旅行用の外套を誂へた。月が變つたら、ロドルフと共にこの地を捨てゝ去る筈になつてゐた。それからといふものエ

ンマは、シャルルがその結婚當時のやうに美しくなつたのを見て喜んだほど、晴々とした様子に見えた。それからの幸福な生活を夢みて、獨り喜んでゐたのである。實際此駆落といふ事件は、彼女の本來の性質と最もよく調和してゐた。

處がロドルフは、急用に托^{かこつ}けて先へ先へと日を延ばした。其次には病氣だと云つて延ばし、病氣が癒ると今度は旅行に出、延ばし延ばして八月も過ぎ、九月に入つてから、明後日愈々出發といふ事になつた。しかも、其夜にロドルフは矢張平常のやうに逢ひに來た。

「仕度は悉皆出來て?——何だか元氣がないのね。」とエンマは問うた。

「何故?」女と一緒に四阿^{あづまや}へはいつた男は、態と物優しくかう云つた。「妾と一緒に逃げるのがおいやなんでせう。御仕事も、何もみんな

打棄つて行くんだから、それでいいせう。」とエンマは言ひつけた。「貴方のお心持は私、ようくわかつてますわ。けれど貴方、私の事も——私は世の中に何も無い。唯貴方ばかりなんですから——。私貴方の爲にならどうでもなりますわ。」

「何と云ふ可愛い女だらう——？」と男は女の手をとつた。

「本當？ 本當にさう思つて下さるの？」

月は白松の枝に上つて、秋の空に冴え渡つた。「あゝ、いゝ晩だ。」と男のいふのを受けて、「かういふ晩これから貴方と二人で——。あゝ旅はどうんなに嬉しいでせう。けれど、どうして私今夜こんなに悲しいのかしら？ 急に境遇が變る所爲かしら——いゝえ、さうぢやない。餘り嬉しくて悲しくなるんですよ。何て私は氣が弱いんでせう。」

「併しね、未だ時があるから、もう一度考へ直して見たら——。」とロ

ドルフは云つた。

「いゝえ！」とエンマは男に寄り添ひ乍ら烈しく叫んで、「どんな事が
あつたつて、貴方と一緒になら、私構やしないわ。海へでも淵へでも、
どこへでも行きますわ。一緒に長く住めば住むほど二人の仲はよくな
るんぢやありませんか。ねえ貴方、ねえ、あら何とか云つて頂戴よ！」

ロドルフは時々、氣の無い返事をした。エンマは男の髪の中に両手の
指を突込^{つっこ}んで、甘へ泣く子供のやうに、「ロドルフさん！ ロドルフさ
ん！ 私の愛するロドルフさん！」折柄十二時がうつたので、男は起ち
上つた。エンマは、旅行券の事や待合せのことについて幾度も念を押
して、

「ぢや、また明日ね。」と別れの接吻^{*ス}をして、男を見送つてゐたが、男
が些^{*}とも振返つて見ないので、追ひ懸けて行つて、「また、明日ね！」

十一

ロドルフはその夜家に歸ると、直に机に向つてペンを取上げたが、さて何と書いてよいか判らなかつたので、兩腕を膝の上に載せて少時考へこんだ。それからエンマの寫眞と手巾——曾て散歩の際エンマの鼻血を拭いた——をとり出して眺めた。それからエンマの手紙をとり出して披げて見た。或るものは優しく、或るものはふざけ、或るものには憂鬱に、或るものは愛を請ひ、或るものは金を請うてゐる——しかし、それにも倦んで了つたので、とう／＼エンマへの手紙を書き出した。「エンマさん！ 力を落さずに聞いて下さい。私は貴女の生涯を不^{ふし}幸にするつもりぢやありませんでした。あなたの今度の御決心は、十分お考への上ですか、私にはどうもさうは思へません。貴女は唯幸福

ばかり望んで無茶苦茶に未來にあこがれておいでなのです。けふ迄の事を思ふと、實にお互に狂氣染みて居たぢやありませんか。——私は常に貴女を愛してゐます、決して貴女の事を忘れはしませんが、しかし早晚お互に熱度が衰へて、厭になつて了ふにきまつてゐます。許して下さい、エンマさん。何故私は貴女と知合になつたのでせう、而して何故貴女はそんなに美しい方なのでせう。これも皆運命です。」と、こゝまで書いて来て彼は呟いた。さうだ、運命の所爲にするのが一番効果がある——。「私は、結果を考へずに、只管貴女を愛したのでした。考へて下さい、世の中は無情です。どこへ行かうとも、必ず種々の迫害は身に纏うて離れないでせう。私は今迄犯した罪の報として今から遠く去つて了ひます。何處へ行くかは自分にも判りません。どうか、私といふ悪い男の名を御嬢さんにも能く聞かせて呪はして下さい。」ロド

ルフは、もうこれより外に書きようは無いと思つて筆を止めたが、若

しエンマが自分を尋ねて來ると困ると思つたので、かう書き足した。

「貴女が此手紙を讀む頃には、私はもう遠く去つてゐませう。御機嫌
よう！私もいつか歸つて來ませうが、其時は靜かに今日の戀を昔語り
としませう。さよなら。君が友より。」かう書き終つて一度讀返して、
うまく書けたと思つた。そしてゆつくりと煙草を二三服喫んで床には
いつた。

翌日、ロドルフは其手紙を杏の籠の中に潜めて、エンマの許に届け
た。その籠を受取つた時、エンマは何となく恐怖を感じた。すぐその
籠をひつくり返して其手紙を披いた。而して恐しい火事場から逃げて
來たやうな様子で自分の室へ驅け込むと、生憎そこに夫がゐたので、

手紙を握つた手を慄はせながら階子段を駆け上つて、二階の一室でそれを讀んだ。繰返して讀むと、心亂れ胸轟いて、大きな穴が足下に開いて自分を呑んで了へばいゝと思はれた。窓際に寄つて、下の敷石を見下しながら、「どうしたつて思つた通りにする、せずに措くものか！」

シャルルに呼ばれて食堂へ來たが、喉が詰つて飯も食べられなかつた。その中ふと先刻の手紙を何處へ遣つて終つただらうと氣がついた。どうしたか覚えがない、二階へ上つて見ようと思つたが、シャルルに怪まれはせぬかと、それが何だか怖かつた。

「ロドルフさんは何處かへ行くんだつてね。」

「どうして御存じ？」とエンマは慄へ乍ら云つた。シャルルが其家の召使から聞いたのだと語つてゐる處へ、女中が先刻の杏を持つて來た。

シャルルはすぐ一つ噛かじつて見て、

「うむ、こりや甘い、お前も一つどうだい？」

シャルルが杏の種を吐き出して、それを前の皿に載せた時、青塗の馬車が戸外を通つた。馬車の燈ランプの光に浮いたロドルフの顔！

「あッ！」

エンマは、床の上に倒れて氣絶した。シャルルは吃驚してあわて騒いた。娘のベルタは泣き出した。驚いて駆けつけたオメイの持つて來た薬で、エンマは漸く氣がついた。

「しつかりお仕し、私だよ、私がここにあるよ、分るかえ、ベルタもここにある。接吻しておやりよ。」とシャルルが云つた。ベルタは小さい手をさし延ばして、母の首へ縋らうとしたが、エンマはそれを押退けて、「いゝえ、誰も、誰も側へ来てはいけない。」

エンマは、寝床へ運ばれた。じつと閉ぢた眼からは涙が流れた。

それから四十餘日の間シャルルは寝食を忘れて妻の看護に手を盡した。エンマは物も言はず、人の言葉を聞かうともしなかつた。併し十
月の半にはやうやく起きて坐れるやうになつた。初めて麺麪パンとジャム
を少し食べた時、シャルルは嬉し泣きに泣いた。餘程快くなると、シ
ヤルルは妻を扶けて庭を散歩した。其時、エンマを例の四阿アラマサへ坐らせ
ようとすると、エンマは、

「こゝは厭よ！、厭、厭！」

と激しく叫んだ。その晩から又悪くなつた。シャルルは又心配しあじ
めた。而してその傍に此憐れな男は、金錢の事でも非常に心配して居
たのであつた。

十四

オメイの店から取寄せた薬代丈でも餘程ある上に、エンマの放縱な生活から生じた吳服屋其他の借金も莫大な額に上つてゐて、夫を支拂ふ見込も立たなかつた。しかしシャルルは一圖に妻に心をとられて、金の事などは何時となく忘れてゐた。金の爲めに妻を疎にしては済まぬとも思つた。

此冬の寒さは格別ひどかつたので、エンマの病氣もなかなかよくならなかつた。庭に出る事がきらひになつたエンマは晴れた日などには椅子を往來に向いた窓際に持出して戸外を眺めた。毎日見舞の客が來た。僧ブウルニジアンも時々見舞に來た。エンマは其僧の言葉に動かされて珠數を買つたりなどした。

エンマの病氣も程無く癒えた。春も過ぎて夏になつた。或る日オメイはシャルルに、氣晴らしにエンマをルヴァンの芝居にでも伴れて行つたらと勧めた。エンマは體が疲れる上に、金も費るから厭だと云つたが、シャルルは強ひてすゝめて、伴れて行く事とした。二人は例の「燕」に乗つて出掛けた。

馬車はボオヴァジイヌ街の赤十字館の前で止まつた。二人は直に劇場へ入つた。狂言は「ランマムウのルシア」といふ戀を主題としたものであつた。

エンマは其舞臺の上の甘い戀の言葉に魅せられて我を忘れて見てゐた。あの二人の戀のいかに激しいものだらうと、ひとり胸の波を上げてゐるうちに、幕が下りた。エンマの爲に一杯の水を求めに廊下の方

に出て行つたシャルルは、はしなくもレオンと逢つた。レオンはやがて、挨拶にやつて來た。

絶えて久しいレオン！レオンは恭しく手を出した。エンマも機械的に手を出した。あの梢の縁に春雨の煙る日の別れが思ひ浮べられた。

「まあ、お珍しい、どうしてこゝへ？」

「黙れ！」と土間の何處かから叫ぶ聲^{どこ}がした。次の幕が初まるところである。

「今、こちらにお住ひなんですか？」

「はい」

「何時から？」

「曳きすり出せ！」とまた叫聲が聞えた。見物人が一齊にこちらを見たので、二人は話を止めた。エンマの心はもう舞臺になかつた。オメ

イの家で歌留多をした事や、四阿^{あづまや}で一緒に本を読んだ事などが連りに思ひかへされた。

「もう少し、これから面白くなりさうですよ。」とシャルルは名残惜しかつたが、エンマはレオンの發議に同じて、強ひて戸外へ出て、とある茶屋へはいった。

「しまひになると屹度面白くなるんだが。」とシャルルはエンマを顧みて、「私は、どうしても明日^{あす}歸らなけれどやならないが、お前は殘つて見て來たらどうだい？」

レオンは之を聞いて、好機會！と思つた。で、俄に芝居の最後の幕の面白い事を説き出した。そこで、エンマは一日歸りを延ばしてレオンともう一度今日の芝居を見直さうかと考へた。

「それぢやさう決つたんですね。明日また六時頃にでも。」とレオン

が云つた。

「さあ、どうしませうか知ら?」

「能く考へて、どうでもいゝやうにお仕。又寝乍らよく考へて見るさ。」とシャルルは答へて、「ここにお住ひなら、さう遠くもなし、折々はお出掛け下さい。」とレオンに云つた。其夜はさうして別れた。

第三編

一三

レオンは勉強の傍、ちよい／＼待合ばいりなどして、其道の女からかなり騒がれてゐた。けれどもエンマの事丈はいつも忘れずにあるた。書物が手からこぼ落ちるのも忘れて、エンマの事を思ひ耽る事もあつた。しかし、時が経つと共に、その傍も次第に胸の中に薄れ行くのであつたが、思ひ設けぬ今日の邂逅^{めぐりあひ}に、再び情が燃えあがつて、どうにかして手に入れようと思ひ立つた。今はもう彼も昔のやうに内氣な初心な男ではなくつて居た。彼はその夜、街の角でボヴィイ夫婦に別れてから、竊にあとを尾けて、その旅館をつきとめて置いた。而して其夜は一晩中、敵を陥れる作戦計畫をめぐらした。翌^{あく}日の夕、其青白

い顔に必勝の決心を浮べて赤十字館を訪ねた時は、シャルルはもう居なかつた。

「宿の名も申上げませんで——。」とエンマは詫びた。

「私は考へ當てたんですよ。」とレオンは答へた。

「どうして？」と問はれて、レオンは「不思議な力で」と答へた。それから二人は様々な話をした。話は眞面目くさつた議論めいた事から、しまひには愛といふ事、此世の愛のまゝならぬといふやうな事に落ちて行つた。二人は互に自分達の不幸といふことに力を入れて語り合つた。街のどよみもこゝには響いて來なかつた。室は殊更に二人を近づかせようとするかのやうに狹かつた。

「こんな愚痴ばかり云つて、ほんとに済みませんね。」とエンマは云つた。「貴方は御存じ無いでせう。」と美しい潤んだ眼を上に向けて、「私が

どんな夢を見てゐるかといふことを——。」

「どんな夢？あゝ、私も隨分苦しみましたよ。獨りで思ひ沈みながら街を歩いてゐると、繪草紙屋の店先の女神の繪などに、知らず知らずひきよせられる——それが、貴女の姿のやうに見えるのです。」

エンマの唇には微笑が上つた。けれど、彼女は横の方に向いてゐたので、レオンにはそれはわからなかつた。

「幾度も貴女への手紙を書いては破り／＼しました。」レオンは答がないので尙ほ續けた。

「何時かふとこゝで貴女にお目にかかるやうな氣がして、似たやうな姿を見かけると、いつも其馬車を追ひかけました。」

それから、レオンは世の中が詰らなくなつて、寧ろエンマから貰つた着物に包まれて死んで了ひたいと思つた事などを語り出した。

「まあ、何故？」

「何故なぜツて——。」と少しためらつて、「どうしても貴女の事が思ひ切
れないと云つて、目の隅から女を見た。女の顔は俄かに
雲を出た日のやうに輝き出した。

餘り長く話をし過ぎたので、もう芝居芝居へ行くには、時間が遅くなつ
て了つた。

「どうしても明日、たまちお出發になるんですか。」

「えゝ、どうしても。」

「もう一度是非お目にかかり度いんですがねえ、是非申上げ度いこ
とが——。」

「何ですの？」

「お分りにならない？ 察して下さらないんでせうか。ね、最う一度

是非、ね。」

「え？——」と、言葉を切つたが、考へ直したやうに、「でも、此處ではね——。」

「何處でも、お好きの處で。」

「では」と一寸考へて、「あの寺院お寺で、明日の朝の、さう、十一時頃に——。」

エンマはレオンの歸つた後に、長い手紙を書いた。いつぞ逢はぬ方がよからうといふ意味の事を書いたが、矢張逢つて手渡ししようと心を決めた。

翌朝レオンは、おめかしをして、ノオトルダムの寺院へ出掛けた。

麗かな夏の朝、道端の薔薇などの香が、あたりの空氣に漲つて居た。レオンは、花賣女から花を一束買つて、寺院の中へはいつて居た。

こんなに人の世を楽しいと思つた事は、曾て無かつた。彼は霎時、そこに腰掛けて窓の色硝子を眺めてゐると、やがて石段に衣摺の音がして、黒い面紗ベールを掛けた婦人の姿が現はれた。レオンは飛び立つばかりに、その傍に走せよつた。エンマの顔は蒼白あざきめてゐた。

エンマは、昨夜の手紙を渡さうとしたが、急に思ひ返して止めた。そして禮拜堂に跪いて、一心に祈禱をこめた、神からよい決心を授からうと思つたのである。が、心は徒に騒ぐばかりであつた。

「どこへ行くんですの？」と、エンマは訊いたが、男は返事もしないで、すんくきと先に立つて寺院を出た。門前で馬車を命じた。

「何處へ？」と馭者はきいた。

「何處へでも好い。」とレオンは答へた。エンマを先に押込るやうにして、自分も後から乗つた。馬車は駆り駆つて、コルネエユの銅像の

前で留まつた。

「もつと行れ！」と馬車の中から聲がした。馭者は再び鞭を上げた。
停車場に突き當つた時、「右！」と車中から聲がかゝつた。駛り駛つて
植物園の前にとまると、「もつと行れ！」と再び聲がかゝつたので、馬
車は方角も目的地も滅茶苦茶に、唯駛り駛つた。馭者は變な客だと思
ひながら、試みに二三度とまつて見たが、其都度、「もつと行れ！」と
怒鳴られた。

人々は、變な馬車だと目を睜つた。馬車は棺のやうに内側からすつ
かり幕を下してゐた。折柄女の素手^{すて}がその黃いろの幕を上げて紙屑を
外へ投げ捨てた。その紙はひらくと赤い和蘭蓮華の咲いてゐる野原
に飛んで行つた。

六時頃に、馬車はボオヴアジイヌ通りの狭い横町で止つた。降り立

つた一人の婦人は、首を垂れたまゝ振りむきもせずに急ぎ去つた。

二

ヨンギルへ歸る馬車の中では、エンマは隅の方に席を取つて、眼を閉ぢてじつと考へ込んで居た。薬剤師の店の前まで來ると、慌てゝ店から走り出たオメイが、

「奥さん、奥さん、とんだ事になりましたよ。」

「何？」

「ボワリイさんの阿父様が亡くなられたさうですよ。」

シャルルの父は二日前に卒倒して死んだとの事である。けれどもエンマはそんなに驚きはしなかつた。エンマが家にはいると、シャルルは両手を擴げて細君を抱へて、眼に涙を浮べた。「おゝ、エンマ！」と

潤み聲で云つた。夫に接吻された時、ふとレオンの事を思ひ浮べて、エンマは顔を両手に埋めて身を戦おのかせた。

「今聞きました。」とエンマは答へた。シャルルは其悲しい報知の手紙を見せた。食卓についてても、エンマは悲みに胸を塞がれて食べられぬのを、無理に食べてゐるのだといふ風をして見せた。シャルルは其様子を見乍らほゞと太い息を吐いて、「あゝ、もう一度逢ひ度たい！」と云つた。エンマは何とか言はなくてはなるまいと思つたので、

「阿父様はおいくつでしたか知ら？」

「五十八だ！」

「あゝ」とエンマは嘆聲を發したが、それきり云ふ事が無くなつて了つた。十五分ばかりすると、シャルルは、

「あゝ、今頃阿母おふくろはどうしてゐ事だらう？」

エンマは何も云はなかつた。シャルルは、それを強い悲みに撲たれてゐるからだと察して、此上何か云つて泣かせるのはよくないと思つたので、話頭を轉じて、

「昨日はどうだつたい？面白かつたかい？」

「え、」エンマは唯これ文云つた。

食事が済んでから、エンマはつくづくと夫なつとを眺めた。相も變らぬその平凡さ單調さがしみぐ厭いやになる。どう見ても自分の夫は、意氣地無しの下くだらぬ男だ。

シャルルの母がやつて來ると、親子は涙にかきくれて亡き人の思ひ出に耽つたが、其翌日ロオロオに來られた時、シャルルは借金の事などが母に知れでは大變だと非常に氣を揉んだ。ロオロオは密かにエンマに會つて、證書の書換を請求した。シャルルに委任狀を書いて貰

つてエンマの名にすればよいとの事だが、どういふ譯わけでそんな事をするのかエンマには薩張わからなかつた。ロオロオは歸る時に、無理にエンマに晴衣はれぎを逃あつらへさせた。エンマは自分の祕密を嗅ぎつけられたのではないかと思つて、ぞつとした。

夫婦は負債返済の件で種々相談したが、證文などの事に就いて判らぬ事が多かつたので、レオンに問合せようといふ事になつた。手紙では駄目だからと云つて、エンマは自身ルヴァンへ出掛けると云ひ出した。シャルルは初めはそれを否んだが、エンマが強たけつてといふので、それでは御苦勞かたじだが頼むと、添けなささうに細君に接吻した。翌朝エンマは「燕」に乗つてルヴァンに出掛けた。そしてそこに三日の間滞在した。

三

此三日！これが眞實の蜜月旅行かと思はれるほど、楽しい日であつた。二人は波止場に近い旅館に宿をとつて、窓を閉め切つて、朝のうちから冷たい舍利別などを飲んで暮らした。夕暮になると、小艇ボートを川の中の島へ漕ぎ寄せて、そこの茶屋で香魚あゆのフライだの櫻の實だのを食べたり、そこの芝生の上の白楊の蔭に寝轉んだりした。二人は自然の景色を此時ほど美しいと見た事は無かつた。あの離れをじま小島のロビンソン・クルウソーのやうに二人丈でこゝに住む事が出来たらなどと思つた。月の好い晩は、小艇を波にまかせつゝエンマは低い聲で歌うた。

或る日、レオンはリボンを途で拾つて、それを船頭に見せると、船頭は、

「あゝ、そりや慥か此間の人のだ。此間大勢で船遊びに來たが、その人は身丈^{せいじよう}の高い口髭の生えた男でね、連^{づれ}の女衆^{をんなじゆ}から、面白い話をと云つてせびられて居ましたつけ。何でもロドルフさんとかドドルフさんとか云ひましたつけ。」

エンマは身を慄はした。レオンは其顔をさしのぞいて、「氣分がお悪いんですか？」

「いゝえ、何でもないの？夜風が寒いので——。」

「何でも、よつぽど女好きのする人らしかつただよ。」と船頭は、掌へ睡して再び櫓を繰つた。

楽しい三日は過ぎた。二人はもう別れなければならなくなつた。エンマは、委任状の事に就いてレオンに幾度も念をおして歸つた。

四

レオンは頻々とよこすエンマからの手紙を幾度も繰返してよんだ。逢ひたくて堪らなくなつて、或る土曜日の朝、遂にヨンボイルへやつて來た。霎時ボヴリイの家のほとりをさまよつてゐたが、窓のあかりに其人らしい影も見えなかつた。久し振りで金獅館を訪ねて女将を驚かした。

遂に決心してレオンはボヴリイの家の扉ドアを叩いた。エンマは自分の室に居て、十五分ばかり出て來なかつた。シャルルは非常に喜んで、下にも措かずもてなしたので、レオンはエンマと話してゐる隙が無かつたが、夜更けてから、庭の奥の小路でそつと逢つた。嵐が吹いて雷が鳴つた。二人は電の閃めく暗の裡うちで語つた。別れるのは辛かつた。

「死んだ方が増だわ！」とエンマは涙に咽び乍ら男の腕に縋つて、「いつまた逢へるでせう！」

エンマはこれから一週に一度位は屹度逢へるやうに工夫しようと言つた。

エンマは、レオンに贈る爲に、ロオロオからまた種々のものを買ひ込んだ。ロオロオは云はるゝまゝにもつて來た。

エンマは急に音樂を始めた。が、前よりも非常に拙くなつた。

「稽古に行かなきや駄目ですよ。」と彼女は唇を噛んで、「でも、一時間五法の授業料ぢや——。」

「さうさね。それは餘り高い。私の友人の娘は一時間二法半で教へて貰つて居るがね。」とシャルルは云つたが、エンマはどうしても自分の云ひ出した先生の處でなければいやだと拗ね、果はピアノなど賣つて

終ふと云つて駄々をこねたので、シャルルは遂に胄を脱いだ。斯くてエンマは夫の許を得てレオンと逢ふ爲に一週に一度宛ルアンにつた。月の终には餘程ピアノが上達したなどとシャルルはうなづいて居た。

五

木曜日の朝——エンマはルヴァンへ通ふのは木曜日ときまつてゐた——エンマは朝早く起きて、シャルルが目を覺まさぬやうにと、そつと着物を着て、金獅館へ出掛けで例の「燕」に乗つた。朝の市が賑ひ初める頃にルヴァンへ着いた。エンマはなる可く狭い暗い横町を選んで俯向き勝に歩いて、芝居小屋や茶屋の多い如何はしい女達の往來する通り出て、とある角を曲ると、レオンが待つてゐた。男がさつさと歩く

のについて、そこの旅館に入り、二階の一室にはいった。それから、二人は前週起つた事柄や取り交した手紙に就いての心配や、今日を待ち焦れたといふ事などを話した。

室は幸福に充ちて居た。

二人は爐の傍の、小さい象眼入の食卓に對ひ合つた。エンマは自分で料理した食物の、一番美味さうなのを男の皿にとり分けた。男に注いで貰つた三鞭が盃を溢れて指輪の方に流れでゆく時、女は涼しい笑ひ聲を立てた。二人は、まるで自分の家で、かうして一生共に暮さうとする新夫婦のやうに見えた。「私達の部屋」「私達の敷物」「私達の椅子」——一人はいつもこんな風に云つてゐた。

男は優美な女性のいふに云はれぬ味を初めて味つた。これまで男は斯うした雅やかな言葉使ひ、かうした洗練された着物の着やう、かうし

た疲れた鳩のやうな態度に、一度も出會つた事が無かつた。男は女の
けだかさを嘆美せずには居られなかつた。あゝ、こんな女が、此世界
にゐたのか、而して人の妻となつて居たのか、而して、それがほんと
うに自分の情婦であるのか？

女は男に對して、種々の態度をとつて見せた。或時は眞面目に、或
時は浮々と、或時は喋り、或時は沈黙し、或時は熱情的に、或時は冷
靜に、さまざまにして男の心を操つた。

此女はあらゆる小説ロマンスの中の愛人、あらゆる戯曲の中の女主人公、あら
ゆる詩歌の中の「彼女」の型タイプであつた。女は封建時代の城廓の中に住ん
でゐる貴婦人のやうに長い胸衣を着けて居た。また「バアセロナの蒼
白めたる女」にも似てゐた。が、しかし此女はすべてのエンジェルより
も遙かに勝れてゐた。男は女の顔を見つめて居ると、魂がの方へ飛

んで行つて、彼女の額の周圍まほりに波打つて、それから女の白い胸に蠱惑されて、女の體の中にはいつて行くやうに思はれた。

「動いちやいやよ、黙つてゐるのよ。そして私の顔ばかり見ていらつしやい。その柔かアい優しい眼附が——。それを見てると、私は嬉しくてたまらなくなるの。」彼女はつづけて、「坊ちゃん！ 坊ちゃん！（女はいつも斯う呼んでゐた。）坊ちゃんも私が好き？」

けれどすぐには別れる時が来る。いざ別れるとなると、すべてが眞面目な調子を帶びて來る。二人は凝と顔を見合せて「木曜日までね。」「木曜日までね！」思ひ切つて「さよなら！」「さよなら！」

さうして、エンマは打萎れて歸るのであつた。馬車の中から町の灯を振返つて見乍ら、幾度も胸の中でレオンの名を呼んで、寒い風に向つてレオンへの接吻キスを投げるのであつた。

シャルルは只管にエンマの歸るのを待つてゐた。娘のベルタも、母の歸りを喜んで飛びつくのであるが、エンマはベルタに接吻する事も厭はしさうであつた。シャルルはエンマの顔色のよくないのを見て、屢々どこか工合が悪いのかと問うた。

「いゝえ！」とエンマは答へた。

「だが、今夜はどうもどこか悪いやうだがね。」

「いゝえ、いゝえ！ 何ともないんですよ！」

けれどもエンマは、自分の行爲を疑はれないやうにと、以前よりも夫に愛想よくして、朝夕の事にもよく氣をつけた。彼女は次第に常に偽を巧むやうな不安な感情の中に住み馴れた。

或晚、シャルルは突然に訊いた。「お前は、ロンベロウル嬢に教つてゐるんだね？」

「さうですよ。」

「けれど此間、あの嬢^{ひと}に逢つたが、お前の事は何も知らないやうだ
つたがね。」

エンマは電氣にでも撃^うたれたやうに吃驚したが、さりげない様子で
静かに答へた。

「多分、私の名前を忘れたのでせうよ。」

「でもねえ。」シャルルは、「ロンベロウルさんばかりが、ルゥアン
の先生ぢや無いんだらう。」

「それはさうですけれど。」とエンマは熱心に、「兎に角授業料の請取
があるから、それを見て頂けばわかりますよ。」

かういつて抽出の中を搜したけれど見つからなかつたので、其時は
其儘になつてゐたが、二三日立つてから、シャルルは自分の靴の中か

ら、其請取書を見出して、不思議に思つた。實にこの一枚の僞の請取書によつ彼女の生活^{ライフ}は繋がれてゐたのである。

或日、エンマは歸る時刻になつても未だ歸らなかつた。ベルタがひい／＼泣くので、シャルルはひとりで持餘した。藥劑師のオメイは迎へに出て呉れたが、餘り遅いのでシャルルも其夜の十一時頃馬に乗つてルヴァンへ出掛けて行つた。暗い夜道を急いで翌日の午前二時頃、やうやく赤十字館について聞いて見るとエンマはそこにも居なかつた。

或はレオンの宿に行つたか知れぬと思つたが、其宿がどこだか判らなかつた。幸ひレオンの主人の名を覚えて居たので、そこへ行つてレオンの宿所をきいた時はもう夜も漸く明け離れて居た。それからレオンの宿所を訪れたが、玄關口に呼鈴^{ベル}も無ければ、取次の者も見えなかつた。此哀れな男は、拳を振つて窓の戸を叩いて見たが、何の應^{エント}も無かつた。

つた。其中彼方から巡査が來たので、シャルルはおどろいてそこを去つた。

「いや、馬鹿らしい！」と呟いて、彼は、其處か、こゝかと考へて見た。屹度さうだと圖星を指して、舊友の許を尋ねて見ると、其人はもう此地には居なかつた。ふと思ひ當つてとある珈琲店カフエへはいつて、住所姓名簿を借りて、ロウベロウル嬢の番地を探し出した。ルネ・デ・マルキエ工街の七十四番——その街へ尋ねて行くと、ふと、エンマが向うの角から現はれた。彼は妻に飛びつくやうにして、

「昨夜どうして歸らなかつたんだい？」と叫んだ。

「あのね、急に病氣になつたのでね、それでね。」

「どんな病氣？ 何處へとまつてたんだえ？」

「ロウベロウルさんの處で。」とエンマは額に手を當てた。

「左様か、さうだらうと思つた。今訪ねようと思つた處だよ。」

「最早お出でになる必要はありませんよ。それに彼の方は唯たつたいま今お出掛けになりましたから。」と云つて、「もうこれから少し位遅くなつたつて、そんなに心配しないやうにして下さいよ。それで無いと私落附いて居られません。」

エンマは其後も何かの用にかこつけては、足繁くルヴァンへ通つた。レオンが豫期しない時に行く場合は、直接にレオンの出てゐる役所へ尋ねて行つた。はじめの中こそ、レオンも非常に嬉しく思つたが、しまひには、役所から小言を食ふからとエンマに注意するやうになつた。併し、エンマは一向に頗着しないで、矢張役所へ行つては男をひとつぱり出した。

六

斯うして、エンマは夢中で其日々を送つて居る内、ロオロオから
の借金は次第に殖えて行つた。證文を書き變へる毎に、利が元に加は
つて、うかくしてゐる中に、自分でも信じる事の出來ぬほど莫大な
額にのぼつて了つた。エンマは融通がつかなくなると、女中のフェリ
シテや金獅館の女將からも借りた。赤十字館の女將からも借りた。借
して呉れさうな人には、誰彼を問はずに片端から借りた。

けれど、ロオロオからの負債は一部分をすら返済する事は出來なか
つた。ところが、ロオロオは約束を無視して債權の一部を他に譲渡し
た爲、エンマは其男から手厳しく責め立てられた。

しかし、ルヴァンへ行つてレオンと逢つて居る間丈は借金の事も何

も忘れてゐた。けれどシャルルと家にあると、世の中が面白く無くて
／＼堪らなかつた。遂に病氣を口實にしてシャルルを二階へ追ひあげ
て、自分はひとりで階下の室で寝る事とした。シャルルは勿論それを
甚だ不都合な事と思つたが、病氣とあればどうも詮方が無かつた。

或日、エンマは思ひがけなくも、裁判所からの書付を受取つた。宛名
はボヴィリイ夫人で若し二十四時間以内に八千法^{フラン}の金を支拂ふ事が出来
なければ、差押處分をするといふ通知であつた。エンマは驚いてロオ
ロオの許へ行つて、いろいろ嘆願したが、ロオロオは飽迄も冷かに、
さう際限なしに金を借して居る事は出來ぬと云ひ張つた。

「後生ですからもう五六日の御猶豫を。」と、エンマは泣き出しが、
ロオロオはにべもなく刎ねつけて、室の外へ突出すやうにして、扉を
びしやりとしめて了つた。

七

翌朝、執達吏が財産差押へにやつて來た。家財道具をすつかり検分した。机の抽斗ひきだしの中に入れてあつたロドルフの手紙迄搔廻かきまはされて、エンマは非常に憤つた。——幸ひ、シャルルは留守だつたので、其出來事については何も知らなかつた。翌日は日曜なので、エンマは朝からルゥアンの知人を片端から訪ねて金策の相談をしたが、誰一人として取合つては呉れなかつた。女の身一つで、どうしてそれ丈の負擔が擔ひきれよう！或る人はエンマの顔を見て唯笑つた。遂にルゥアンへ行つて、例の赤十字館でレオンと逢つた。蒼白めた顔をしてゐた。

「どうして今日おいでになつたのです？」と怪しむレオンの手をしつかり握つて、

「私ね、貴方にお願ひがあるのよ、後生だからさうして頂戴、あのね、
八千法のフランお金が是非入用なの。」

「え？ 御冗談を——。」

「いえ、本當なんですよ。」と、彼は目下の窮状について細々と話した。

「で、僕にどうしろと被仰おあしやるんですか。」

「まあ、意氣地の無い方ね。」

レオンは責め立てられて仕方無しに金策に出て行つたが、一時間ほど経つて、ぼんやりと歸つて来て、三人迄心當りを聞いて見たが皆駄目だと云つた。額を突き合せて、身動きもせず凝然じんぜんとして思案に呉れてゐた。エンマは男の肩をつゝいて、小さい聲で云つた。

「私が貴方なら、どうかなると思ふがねえ。」

「どうするんです？」

「役所の方からでも——。」

レオンは、「ぢや、今夜モルレ君が来る筈ですから、聞いて見ませう（モルレは彼の友達の一人で富豪の息子であつた。）而して、若しよかつたら、明朝、持つて行く事にしませう。」

エンマは無論それをあてにはしなかつたが、男は、「若し、三時迄に行かなかつたら駄目と思つて下さいな。」と附け加へた。「私はこれから出掛けなきやならないから。さやうなら。」と立上つた。女の手を取らうとしたが、死人の手のやうにだらりとしてゐた。エンマはもうすっかり力が脱け氣が脱けたやうに見えた。

翌朝の九時頃、戸外が騒がしいので窓から覗いて見ると、往來の柱

に紙の札が貼つてあつた、其周圍に大勢の人が群がつてゐた。そこへ
女中のフェリシテが、戸口から剥ぎとつた黄色い紙をもつて來た。エ
ンマは一目でその紙から家財の競賣に出た事を讀みとつた。「私が奥さ
んならば——」とフェリシテのすゝめるのをきけば、あのレオンの舊主
人の法律家ギロウマンに頼むのがよからうとの事。エンマは早速黒色
の着物に着換へて、人目に觸れぬやうにと、村の外側の河添の道を、
ギロウマンの家に急いだ。暗い空から粉雪が落ちて來た。

ギロウマンが、深い企劃もくろみから、密かにロオロオの後押をしてゐると
いふ事はエンマは少しも知らなかつた。エンマはせめて千法フランでもいゝ
から貸して貰ひ度いと乞うた。「外ならぬ貴女あなたの事ぢやから——。」と彼
は應じたが、金の事などはそつちのけにして、變な眼附をして戯れか
つた。エンマは忍び切れなくなつて立ち上つた。

「貴方、私、お待ち申して居るので御座いますよ。」

「何を?」

「お金を。」

「けれども——。承知しましたけれども。」と女に近よつて、「私は貴方に——。」

エンマの顔は見る／＼紅を潮した。「失禮な、人の難儀につけこんで——。私は體からだを賣りに來たのぢやありませんよ。」

エンマは憤然として立去つた。「あゝ何といふ難儀だらう、何といふ耻辱だらう。」と心の中に繰返しながら、涙を浮べた目を空に向けて歩いた。ベルタの乳母の家に立ちよつて、「あゝ、苦しくつて咽喉のどがつまりさうだ。」と叫んで寝臺の上に身を投げた。而して咽び泣いた。

「まあ。どうなすつたんです、奥さん!」と乳母は驚いて寝臺の側に

立つてゐた。エンマは唯、家に歸るのが恐ろしくてこゝに來たのであつた。丁度三時頃だときいて、乳母を家にやつて、もしレオンが来てゐたら、連れて來て呉れと頼んだ。乳母は一人で戻つて來た。

「どなたも居ませんでしたよ。旦那様が泣いて貴女を呼んでおいでいました。皆さんで貴方を探して居ますよ。」

エンマは返事もしないで、忙しく息をつき乍ら、乳母を見た。乳母はその眼附に驚かされた。エンマは軽て突然^あ呀つと叫んで額に手を當てた。ロドルフ！ 彼はあんなに親切だつた、あんなに應揚だつた！ 彼は貸して呉れるであらう、昔の語らひを思ひ返したら眞逆いやとは云はぬであらう、彼は前後も考へずに、直にラ・ユウシエットに出掛けた。

八

會つてどう云つたらいいだらう？と考へながら、エンマは普通つた通りの道を行つた。ロドルフの室の前に留つて扉に手をかけた時急に力ぬけがして丁つた。若し居なかつたら？大抵居ないだらう——と少時立淀んでゐたが終に勇氣を振ひ起して其扉を開けた。ロドルフは爐の前で煙管を喫^{パイプ}へてゐたが、

「おや！貴女^{あなた}？」と、飛びあがつた。

「えゝ私です。私、今日少しお願ひがあつて伺ひましたの。」

「お變りもありませんですか。相變らずお美しい。」

「でも、矢張貴方に捨てられたんぢやありませんか。」

ロドルフは自分のした事に就いて、長々と辯解^{いひわけ}をした。

「別れてから貴方は嘸御幸福でいらしつたでせうねえ。」斯う云つて彼女は、包むに餘る恨みを打出でた。「私は深く貴方を愛しました。」と其手をとつて、はじめて逢つた時のやうに、そこに並んで腰掛けてゐたが、やがて、男の胸に身を投げ掛けて、「あゝ、貴方は私を振り捨て——。捨てられた後の私はどんなにみじめでしたらう。私は死んで了はうかと思ひました。それに貴方は——貴方は——。」

エンマの目から花の零のやうに涙が滴つた。ロドルフはいぢらしくなつて、其髪の毛を撫でながら、「エンマさん、泣いちやいけませんよ、何故そんなにお泣きなさるんです。」

エンマは咽り泣きを始めた。ロドルフは、エンマが昔の戀を悲んでゐるものと思つてその泣き止んだ時にかう云つた。

「許して下さいよ、今迄私はほんとうに薄情で而して馬鹿でした。私

の愛するのは貴女丈です、これから決してあんな眞似はしません。一體どうしたんです、さア、話して下さい。」

「あゝ、ロドルフさん。私は破滅してア、ひます。三千法郎ほど貸して頂戴。」

「え、え？」とロドルフの膝は徐ろにエンマの傍そばを離れた。エンマは體よく云ひ捨へて、是非三千法の金が要いるといふわけを話した。

「あゝ！」と、ロドルフは急に青くなつて、心の中で呴いた。「金を借りに來たのだつた！」

彼は、しかし物靜かに云つた。「さうですか。併し困りましたね。生憎今無いのですよ。」

それは實際だつた。彼は今持つてゐなかつた。持つてゐさへしたら屹度貸し與へたであらうが——エンマは、黙つてロドルフの顔を見て

るたが、

「ぢや、借して下さらないのですか。」と云つて、又、繰返して、「ぢや

駄目なのですか。あゝ、矢張、貴方も私を助けては下さらない——。」

彼女は遂に、若し持合せが無いならば、此室にある品々を一時用立てゝ呉れぬかとまで斬り込んで行つたが、ロドルフは落附き拂つて、「どうも、お金は無いのですから——。」

「さうですか、ぢやもうお願ひ申しません。」と、體を慄はし乍ら、そこを出た。吹き巻く風に亂れ立つ落葉の中を、よろめき乍ら歩いて行つた。庭の木戸の鍵をあけようとして、爪を折つて了つた。五六間歩いた時、彼は息が切れて倒れさうになつて、そこへ立止まつて了つた。動脈の血は奔流のやうに體の中に躍つた。足に踏む大地が波のやうにふわ／＼してゐるやうに思はれた、そこの小溝の流が、褐色の大波

を擧げてゐるやうに思はれた。種々の思ひ出や情想が、火の子の如く頭の中から散るやうに思はれた。父の面影が浮んだ、ロオロオの室の光景が浮んだ。彼女は狂人になるのでは無いかと思つた。落附かうとすればする程心が亂れた。

四邊あたりは次第に暗くなつた。鳥が時に歸つて行く、其影が、丁度火の球が空中に飛んで居るやうに見えた。雪は益々降り連しきつた。

霧の中に遠く浮んだ家々の灯影を見ると、エンマは急に、深い淵のほとりに立つたやうな氣がした、彼女は喘いだ。胸が破れて了ひさうになつた。が、急に救はれるやうな心持になつて、駆け下りた。橋を渡つて狭い道から大通りへ出て、薬剤師の家の前に來た。店には誰も居無かつた。そつと裏口に廻つて、臺所へはいると、小僧が出て來た。家の人々は晚餐の最中であつた。

「一寸、あの薬局の鍵を借してお呉れ！」

「どうなさるんです？」と彼は其闇に背いて立つた女の蒼白めた顔を見乍ら驚いて尋ねた。その顔がいつもよりも非常に美しく見えた。彼は薄氣味悪く思つた。エンマは低い聲で静かに云つた。

「一寸要るの——。ね、借してお呉れ。」

エンマは聲を忍ばせて鼠をとる薬が欲しいのだと云つた。小僧が、主人に聞いて見なければ——と躊躇するのを、

「いゝのよ、後でさう云ふから。一寸燈あかりをお見せ。」と云つて、彼女は二階へ上つて、薬局の扉に鍵を當てゝ中へはいつた。そして、躊躇する事無しに、二番目の棚から青い罐をとつて、其中にある亞砒酸鹽の塊を口に入れた。

「あ、あ、何をなさる？」と小僧は抑へようとした。

「静かにおしよ、誰か来るといけない。」エンマは、何も云うてはならぬ、もし云ふと主人の迷惑になると告げて置いてその儘家に歸つた。ほつと安心して、これで漸く義務が果し終つたといふやうな心持がした。

シャルルは其日の朝、家に歸つて見ると家は差押へられてゐて、エンマの姿は見えない、如何した事が薩張判らない。何時迄もエンマが歸らぬので、方々捜した揚句、自身でルヴァンの方へ出て行つたが、思ひ返して途中から歸つて來た。其時はエンマは家に歸つて居た。

「おい、どうしたんだよ、一體どういふわけなんだ。」

エンマは其時手紙を書いてゐたが、黙つて書き終つて、「貴方、明日になつたらこれを讀んで下さい。それ迄は後生だから口をきいて下さ

るな、何も云はないで——。

「だつて、お前。」

「あれ、また——。」と云つて、エンマは急いで寝床へ這入つた。口の中が苦いにがので目を開いたがシャルルの顔を見ると、また目を閉ぢた。今に腹が痛んで来るかと待つてゐたが、未だ何とも無かつた。時計の秒を刻む音と、シャルルの静かな呼吸いきづかひとが聞えた。「死ぬ事なんてそんなに恐いものぢやない。」と考へて、「これから寝よう。これで何事もお終になるのだ。」と水を一杯呑んで壁の方を向いた。

「あゝ、喉が乾く、堪らない！」

「どうしたんだよ。」と、シャルルは水を持つて來てやつて、尋ねた。

「何でも無いの——その窓を明けて——あゝ、喉が詰るやうだ。」

その中に氷のやうな冷さが、足の方から漸々せんぐ腹の方に上つて來た。

「あゝ、とう／＼始まつて來た。」とエンマは呟いた。

「何を云つてるんだよ。」

エンマは苦痛に堪へ兼ねて、頭を搖つた。舌の上に重い物が載つてゐるやうで、頸が下つてゐた。八時頃から吐瀉が始まつた。シャルルは金盥の底に白い沈滓かずの附いたのを見てこれは變だと思つた。エンマの胃の處に手を當てると、きやつと叫んだ。肩が慄へ出して、その顔が敷布より白かつた。汙が額に珠と結んで、歯がたぐりと鳴つた。何を訊きかれても唯頭を振つて、折々微笑を漏らした。やがて痙攣が始まつた。彼女は叫んだ。「あゝ何といふ怖い——怖い事だらう？」

「何を飲んだ？お言ひ！よ、お言ひ！」と云つた時、シャルルの眼には、これ迄エンマの見た事の無い優しい色が浮んだ。

「彼處！彼處！」と女が幽かに云つた。シャルルは机の傍に飛んで行

つて、其手紙をとるより早く封を破つた。「や、や、こりやア！」

「毒だ！ 毒を飲んだ！」とシャルルは聲を擧げて呼んだ。オメイが驅けつけた。大騒ぎになつた。シャルルは狼狽うろたへて室の中を駆け廻つた。我と我が髪の毛を摑つて、そら中の物に突き當つた。オメイは直に他の醫者に急使を立て、而して慌て騒ぐシャルルに注意して、解毒劑を飲ませる事や、分析する事をとりはからつた。

「泣かないで下さい。もう御迷惑はかけません。」と、エンマは枕元で涙に咽ぶシャルルに云つた。

「どうしてこんな事をして呉れたんだよ。」

「仕方がありません。」

「お前は幸福ぢや無かつたか？ 僕はお前に出來る丈の事はしたんだけれどなア。」

「貴方はほんとに好い方でしたよ。」とエンマは夫の髪を撫でた。エンマは何人も恨む事は無いと思つた。脇の上に身を起して、

「娘を連れて来て——。」と云つた。ベルタは乳母に抱かれてはいつて來た。きょろくと亂れた室の中を見廻して、未だ眼むさうな眼を蠟燭の光にまばゆさうにして、床の上の母を見つけて、

「大きな眼！青い眼！」と云つた。而してエンマが見ると怖いと云つた。手を取らうとすると、厭だと云つた。

「彼方へ連れてお出で！」と、シャルルは室の隅で咽び乍ら云つた。エンマの少し苦み止んだ時、醫師のカニエがやつて來たので、シャルルは喜び極つて、その肩に縋りついて、「御苦勞さます、少しいゝやうです。」

吐劑を呑ませられると血を吐いた。而して再び痙攣が始まつて體に

斑點が出た。エンマは苦しがつて、薬を止めて呉れと乞うた。

もう一人の醫者は、もう駄目だと宣告した。間も無く、エンマは再び痙攣に襲はれて臥辱の上に反りかへつた。エンマはもう此世の人では無かつた。

九

シャルルはエンマの動かなくなつたのを見るや、死骸の上に身を投げて「左様なら、左様なら。」と叫んだ。カニエエとオメイとが、その室から連れ出して、種々に慰めるのを、シャルルはふりもぎつて、「え、承知してますよ。けれどそこ離して下さい。私の女房ですから私が勝手に顔を見るんですよ。」と云つて泣き出した。

シャルルは何時迄もエンマを自分の家に置き度かつたが、僧に諭さ

れて、愈々葬儀を出す事にきめた。彼は、エンマを葬るのに、結婚當時の衣服を著せ、白い靴を穿かせ、花束を持たせ、髪の毛は垂れたまゝにして、それから棺は櫻と桃花心木と鉛と三重にして、棺の蓋は緑色の天鵞絨でこしらへると云ひ出した。人々は皆此餘りに浪漫的な考へに驚いた。

「天鵞絨は少し贅澤過ぎやしませんか、第一費用が——。」とオメイは云つたが、シャルルは何時に無い態度で、「君の知つた事ぢや無い、黙つて居て貰ひ度い！」と叱りつけた。しかし、オメイは別に腹も立てず、通夜にやつて來た。僧ブルニジアンも來て、そして此薄命な佳人のおもひでを語り乍ら、祈禱を捧げた。

翌朝早くシャルルの母もやつて來た。シャルルは母に取縋つて更に新しい涙に咽んだ。母もオメイと同じやうに、葬式の費用について

彼是云つたので、シャルルは怒つた。而してすぐ町へ行つて、葬式に必要な品々を買つて來て呉れるやうにと頼んだ、午後から見舞客が詰めかけたが、シャルルは唯無言のまゝで挨拶した。

女中のフエリシテは、記念かたみの髪の毛が欲しいと云つたが、恐くて側へ寄る事が出来なかつた。シャルルは鍔を執つてその側へ寄つたが、矢張怖いと見えて、手が非常に慄へて、鍔の尖が幾度も其皮膚を突いた。心を勵まして、やう／＼鍔みとつた痕が、美しい黒髪の處々に白くついた。

オメイと僧とは先刻から退屈の餘りに寝込んでゐた。フエリシテは人々の爲に、ブランデイや菓子を用意して置いたが、オメイは到頭我慢が出事無くなつて、

「少しあれを頂かせて貰ひ度い。」と云ひ出した。そこで人々は飲み食

ひを始めて皆愉快さうに笑ひさうめいた。

いよ／＼死骸が棺の中に入れられて、屋外に運ばれた時、エンマの父のルウオオル老人は丁度そこへやつて來た。而して此有様を見ると往來の眞中で氣絶して了つた。老人はオメイからの報知を受取るや、取るものも取り敢へずに出て來たのであるが、手紙の文句は彼を悲ませぬやうにと、ほんやりと書かれてあつたので、未だかうならうとは思ひ掛けなかつた。路傍の梢の鳥の鳴聲が凶わるいので、心配しながらやつて來たのだ、馬にあてた鞭のあとに血が滲んでゐるのでも、どんなに急いでやつて來たか知られた。老人は息を吹き返すと、シャルルの手に縋つて、

「娘はどうしました、娘は？娘は？」と泣いた。「私も娘と一緒に行く。」と云つて泣いた。

やがて鐘が鳴つた。兩側の家の窓から、人々は首を出して葬式の行列を眺めた。

十

翌日、シャルルは、オメイの細君のところへ預けて置いた娘をつれて來た。ベルタが母の事を尋ねた時、シャルルは、阿母おちやさんは外所へ行つたが、軽て玩具おもちゃを澤山買つて歸つて來ると云つてすかした。その後、ベルタは屢々母について問うた。しかし頑是の無い子供心は、間もなく母の事も忘れて了つた。而してシャルルには金の心配が初まつた。

ロオロオはエンマの負債を其夫に向けて厳しく催促した。シャルルは亡妻に屬する物は一つも手離す事を承知しないので、その負債はす

つかり自分で背負はなければならなかつた。シャルルの母は愛想をつかして歸つて了つた。エンマの遺して行つた借金の請求が方々から來た。ロンベロウル嬢は、六箇月分の音樂授業料を請求して來た。貸本屋からも六箇月分の見料を請求して來た。使ひ婆さんは、二十五度手紙を使した賃錢を請求して來た。こんな風に後から後からと出て來た。又、シャルルが、患者に貸して置いた筈の薬料を受取らうとすると、それはいつの間にかエンマがとつてゐた。領收證まで見せられて、面目を失つた事が幾度もあつた。フェリシテはエンマに貸した給金の抵當かたとして取つてあつたエンマの着物を着てゐたが、程なく彼のギロウマンに連れられて逃げた、そのついでにエンマの着物も大方持つて逃げた。

或日シャルルはエンマの室で、ロドルフからの手紙を見つけた。「エンマさん！力を落さずに聞いて下さい——」

彼は眞青になつて石像のやうに突つ立つた。が、讀んでくると、その文句がいかにも鄭重なので漸く安心した。それは神聖戀愛プラトニックラブに違ひ無いと獨言つた。彼は、自分の妻は美人であつたのだから、他人から愛されたり、敬はれたりするのは無理もない事と考へた。

漸困だんくなつて來るので止むを得ず諸道具をも賣り拂つたが、エンマの室だけは決して手を附けないで、食事が済むと屹度そこへ行つて、自分の坐つてゐる前に、亡妻の椅子を据ゑて昔の事を思ひ暮した。傍にベルタが居るばかりで、誰も訪ねて來るものも無かつた。

亡き人に對する尊敬の念から、シャルルは未だ一度もエンマの机の中に祕藏してある手箱を開けて見た事は無かつたが、或日とうく開

けて見た。中にはレオンの手紙が一ぱいはいつてゐた。エンマの不品行は、最早疑ふ可くもなくなつた。シャルルは、咽泣ながら、唸りながら、狂氣のやうに、その邊をあらた檢めはじめた。一つの箱を見出した。蹴破つて見ると、中から艶書につゝまれたロドルフの寫真が飛び出した。

その事があつてから、シャルルは全く心を喪つて了つたやうになつた。病家をも見舞はずに、始終、一室に閉ぢ籠つてゐた。人々が不思議に思つて覗いて見ると、彼は汚ない着物を着て、恐ろしい顔をして泣いて居た。

夏の夕など、彼はベルタを連れて墓地に行つて、眞暗になるまで家に歸らぬ事があつた。

或日、シャルルは唯一匹殘つて居た馬を賣る可く、アーゲエルの町

に行く途中で、端無くもロドルフと逢つた。初め逢つた時は、二人とも眞青になつたが、しまひは互に酒飲相手になるまで馴れて來た。シヤルルは時々盃を措いて、これがエンマに愛せられた男かと、羨ましさうにロドルフの顔を見た。今はもう何人をも恨まなかつた。唯、運命が悪いのだ——斯う彼は思つて居た。

ロドルフと飲んだ翌日、彼は四阿の長椅子あづまやベンチに腰を下してゐた。日光は縞のやうに格子を洩れて、葡萄の葉は、芝生に影を落してゐた。空は青く晴れて、空氣は芳しい香に満ちてゐた。蜜蜂は呻りながら、唉き亂れた百合の花の周圍を舞ひ廻つてゐた。

七時頃、ベルタは、午後の中見なかつた父の姿をこゝに認めて、夕食の迎へに來た。彼の頭は壁によりかゝつて、其目は閉ぢ、其口は明いてゐた。其手には髪の毛の一束ひとそだてを握つて居た。

「お父ちゃん、おいですよ！」とベルタは呼んだ。返事が無いので、調
戯つてゐるんだとベルタは思つて、そつと父を押した。彼は地の上に
轉げ落ちた。彼は死んでゐた。

終

大正三年六月六日印刷
大正三年六月十日發行

世界大著物語叢書第一編

一定價五拾錢—

牛込區矢來町三番地中の丸五十八號
佐藤義亮

發行所 東京市牛込區
矢來町中の丸
新潮社

電話(番町)二二二七
郵局(東京)二二二四
二三番

印刷者
（秀光舎）佐々木俊一
二丁目五十番地
東京獨町區板田町

世界著物語叢書

第一二編

戦争と平和

近刊

▼▼定價五拾錢
郵送料六錢

▼總洋布最上製
マダムボグリと同體裁

『戦争と平和』はトルストイ一代の大作であるばかりでなく、世界を通じての近代文學中、最も大なる作品である。材を大奈翁の莫斯科侵入前後に於ける露西亞の貴族にとり、彼が畢生の大苦悶を披瀝すると同時に、其藝術的大天才の極度を發揮せるもの。之を譯して幾千頁に亘るべき原作は、編者非常の苦心によつて、毫も其感味を害はるゝ事無く、二百頁に短縮された。原作の名に憧れて、未だ是れに接せざる人、接しても通讀する暇なき人々に一本を捧げる。

◎近代名著文庫

▼近代文藝の代表的傑作の翻譯也
每編總洋布製體裁極めて華麗也

第一編 死 の 勝 利

生田長江氏譯
ダントンツイオ作
定價金壹圓四拾錢

第二編 サ フ オ

武林夢想庵氏譯
ドオデエ作
定價金九拾五錢

第三編 遊 蕩 兒

本間久雄氏譯
オスカアワイルド作
定價金壹圓貳拾錢

第四編 煙 (スモオク)

大貫晶川氏譯
ツルゲーネフ作
定價金壹圓貳拾錢

第五編 サ ア ニ ン

中島清氏譯
アルチバーセフ作
定價金壹圓六拾錢

第六編 虐げられし人々

昇曙夢氏譯
ドストエフスキイ作
定價金貳圓貳拾錢

第七編 鄉 愁 (守備兵の話)

後藤末雄氏譯
ヒエール・ロチ作
定價金壹圓
郵送料八錢

▼定價
郵送料

金 壴
錢

翻 譯 書 類

翻譯書

トルストイ 复活(脚本) 島村抱月氏脚色

定價金七拾錢
郵送料八錢

スティンソンテイ 寶島 押川春浪氏譯

(上下二冊) 定價金四拾五錢
郵送料四錢

オスカーリード 獄中記 本間久雄氏譯

定價金四拾錢
郵送料四錢

オスカルアーノード 警句集 生方敏郎氏譯

定價金九拾錢
郵送料八錢

露國新作家集 毒の園 昇曙夢氏譯

定價金參拾五錢
郵送料六錢

ツルネフゲ散文詩 草野柴二氏譯

定價金六拾錢
郵送料六錢

エホフ櫻の園 濱沼夏葉女史譯

定價金六拾錢
郵送料六錢

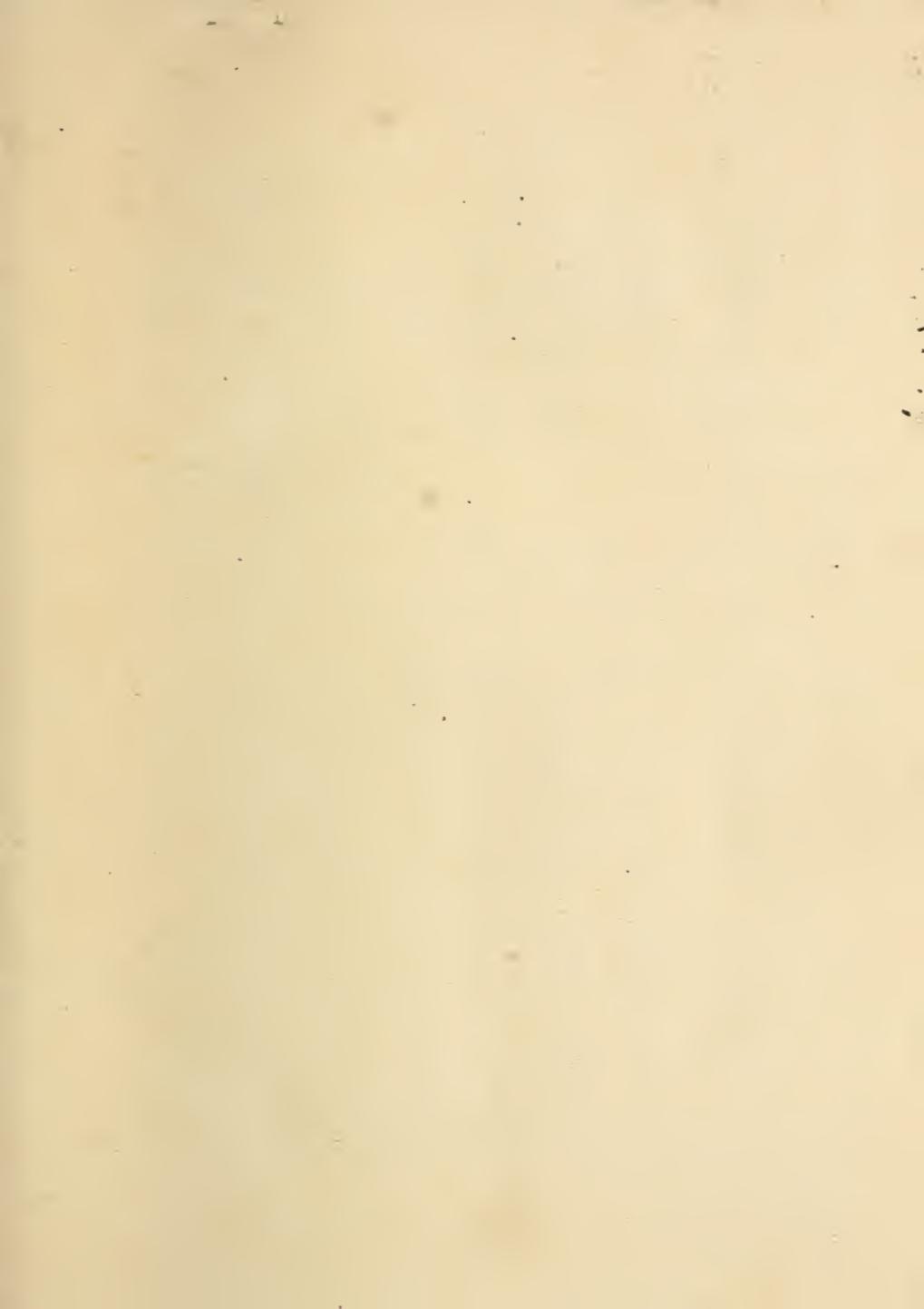
イプセン鴨 (脚本) 森田草平氏譯

定價金六拾錢
郵送料六錢

翻譯書類		評論書類	
ツアラトウストラ	生田ニイチエ著	表象派の文學運動	定價金貳圓參拾錢
アーチャルストライ	岩野泡鳴氏譯	子の父トルストイ	小包料金拾貳錢
イリヤトルストイ	播磨猶吉氏譯	少女の操(エヴァン)	定價金壹圓
ロンカフエロー著	高須梅溪氏譯	女と惡魔	小包料金八錢
ロンカフエロー著	安成二郎氏譯	魯庵、秋聲氏等序	定價金參拾錢
ロンカフエロー著	島村抱月氏著	▼定價金四拾錢	郵送料金四錢
▼定價金七拾錢	相馬御風氏著	▼定價金六錢	▼郵送料金六錢
▼定價金九拾錢	白我生活と文學	▼定價金八拾五錢	郵送料金八錢
金八拾五錢	黎明期の文學	小包料金八錢	小包料金八錢

小説書類

破戒	島崎藤村氏作	▼▼定價金八拾錢 郵送料金八錢
家	島崎藤村氏作	▼▼定價金九拾錢 郵送料金八錢
春	(上下)七拾五錢宛	▼▼(二冊)郵稅八錢宛
微風	島崎藤村氏作	▼▼定價金七拾五錢 郵送料金八錢
徳	島崎藤村氏作	▼▼定價金五拾五錢 郵送料金六錢
爛	徳田秋聲氏作	▼▼定價金五拾五錢 郵送料金六錢
足跡	徳田秋聲氏作	▼▼定價金七拾五錢 郵送料金六錢
廢墟	小川未明氏作	▼▼定價金八拾五錢 郵送料金八錢



丁未年十一月二十八



LC ACQUISITIONS



0 030 471 138 3